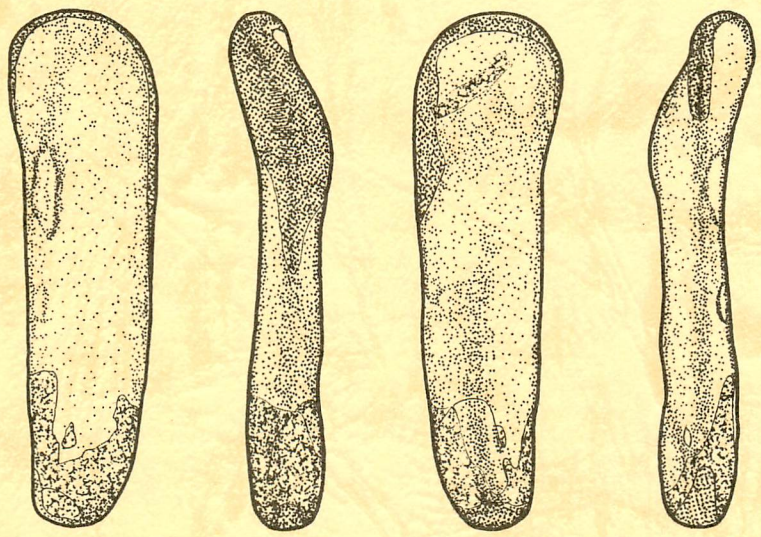
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第154集

山梨県大月市

大月市御所遺跡

―大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書―



1998.3

山梨県教育委員会
建設省関東地方建設局甲府工事事務所

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第154集

山梨県大月市

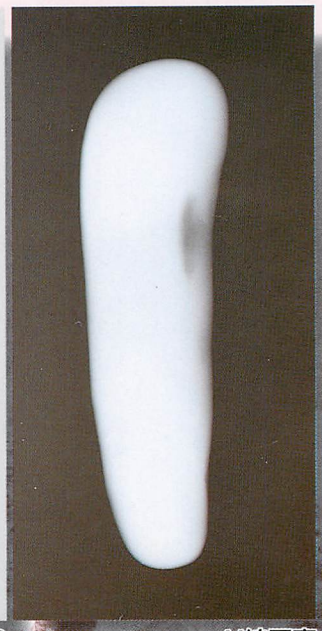
大月市御所遺跡

―大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書―

1998.3

山梨県教育委員会
建設省関東地方建設局甲府工事事務所

2/3



X線写真

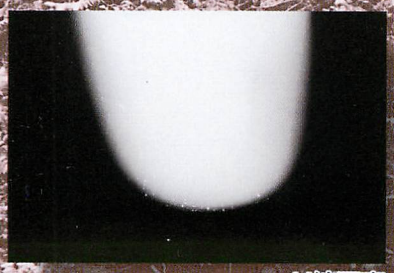
先端部拡大

X線ステレオ写真

朱付着状況

金付着状況

朱・金付着状況



X線写真

第8号　竪穴住居跡出土石杵

X線写真撮影データ：70kv:2mA,90秒,距離100cm
富士TX50フィルム

序

大月市駒橋に所在する御所遺跡は、建設省による大月バイパスの建設に先立ち調査された遺跡です。

調査の結果、縄文時代、奈良・平安時代、中・近世の各時代にわたる遺構や土器・石器・鉄製品などの遺物が発見されましたが、なかでも奈良・平安時代では竪穴住居跡が８軒見つかるなど、当時の集落の存在が明らかとなりました。

そして発見された遺物の中には、先端に金や水銀朱が付着し、仏具といったものの鍍金（金メッキ）に使用されたと見られる石杵が含まれております。この石杵は日本全国でも発見例のない貴重な遺物であり、古代の技術を解明する重要な発見となりました。

また奈良・平安時代の竪穴住居跡で毎日の食事の準備がなされたであろうカマド内の焼土からは、マイワシの骨やムギ類・アワ・マメといった当時の食料の一部が見つかっております。これらの事実からは、この集落に住んでいた奈良・平安時代の人たちはマイワシなどの動物質食料をおかずとし、主食としては雑穀などを日常的に食べていたことがわかります。またこのことは今から1200年も前の昔から、相模湾で捕獲された魚類が干物といった保存食品に加工され、河口からおよそ80㎞も離れたこの大月の地まで桂川（相模川）をさかのぼって交易されていた事実を示しています。

御所遺跡の発掘では、全国にその名を轟かすようなすばらしい遺品や、当時の権力者の力を物語るような巨大な構築物が見つかったわけではありません。むしろどこにでもあるような、ごく普通の人々の生活の痕跡が出てきたわけですが、そこからは、この地の歴史や文化を語る上で今後必ず触れなければならない、今までまったく知られていなかった新たな事実がいくつも判明しました。そしてこれらは発掘調査を行ったからこそ得られた貴重な成果だと申すことができましょう。

最後ではありますが、この発掘調査にあたっては、建設省甲府工事事務所、大月市関係者各位、地元の皆様、そして近年稀にみる酷暑の中、連日の屋外作業もいとわずに従事された地元作業員の皆様など、大変多くの方のお世話になりました。改めてお礼を申し上げたいと思います。

平成10年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　大　塚　初　重

例　言

1　本書は、山梨県大月市駒橋二丁目字仲下420、420-1他に所在する御所遺跡における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、建設省による大月バイパス建設に先立って実施されたもので、調査期間は平成７年（1995年）５月８日～９月13日である。

3　発掘調査は小林公治・高野佳起（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）の両名が担当した。また本書の執筆は、縄文土器を野代幸和（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）が、また縄文時代の小形石器については網倉邦生氏（奈良大学文学部文化財学科卒業）が、それ以外についての執筆と編集は小林が行ったが、文末には執筆者名を記載した。

4　発掘調査および整理作業にあたっては、下記の各位・諸機関から多大なるご指導・ご協力をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

市毛勲、梅沢太久夫、櫛原功一、込江正巳、佐々木満、末木啓介、杉本正文、千賀龍輔、田中広明、奈良泰史、萩原三雄、原正人、平野修、福田正人、宮澤公雄、山下孝司

大月市教育委員会、大月市都市計画課、都留市教育委員会、菊地金粉製作所

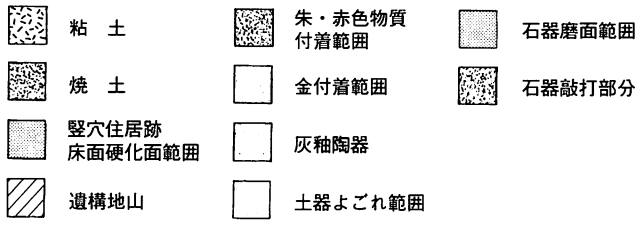
5　発掘調査および報告書作成作業にあたっては、小林安典・伊藤順子・今泉久・奥野久代・帯津まさ子・小俣淳一・小俣吉広・神林啓介・北美幸・久野洋平・近藤みち子・佐々木栄子・佐々木富士子・佐藤あさ子・佐藤友紀・佐藤美須子・清水光子・志村君子・志村恵子・白川義明・鈴木美智恵・鈴木八重子・高鳥英子・高鳥はま子・田代源次・中込星子・中込みち子・中村九二・中山京子・名取洋子・西室春子・平井大三・平川涼子・古屋和喜子・松村恭子・宮武亨・吉村公子・渡辺和子・渡辺麗子の諸氏のご協力を得た（敬称略・五十音順）。

6　御所遺跡の内容に関しては、本報告に先立つものとして遺跡発表会要旨・新聞発表の記事等があるが、内容に異なる点があれば、本報告書の内容が正式なものとなる。

7　土坑・ピットなど遺構特徴が乏しく所属時期の明確でない遺構については、出土遺物の内最も新しい時期のものにより判断した。このため遺構によっては不確実な可能性がある。

8　竪穴住居跡の床面積はプラニメータ（TAMAYA Planix5000）を使用して測定したが、その範囲は周溝部分を含む壁下端内の面積である。

9　挿図で使用したスクリーントーンの凡例は以下の通りであるが、これ以外の場合は必要に応じて図中に凡例として示した。またインレタ等のマークについてもその都度図中において例示した。また須恵器は断面を黒く塗りつぶして示した。



10　本報告書に関わる記録図面・写真・出土遺物等は、山梨県埋蔵文化財センターに保管している。

11　石杵の付着物質の分析およびその記載については、帝京大学山梨文化財研究所鈴木稔氏に委託し、玉稿をいただいた（第３章第４節）。

12　出土石器の石材同定については、帝京大学山梨文化財研究所河西学氏に委託し肉眼観察による同定結果を得た。

13　墨書・刻書土器の文字判読には、国立歴史民俗博物館平川南氏のご教示を給わった。

14　本遺跡で出土した動植物遺体のうち、炭化種実については吉川純子氏（古代の森研究舎）、動物骨については樋泉岳二氏（早稲田大学）に同定を依頼し、その結果を記載した。

15　土層注記の色調表現については、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。

16　挿図上における北は、すべて座標北を示している。

17　図示した遺構・遺物の縮尺は、竪穴住居跡・竪穴状遺構１/60、竪穴住居跡カマド1/20、土坑1/40、焼土遺構1/40、遺構全体図1/200、中・近世平地造成面1/200、縄文時代土器1/3、小形石器（石鏃等）2/3・大形石器（打斧・磨石等）1/3、奈良・平安時代土器1/4、鉄製品1/4、平安時代石器1/3、古銭1/2、陶磁器1/4である。

なお、写真図版は基本的に挿図と同縮尺である。

18　奈良・平安時代遺構の時期については、出土した坏類を主にして現在までに検討されている甲斐型土器の編年（山梨県考古学協会1992、櫛原1992）によって分類し、年代については後者の考察によって修正されたものを提示した。

19　発掘調査時には調査順に遺構名を付けていったが、本報告に当たり時代別に並べ直す必要や欠番・番号飛びを避けるため、できるだけ異動を減らすよう留意しつつ、新たに遺構番号を振り直した。この新旧遺構番号の対応関係は以下の通りである。なお、ピットは遺物を出土したもののみに番号をつけており、それ以外はいずれも時期不明である。

調査時と本書での遺構名対応表

縄文時代

発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
第10号住居跡（SI10)⇒第1号竪穴状遺構	第２号焼土遺構（SF02)⇒第８号焼土遺構（SF08）
第11号住居跡（SI11)⇒第2号竪穴状遺構	第３号焼土遺構（SF03)⇒第９号焼土遺構（SF09）
第8号焼土遺構（SF08)⇒第1号焼土遺構（SF01）	第10号焼土遺構（SF10)⇒第10号焼土遺構（SF10）
第9号焼土遺構（SF09)⇒第2号焼土遺構（SF02）	第11号焼土遺構（SF11)⇒第11号焼土遺構（SF11）
第7号焼土遺構（SF07)⇒第3号焼土遺構（SF03）	第12号　土　坑（SK12)⇒第１号　土　坑（SK01）
第4号焼土遺構（SF04)⇒第4号焼土遺構（SF04）	第14号　土　坑（SK14)⇒第２号　土　坑（SK02）
第5号焼土遺構（SF05)⇒第5号焼土遺構（SF05）	第18Ｎ号土坑（SK18N)⇒第３号　土　坑（SK03）
第6号焼土遺構（SF06)⇒第6号焼土遺構（SF06）	第21号　土　坑（SK21)⇒第４号　土　坑（SK04）
第1号焼土遺構（SF01)⇒第7号焼土遺構（SF07）	

奈良・平安時代

発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
第1号住居跡（SI01)⇒第1号竪穴住居跡（SI1）	第13号土坑（SK13)⇒第７号土坑（SK07）
SX001⇒第2号竪穴住居跡（SI2）	第20号土坑（SK20)⇒第８号土坑（SK08）
第2号住居跡（SI02)⇒第3号竪穴住居跡（SI3）	第18号土坑（SK18)⇒土坑からはずす
第3号住居跡（SI03)⇒抹消（住居ではない）	第11号土坑（SK11)⇒第９号土坑（SK09）
第4号住居跡（SI04)⇒第4号竪穴住居跡（SI4）	第10号土坑（SK10)⇒第10号土坑（SK10）
第5号住居跡（SI05)⇒抹消（住居ではない）	第４号土坑（SK04)⇒第11号土坑（SK11）
第6号住居跡（SI06)⇒第5号竪穴住居跡（SI5）	第８号土坑（SK08)⇒第12号土坑（SK12）
第7号住居跡（SI07)⇒第6号竪穴住居跡（SI6）	第９号土坑（SK09)⇒第13号土坑（SK13）
第8号住居跡（SI08)⇒第7号竪穴住居跡（SI7）	第１号土坑（SK01)⇒第14号土坑（SK14）
第9号住居跡（SI09)⇒第8号竪穴住居跡（SI8）	第７号土坑（SK07)⇒第15号土坑（SK15）
第17号土坑（SK17)⇒第5号土坑（SK05）	03P02⇒第１号ピット（P1）
第16号土坑（SK16)⇒第6号土坑（SK06）	

中・近世

発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
平地造成面⇒平地造成面	第2号土坑（SK02)⇒第16号土坑（SK16）
第１号溝⇒第１号溝（SD1）	09P09⇒第2号ピット（P2）

時期不明の遺構

発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
第15号土坑（SK15)⇒第17号土坑（SK17）	第5号土坑（SK05)⇒第20号土坑（SK20）
第19号土坑（SK19)⇒第18号土坑（SK18）	第6号土坑（SK06)⇒第21号土坑（SK21）
第３号土坑（SK03)⇒第19号土坑（SK19）	

本文目次

序 …… i
例言 …… iii
本文目次 …… v
挿図目次 …… vi
挿表目次 …… vii
図版目次 …… vii
第1章　序説 …… 1
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の概要 …… 1
第1項　調査の方法 …… 1
第2項　遺跡の概要 …… 1
第3節　遺跡の立地と環境 …… 2
第1項　遺跡の立地 …… 2
第2項　御所遺跡周辺の遺跡 …… 4
第2章　検出された遺構 …… 7
第1節　縄文時代の遺構 …… 7
第1項　Ⅰ区 …… 7
第2項　Ⅱ区 …… 7
第2節　奈良・平安時代の遺構 …… 13
第1項　Ⅰ区 …… 13
第2項　Ⅱ区 …… 15
第3節　中・近世の遺構 …… 37
第1項　Ⅰ区 …… 37
第2項　Ⅱ区 …… 37
第4節　時期不明の遺構 …… 40
第1項　Ⅱ区 …… 40
第3章　出土遺物 …… 41
第1節　縄文時代の遺物 …… 41
第1項　Ⅰ区 …… 41
第2項　Ⅱ区 …… 46
第2節　奈良・平安時代の遺物 …… 59
第1項　Ⅰ区 …… 59
第2項　Ⅱ区 …… 59
第3節　中・近世の遺物 …… 63
第4節　大月市御所遺跡第8号竪穴住居跡出土石杵付着の金色と赤色の物質について …… 64
第1項　はじめに …… 64
第2項　分析と結果 …… 64
第3項　まとめ …… 64
第4章　まとめ …… 65
第1節　縄文時代 …… 65
第2節　奈良・平安時代 …… 65
第1項　第8号竪穴住居跡出土石杵の機能と性格 …… 65
第2項　本集落での奈良・平安時代食生活および生業について …… 66
第3項　奈良・平安時代の桂川・相模川水系魚類交易について …… 67
第4項　御所遺跡で奈良・平安時代に行われた諸活動と集落の性格 …… 67
第3節　中・近世 …… 68
引用・参考文献 …… 69

挿図目次

第１図　調査区割り設定図（1/1,000）…… 1
第２図　検出遺構全体図（1/400）…… 3
第３図　御所遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 4
第４図　第１・２号竪穴状遺構平・断面図 …… 8
第５図　第１～６号焼土遺構平・断面図 …… 9
第６図　第７～11号焼土遺構平・断面図 …… 11
第７図　第１～４号土坑平・断面図 …… 13
第８図　第１号竪穴住居跡平・断面図 …… 14
第９図　第２号竪穴住居跡カマド平・断面図 …… 15
第10図　第３号竪穴住居跡平・断面図 …… 16
第11図　第３号竪穴住居跡カマド平・断面図 …… 17
第12図　第４号竪穴住居跡平・断面図 …… 18
第13図　第４号竪穴住居跡カマド平・断面図 …… 19
第14図　第５号竪穴住居跡平・断面図 …… 20
第15図　第５号竪穴住居跡カマド平・断面図 …… 21
第16図　第６号竪穴住居跡平・断面図 …… 22
第17図　第６号竪穴住居跡カマド平・断面図 …… 23
第18図　第７号竪穴住居跡平・断面図 …… 25
第19図　第７号竪穴住居跡カマド平・断面図 …… 27・28
第20図　第８号竪穴住居跡平・断面図 …… 29
第21図　第８号竪穴住居跡カマド平・断面図 …… 30
第22図　第５～９号土坑平・断面図 …… 32
第23図　第10～12号土坑平・断面図 …… 34
第24図　第13・14号土坑平・断面図 …… 35
第25図　第15・20・21号土坑平・断面図 …… 36
第26図　第16号土坑平・断面図 …… 37
第27図　Ⅰ区平地造成面、第１号溝平・断面図（1/200）…… 38
第28図　第17～19号土坑平・断面図 …… 39
第29図　第１号竪穴状遺構出土土器（１） …… 41
第30図　第１号竪穴状遺構出土土器（２） …… 42
第31図　第１号竪穴状遺構出土土器（３） …… 43
第32図　第１号竪穴状遺構出土石器 …… 44
第33図　第２号竪穴状遺構出土土器 …… 45
第34図　第２号竪穴状遺構出土石器 …… 45
第35図　第２・３号土坑出土土器 …… 46
第36図　縄文時代遺構外出土縄文土器（１） …… 47
第37図　縄文時代遺構外出土縄文土器（２） …… 48
第38図　縄文時代遺構外出土縄文土器（３） …… 49
第39図　縄文時代遺構外出土縄文石器（１） …… 50
第40図　縄文時代遺構外出土縄文石器（２） …… 52
第41図　縄文時代遺構外出土縄文石器（３） …… 54
第42図　縄文時代遺構外出土縄文石器（４） …… 56
第43図　縄文時代遺構外出土縄文石器（５） …… 57
第44図　縄文時代遺構外出土縄文石器（６） …… 58
第45図　第１号竪穴住居跡出土土器 …… 59
第46図　第２号竪穴住居跡カマド出土土器 …… 59
第47図　第３号竪穴住居跡出土土器 …… 59
第48図　第４号竪穴住居跡出土土器 …… 60
第49図　第５号竪穴住居跡出土遺物 …… 60
第50図　第６号竪穴住居跡出土土器 …… 61
第51図　第７号竪穴住居跡出土土器 …… 61
第52図　第８号竪穴住居跡出土遺物 …… 62
第53図　ピットおよび遺構外出土奈良・平安時代土器 …… 63
第54図　中・近世出土遺物 …… 63

挿表目次

第１表　御所遺跡周辺の遺跡 …… 5
第２表　縄文時代石器観察表 …… 71
第３表　奈良・平安時代遺物観察表 …… 72
第４表　中・近世遺物観察表 …… 73

図版目次

巻頭図版１　第８号竪穴住居跡出土石杵
図版表紙　遺跡遠景（東から）
図版１　Ⅱ区南から岩殿山を望む・遺跡遠景（北から）
図版２　Ⅱ区全景・作業風景
図版３　第1・2号竪穴状遺構（全景・遺物出土状況）、第1～4号焼土遺構・土坑
図版４　第５～11号焼土遺構（全景・焼土面半裁）
図版５　第１～３号土坑（全景・遺物出土状況）、
　　第１・２号竪穴住居跡（全景・カマド・カマド掘り方）
図版６　第３・４号竪穴住居跡（全景・掘り方・カマド・カマド掘り方）
図版７　第５・６号竪穴住居跡（全景・遺物出土状況・掘り方・掘り方セクション・カマド）
図版８　第６・７号竪穴住居跡（全景・遺物出土状況・掘り方・カマド袖セクション・カマド・カマド掘り方）
図版９　第８号竪穴住居跡（全景・掘り方・カマド・カマド掘り方）、
　　第５～８号土坑（全景・セクション）
図版10　第９～15号土坑（全景・セクション）
図版11　Ⅰ区造成面・第１号溝（西・東から）、第16～21号土坑（全景）
図版12　遺物　縄文土器（第29・30図）
図版13　遺物　縄文土器（第31図）
図版14　遺物　縄文石器（第32・34・39図）
図版15　遺物　縄文土器（第33・35・36図）
図版16　遺物　縄文土器（第37・38図）
図版17　遺物　縄文石器（第40・41図）
図版18　遺物　縄文石器（第42・43・44図）
図版19　遺物　奈良・平安時代土器・陶器（第45～51図）
図版20　遺物　奈良・平安時代、中・近世遺物（第52～54図）、墨書・刻書土器拡大

第1章　序　　説

第1節　調査に至る経緯

大月市を東西に横断する国道20号線（甲州街道）は、古くより江戸と甲州を結ぶ幹線として重要な役割を担ってきた。しかし、近年車両交通量が膨大に増加するにつれ、渋滞が頻繁に起こるようになったため、新たなバイパスの建設が必要となった。そこで現在の市街地を避ける形で国道南側の山地裾際を通すように、同市市街地東端の駒橋から中央自動車道大月インターチェンジのある花咲までバイパスが計画され、建設省によって建設されることになった。当事業用地内には当初からいくつかの遺跡の存在が明らかであったが、本事業の実施に伴い山梨県教育委員会から委託を受けた大月市教育委員会によって平成５年２～３月にかけて試掘確認調査が実施され、各遺跡分布状況が明らかとなった。この調査結果に基づき路線内各遺跡の本調査が計画されたが、御所遺跡の発掘調査はその最初のものとして、山梨県教育委員会の委託を受けた山梨県埋蔵文化財センターが、買収済の用地約1,383㎡に対して平成７年（1995年）５月８日から９月13日の間に実施したものである。

第2節　調査の概要

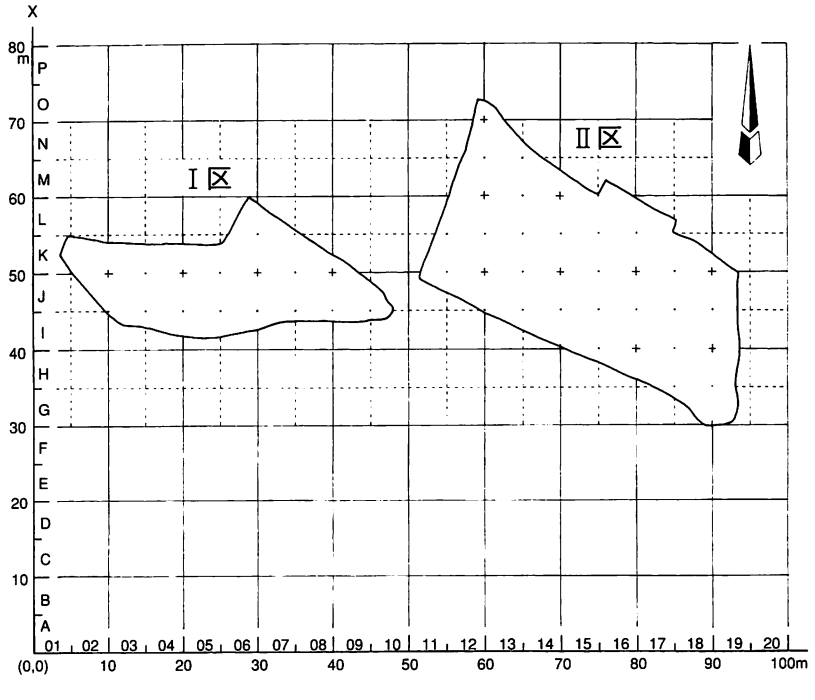
第1項　調査の方法

調査は、既存農道の通行を阻害しないよう、それを挟みⅠ区（約462㎡）とⅡ区（約921㎡）とに分けて実施した。これら両調査区に加え、さらに南北方向にも地形面的に遺跡範囲となる可能性のある部分も覆うようにして、南北方向をＸ軸、東西方向をＹ軸とする国土座標系に合わせたメッシュをかけ、南西隅を基点（Ｘ＝０、Ｙ＝０）とした。さらに調査に際してはＸ・Ｙ両軸の５ｍごとの交点に杭を打ち測量用に使用した。なお基点の国土座標値はX=-43365.000、Y=41415.000である(第１図)。なお、調査時には基点から北に向かって５ｍごとにＡから順にアルファベットを振り、基点から東に向かっては同じく５ｍの長さごとに１から順に番号を割り当て、両者を総合して各スクエアの名前とし、遺物を取り上げる際などの補助とした。

調査区設定の後、重機により耕作土など表土を除去し、引き続いて遺構確認を行なった。段丘面平坦地であるⅠ区では造成による削平がなされたのち埋没したこともあり、表土層が厚く堆積していたが、Ⅱ区はゆるやかな傾斜地でむしろ土砂の流出傾向が強いため、標高の高い頂部では遺構確認面までにごく薄く表土が覆っている程度であった。

表土剥ぎ終了後、遺構確認作業に入り、確認された遺構から順次移植等による掘り下げ作業を行なった。また出土した遺物は基本的に光波測距機によって個別に取り上げ、遺構図および遺物微細図は平板および簡易やり方を適宜選択して実測した。

なお、Ⅱ区では遺構の少ない場所を中心にローム層上面から２ｍ平方のトレンチを４ヶ所設定し、１ｍ強の深さまで掘り下げ旧石器時代遺構・遺物の有無を確認したが、いずれの場所でも石器・礫などの遺物は出土しなかった。



第１図　調査区割り設定図（1/1,000）

第2項　遺跡の概要

御所遺跡は、大月市駒橋２丁目に所在

する。山中湖に端を発した桂川（相模川）は、大月市花咲で笹子川を併せ東遷するが、本遺跡はこの合流地点より下流の右岸段丘面上に広がる現在の大月市街地東端に立地する。Ⅰ区とⅡ区合計約1,400㎡を調査した結果、縄文時代、奈良・平安時代、中・近世、の各時代の遺構・遺物が検出された（第２図）。

縄文時代の遺構は、Ⅰ区では竪穴状遺構２基、Ⅱ区では土坑４基、焼土遺構（炉穴・焼土跡）11ヶ所などが検出された。遺物は総点数（個別取り上げ品と一括取り上げ品のうち実測品の合計）では、土器類666点、石器195点で、区ごとにではⅠ区から土器401点、石器33点ほどが出土し、時期的には中期井戸尻・籐内期を中心としている。Ⅱ区では遺構内外から土器218点、石器147点が出土した。この他一括取り上げ実測品がⅠ区・Ⅱ区あわせて土器が47点、石器15点ある。

奈良・平安時代の遺構には、Ⅰ区では竪穴住居跡２軒、Ⅱ区からは竪穴住居跡６軒、土坑12基などが検出され、遺物は総点数（個別取り上げ品と一括取り上げ品中の実測品数の合計）では土器類1807点、陶器（須恵器・灰釉）類45点、鉄器・鉄滓３点、石器２点で、区ごとではⅠ区から土師器98点、須恵器４点、鉄滓１点、Ⅱ区では土師器1709点、須恵器・灰釉陶器41点、石器２点、鉄器２点が出土している。この他一括取り上げ実測品がⅠ区・Ⅱ区あわせて土器１点がある。

中・近世の遺構には、Ⅰ区では土層断面の観察から水田跡と推測される不定形な平地造成面およびその平地造成面を取り囲むような形で導水・排水のための水路と見られる溝が確認された。これらの遺構の時期については確実な伴出遺物が無いものの覆土中や付近から中近世遺物が出土しており、下限は明らかでないがこの時代のものだと見られる。Ⅱ区では出土遺物から中近世のものと見られる遺構は土坑１基とピット１ヶ所のみである。
遺物は総点数（個別取り上げ品と一括取り上げ品中の実測品数の合計）で陶磁器類５点、土製品１点、渡来銭４点が出土しているが、区ごとに見るとⅠ区では陶磁器類２点・土製品１点が、Ⅱ区では中近世の遺構内やグリッドから陶磁器類３点、渡来銭４点が出土している。

なおこの他に、遺物や覆土などから時期の限定ができなかった土坑が５基、時期推定が可能なものも含めてピットが総計で139ヶ所検出されている。

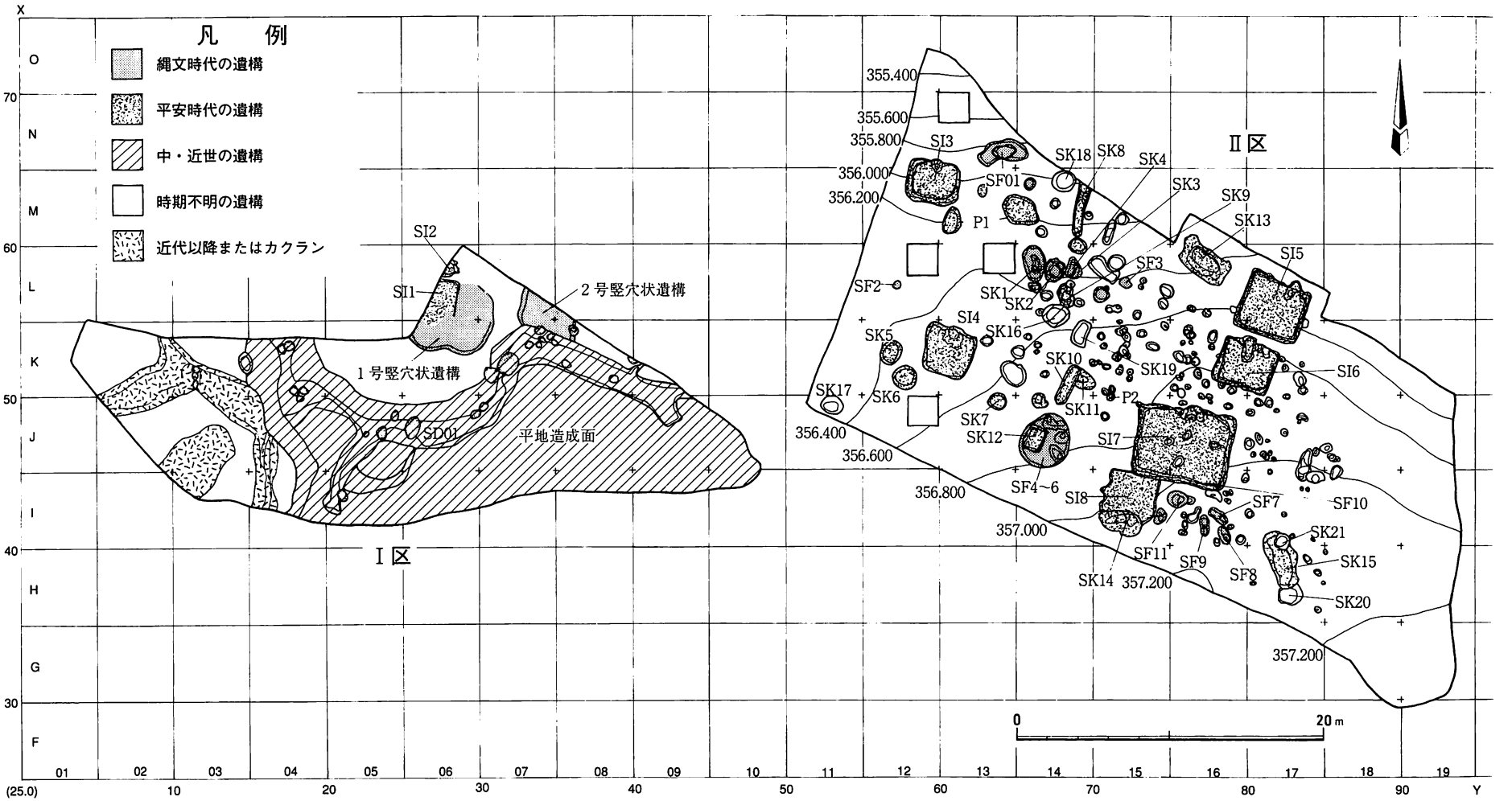
第３節　遺跡の立地と環境

第１項　遺跡の立地

御所遺跡は、現在大月市街地がのっている桂川右岸のやや広い段丘面東端に立地している。遺跡のすぐ南側は段丘崖によって上位面と２ｍほどの段差を持ち、さらにその南間近には山地が迫っている。また北側は造成による段切りによってつくられた国道20号線が数ｍ下を走っており、そこからは桂川に向かって急激に傾斜する崖となっており、現水面高とはおよそ50ｍ以上もの比高差を持つ。一方、東側は南側山地に向かって開析された清水入りの沢と呼ばれる小谷の開口部となっており、谷底に向かってゆるやかに傾斜していく。

このように本遺跡は西側を除く三方に山地や谷が迫っており、こうした立地から本遺跡の範囲は主に西に向かって広がっていると予想される。しかしながら、これらの土地の地目は現在水田となっており、遺物散布の有無が確認できないため、遺跡がどこまで広がっているのかは明らかでない。

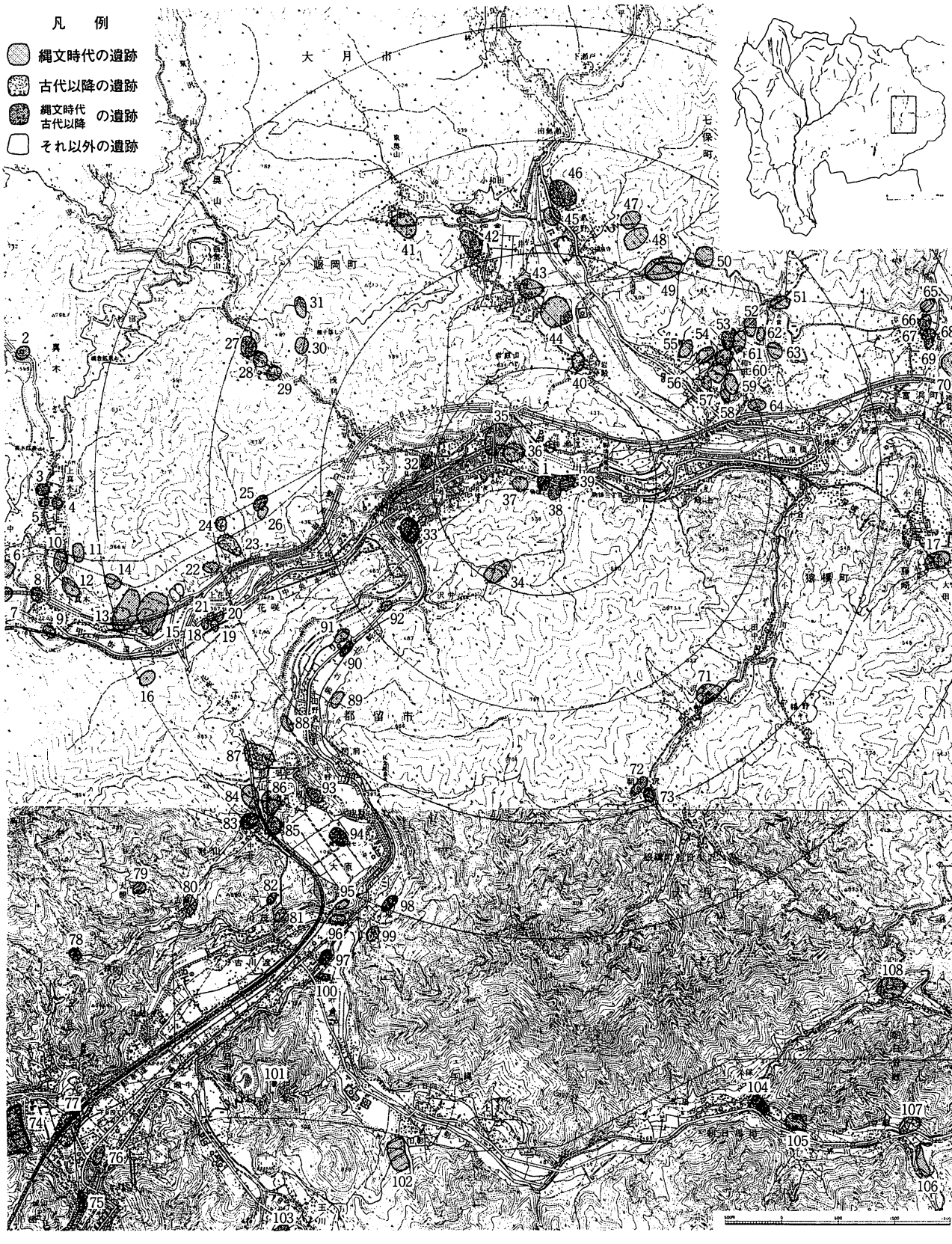
なお、南側の段丘崖境に沿って江戸時代初期（寛永年間頃、1600年代前半）、都留藩谷村城主秋元泰朝の時代に、都留市田野倉・大月市大月・駒橋・殿上・猿橋の五ヶ村によって、灌漑用水および飲料用水供給を目的として開削されたという五ヶ堰用水が流れている。また桂川を挟んだ対岸には、中世に小山田越中守信有が構築した岩殿山の山城がそびえている。



第2図　検出遺構全体図（1/400）

第２項　御所遺跡周辺の遺跡

第３図は大月市遺跡分布図（大月市教育委員会1995）、都留市史（都留市1986）などによって、大月市域から都留市域にかけて桂川流域で現在までに周知されている遺跡の位置・範囲を落としたものである。この図に基づき、御所遺跡で主たる遺構・遺物が検出された縄文時代中期と奈良・平安時代に絞って、周辺遺跡の分布状況を簡単に見てみたい。



第３図　御所遺跡の位置と周辺の遺跡

縄文時代中期　この地域における縄文時代中期の遺跡数は非常に多い。しかしながらその分布状況は一様ではなく、ある程度の偏在傾向が窺われるようである。御所遺跡に近い１～２km内外の距離にはあまり見られず、特に桂川（相模川）流域では大月遺跡が存在する程度であるが、御所遺跡下流で北西に向かって分岐する葛野川両岸にはかなりの数の遺跡が集中している。また御所遺跡の上流1.5km付近で桂川から西に向かって分岐する笹子川では、御所遺跡から３～５kmさかのぼった左岸にかなりの数の遺跡が密集している。一方、笹子川と分岐し南へさかのぼる桂川流域では、狭い渓谷を抜けて比較的広い平野が広がる都留市小形山付近の丘陵上を中心にいくつかの遺跡集中が見られるが、それをさらにさかのぼっていくと、遺跡分布自体も散漫になり、中期の遺跡もややまれな分布となっている。

これら中期遺跡の中で、遺跡内容が注目されるものを挙げてみたい。都留市域では、No.74の牛石遺跡で中期の直径50mにもおよぶ大環状配石および曽利期の竪穴住居跡３軒などが検出され（都留市教育委員会1987）、No.104の尾咲原遺跡では加曽利Ｅ期の敷石住居跡１軒、曽利期の竪穴住居跡25軒などが出土し（都留市1986）、No.94の中溝遺跡では新道・藤内期の竪穴住居跡12軒などが確認（都留市教育委員会1981・山梨県教育委員会1995a）されている。またNo.85の中谷遺跡では中期から晩期にかけての配石遺構、中・後期の竪穴住居跡16軒・土坑60基などが検出されている（都留市教育委員会1981・山梨県教育委員会1995b）、といった内容が明らかになってきている。

大月市域では、No.33の大月遺跡の第３次調査で加曽利Ｅ・曽利式土器が多量に出土したほか（山梨県1998）、第６次調査で竪穴住居跡１軒・敷石住居跡６軒・石囲い炉４基などが検出されており（山梨県埋蔵文化財センター1995）、No.15の原平Ａ遺跡では井戸尻期～曽利期にかけての竪穴住居跡28軒などが調査されているほか、早期の竪穴住居跡56軒など特筆すべき遺跡内容が判明してきている（山梨県1998）。また、No.67～69の宮谷遺跡では曽利Ⅲ期の竪穴住居跡１軒が調査されている（大月市教育委員会1973）。

奈良・平安時代　縄文時代の遺跡に比較し、この範囲で現在までに存在が明らかになっているこの時代の遺跡はかなり少なく、しかも散在的な分布状況を示している。まず御所遺跡近辺では、同じ台地上の西およそ１km強

第１表　御所遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	縄文時代	古代以降	番号	遺跡名	縄文時代	古代以降	番号	遺跡名	縄文時代	古代以降
1	御所	早・前・中・後・晩	奈良・平安	38	清水入	不明		75	城の腰	後	
2	大蓟遊仙橋	中		39	中組	不明		76	滑岩	不明	
3	太田屋敷	中・後		40	円通寺跡		平安	77	鷹の巣		平安
4	上真木辻	中・後		41	日影	中		78	大日影	前・中	平安
5	根の神	中・後		42	畑倉ヤスバ	中		79	大棚	前・中	
6	権現原	中・後		43	木戸狩	中・後		80	古宿	前・中	
7	沢中原Ａ	早・前・中・後		44	岩殿中倉	早・中		81	亀石		平安
8	小佐野	中		45	沖平	早		82	揚久保	前・中・後	平安
9	青木原	中		46	葛野小泉	早・前・中・後	平安	83	中谷入	前	平安
10	中曽根	早・前・中		47	正原１	不明		84	宮脇	前・中	
11	梅久保	中		48	正原２	不明		85	中谷	早・前・中・後・晩	
12	後小路	中		49	太田１	早・前・中		86	松葉	前・中	
13	原平Ｂ	早・前・中・後		50	太田２	中		87	堀之内原		奈良・平安
14	銭神	中		51	クグド	早・中		88	中野原	中	
15	原平Ａ	早・前・中・後		52	東梨木戸１	中		89	山梨	中	
16	幸ノ田	前・中		53	寺原２	早・中・後・晩	平安	90	桃園	前・中・後	平安
17	藤崎岡１~４	中・晩		54	寺原１	中		91	神出	前・中・後	
18	遅郷４	後		55	大境	前・中		92	先ノ宮	前・中・後	
19	遅郷１	中・後		56	花輪	不明		93	原	中	
20	遅郷２	後		57	和田原	中		94	中溝	中	平安
21	遅郷３	後		58	八幡１	中		95	下久保	前	
22	後林	前		59	八幡２	中		96	大久保	不明	
23	芝草		平安	60	下畠	前・中・後		97	前ヶ久保	不明	奈良・平安
24	寺床		中世	61	西梨木戸	中		98	九鬼Ⅱ	中	平安
25	孝道Ⅰ	前	平安	62	東梨木戸２	中		99	九鬼Ⅰ		奈良・平安
26	孝道Ⅱ	前		63	東井尻原	中		100	堀之内原		奈良・平安
27	岩下	中		64	お弥かげ	早		101	生出山頂	早	平安
28	指平	中		65	宮谷白山	中		102	日影	中	
29	浅利入		奈良・平安	66	金山	中		103	宮原	前・中・後	
30	浅利平石１	不明		67	宮谷３	中		104	尾咲原	中・後・晩	平安
31	浅利平石２	不明		68	宮谷２	中		105	神門	早・中・後	
32	天神	後		69	宮谷１	中		106	原開土	中	
33	大月	中・後	奈良・平安・中世	70	袴着	不明		107	落合		平安
34	地蔵窪	不明		71	下小沢	中		108	大平	不明	
35	四本木	中		72	むらさき	中		109	西畑		平安
36	柳田	後		73	朝日小沢	中					
37	延命寺	不明		74	牛石	中	奈良・平安				

の位置に大月遺跡が存在する他、桂川を挟んだ対岸の望める位置に西畑遺跡が占地している。また葛野川や笹子川、浅利川などの小河川流域では、御所遺跡から２～３km内外の距離をもち孤立的に分布する遺跡の存在が明らかになっているに過ぎない。一方桂川を上流にさかのぼった都留市域では、やや広い平野の縁辺丘陵上を中心に、大月市域と比較してやや多くの遺跡がより集中して立地する傾向が窺われるようである。

さてこれらの遺跡の内、調査の結果、遺跡内容が比較的よくわかってきたものを見てみると、都留市域では、No.74の牛石遺跡で奈良・平安時代の竪穴住居跡20軒、掘立柱建物３棟などが検出され（都留市教育委員会1987）、No.98の九鬼Ⅱ遺跡では平安時代の竪穴住居跡14軒（山梨県教育委員会1996）、No.77の鷹ノ巣遺跡では平安時代竪穴住居跡４軒・掘立柱建物跡７棟など（都留市教育委員会1985）、No.94の中溝遺跡では平安時代の竪穴住居跡３軒など（山梨県教育委員会1995a）、No.87の堀之内原遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡などが検出されている（都留市教育委員会1980）。

一方、大月市域ではNo.33の大月遺跡で平安時代の掘立柱建物跡が２棟、溝数条、土坑数十基などが検出されており（山梨県教育委員会1996a）、No.109の西畑遺跡では平安時代の竪穴住居跡14軒などが発掘されている（山梨県考古学協会1997）。またNo.25の孝道Ⅰ遺跡では平安時代の竪穴住居跡４軒が（山梨県1998）、No.15の原平A遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居跡13軒（山梨県1998）が検出されている。

以上のように、この地域での過去の調査事例では、多くても20軒ほどの竪穴住居跡が確認される程度であり、大半は小規模な集落であったと推測される。なお上記遺跡以外で、考古学的には不明なものの、円通寺跡（No.40）と呼ばれる平安時代の山岳修験道寺院が御所遺跡の北１km強の地点に存在したと伝えられている。

（小林）

第２章　検出された遺構

発掘調査の結果、調査範囲から奈良・平安時代竪穴住居跡・土坑などを中心とする遺構・遺物と、縄文時代の竪穴状遺構や焼土遺構など、そして中期を主体とする遺物多数、また中・近世以降の平地造成面などの遺構・遺物が出土した。そこでこれらについて、さらに各時代ごとに詳述して行きたい。

第１節　縄文時代の遺構

第１項　Ⅰ区

Ⅰ区の縄文時代遺構には竪穴状遺構２基がある。

第１号竪穴状遺構（第４図）

第１号竪穴住居跡の下位から検出されたもので、隅丸方形状の平面プランを持つ。西側の一部が調査範囲外まで延びていたり、北壁は途中でローム層への掘り込みが途絶えてしまうため、厳密な規模は不明であるが、若干の推測を交えて計測すると、東西4.5m以上、南北５m以上と推測される。またローム上面からの深さは最深部で70cmほどである。遺構内は底面が中心に向かってすり鉢状に傾斜しているが、特に硬化した部分や炉や石組といった施設は全く確認されなかった。なお、下場での推定底面面積は約19.18㎡である。

遺物は籐内期を中心とする土器297点・石器23点と比較的多量に出土しているが、これらはいずれも覆土上位から中位に集中して出土しており、遺構が掘り込まれた時期より後出するものである可能性がある。

第２号竪穴状遺構（第４図）

もう１基の竪穴状遺構はより規模の小さいもので北側が調査範囲外に、南側は第１号溝に切られ失われている。検出された東西両壁からすると、やはりやや丸みを持った方形に近い形態が推測され、規模は東西で3.7m、深さはローム上面から約10cmほどである。なお、下場で測定した検出部分の底面面積は約6.69㎡である。

遺物は、縄文土器が５点・石器が３点出土している。

第２項　Ⅱ区

Ⅱ区の縄文時代の遺構には、焼土遺構11基、土坑４基、ピットがある。

(1) 焼土遺構

第１号焼土遺構 SF01（第５図）

第１号焼土遺構は調査区西部北際のX=66、Y=64ポイント周辺にあるもので、長軸長約1.50m、短軸長約80㎝を測る長円形の焼土遺構である。第３号焼土遺構と同じく本焼土遺構も確認面上から焼土面が広がっていた。さらに焼土面の下層にも焼土をブロック的に含む褐色土があり、掘り込みを埋め戻して焼土面とした可能性があるが、本遺構完掘後、直下からピットが検出されており、これがその覆土である可能性も完全には排除できない。また燃焼面上に当初から掘り込みがなかったのかどうかは明らかでない。焼土面は厚さ10cm程度あり、非熱の痕跡は顕著であった。

遺物は、縄文土器が２点出土している。

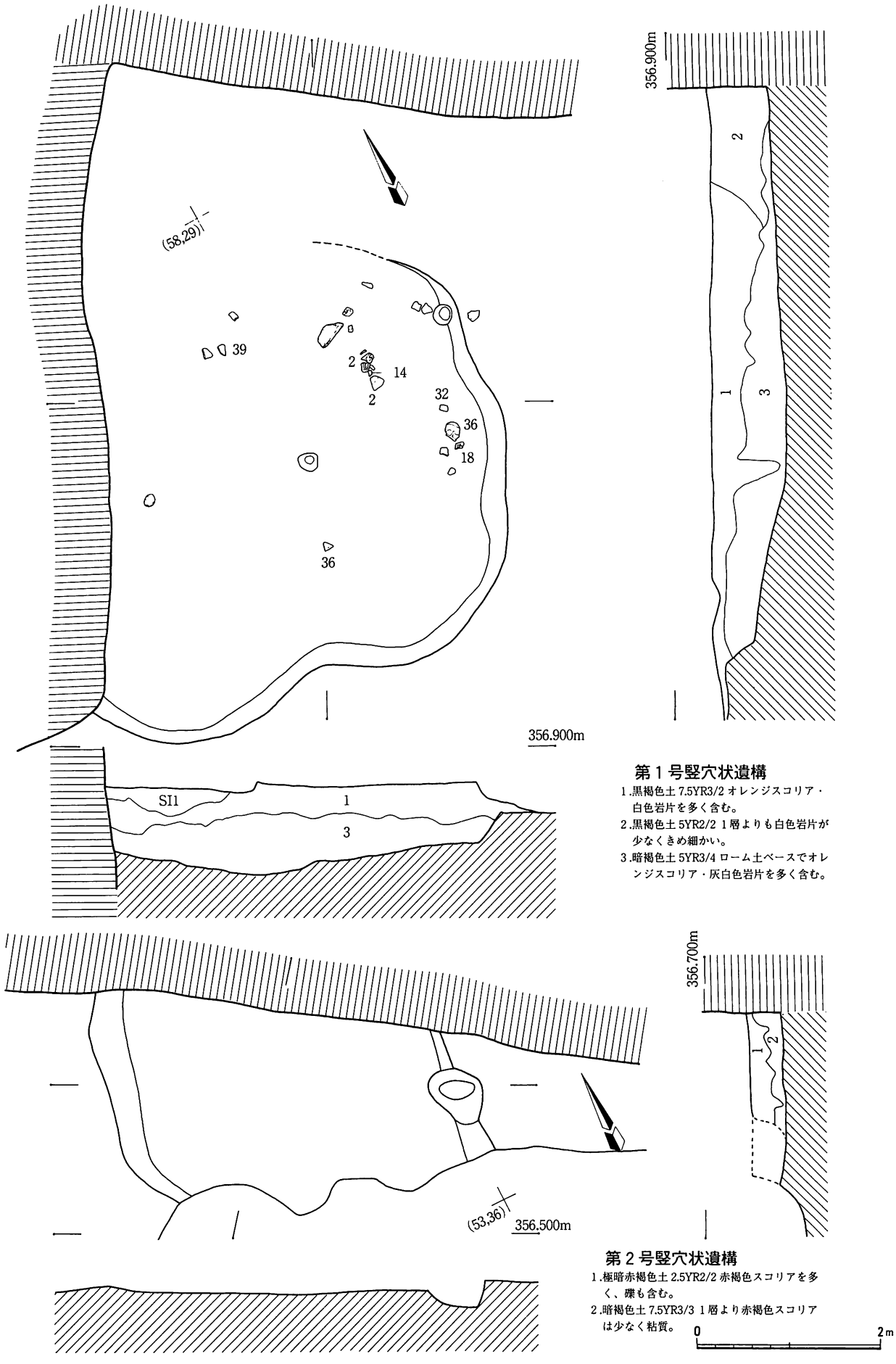
第２号焼土遺構 SF02（第５図）

第２号焼土遺構は調査区西際のX=57、Y=57ポイント周辺にあるもので、長径約60㎝、短径約40㎝を測る長円形の焼土遺構である。本焼土遺構も掘り込みを確認できず、純焼土が確認面上に広がっていた。焼土面の規模は小さく厚さも薄いが、よく赤化し非熱の形跡は顕著である。掘り込みの有無についてはやはり明らかでない。

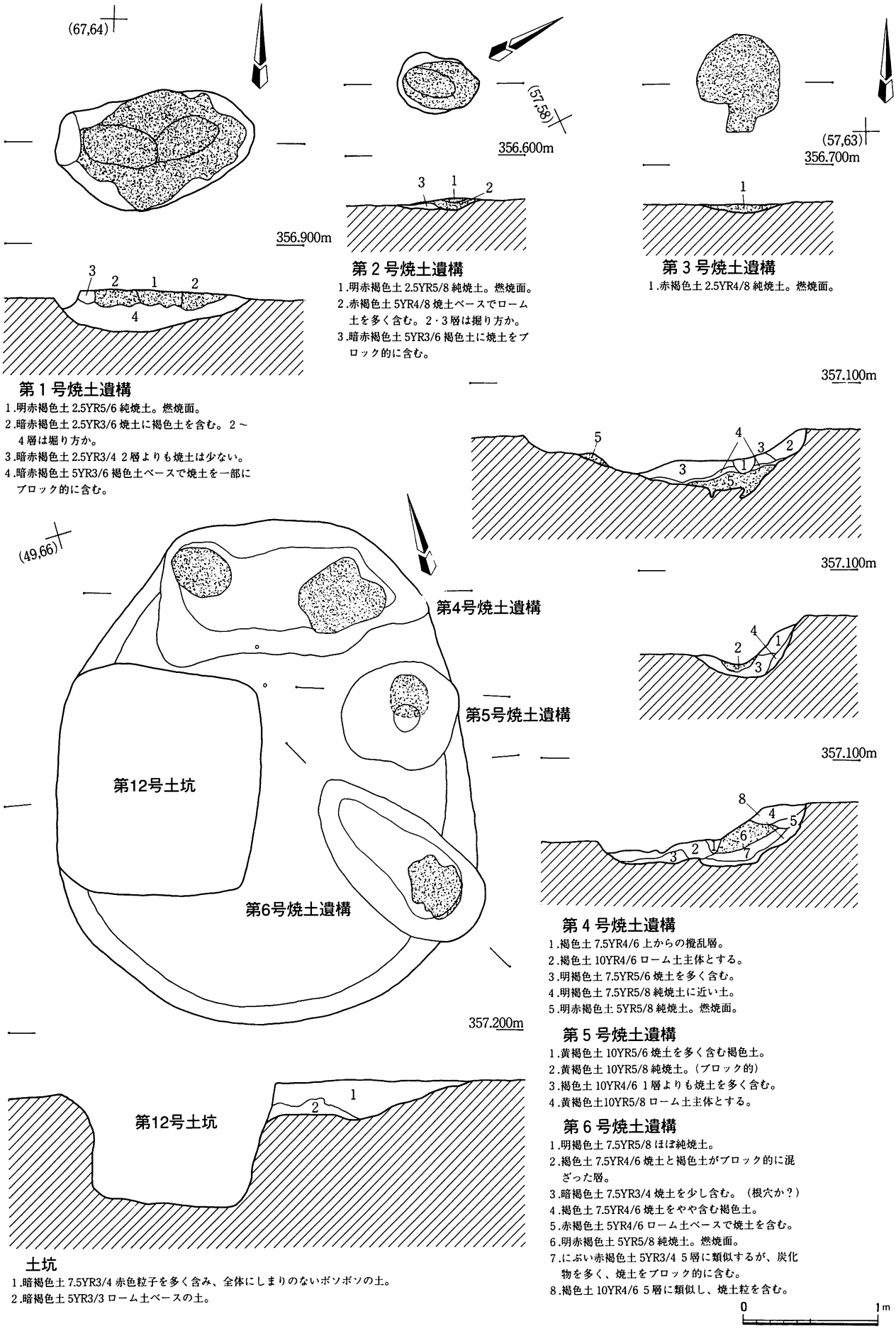
遺物は奈良・平安時代の土師器が２点出土しているが、遺構に伴うものではないと思われる。

第３号焼土遺構 SF03（第５図）

第３号焼土遺構は調査区中央部北寄りのX=57、Y=72ポイント周辺にあるもので、長径約70㎝、短径約50㎝を測る不整な円形の焼土遺構である。本焼土遺構も少なくとも確認面上では掘り込みを確認できず、純焼土が広がっていた。しかしながら、本来掘り込みがあったものが削平等により失われたのか、それとも当初から掘り込み



第４図　第１・２号竪穴状遺構平・断面図



第１号焼土遺構

1.明赤褐色土 2.5YR5/6 純焼土。燃焼面。
2.暗赤褐色土 2.5YR3/6 焼土に褐色土を含む。2～4層は堀り方か。
3.暗赤褐色土 2.5YR3/4 2層よりも焼土は少ない。
4.暗赤褐色土 5YR3/6 褐色土ベースで焼土を一部にブロック的に含む。

第２号焼土遺構

1.明赤褐色土 2.5YR5/8 純焼土。燃焼面。
2.赤褐色土 5YR4/8 焼土ベースでローム土を多く含む。2・3層は掘り方か。
3.暗赤褐色土 5YR3/6 褐色土に焼土をブロック的に含む。

第３号焼土遺構

1.赤褐色土 2.5YR4/8 純焼土。燃焼面。

第４号焼土遺構

1.褐色土 7.5YR4/6 上からの撹乱層。
2.褐色土 10YR4/6 ローム土主体とする。
3.明褐色土 7.5YR5/6 焼土を多く含む。
4.明褐色土 7.5YR5/8 純焼土に近い土。
5.明赤褐色土 5YR5/8 純焼土。燃焼面。

第５号焼土遺構

1.黄褐色土 10YR5/6 焼土を多く含む褐色土。
2.黄褐色土 10YR5/8 純焼土。(ブロック的)
3.褐色土 10YR4/6 1層よりも焼土を多く含む。
4.黄褐色土10YR5/8 ローム土主体とする。

第６号焼土遺構

1.明褐色土 7.5YR5/8 ほぼ純焼土。
2.褐色土 7.5YR4/6 焼土と褐色土がブロック的に混ざった層。
3.暗褐色土 7.5YR3/4 焼土を少し含む。(根穴か？)
4.褐色土 7.5YR4/6 焼土をやや含む褐色土。
5.赤褐色土 5YR4/6 ローム土ベースで焼土を含む。
6.明赤褐色土 5YR5/8 純焼土。燃焼面。
7.にぶい赤褐色土 5YR3/4 5層に類似するが、炭化物を多く、焼土をブロック的に含む。
8.褐色土 10YR4/6 5層に類似し、焼土粒を含む。

土坑

1.暗褐色土 7.5YR3/4 赤色粒子を多く含み、全体にしまりのないボソボソの土。
2.暗褐色土 5YR3/3 ローム土ベースの土。

第５図　第１～６号焼土遺構平・断面図

がなかったのかは不明である。焼土自体は厚さ５cm程度とさほど厚くないが、かなり赤化し非熱の形跡は顕著であった。

遺物は、出土していない。

第４～６号焼土遺構 SF04～06（第５図）

調査区の中央部南寄りに第４～６号の３基の焼土遺構がまとまってつくられている。これらは大きさや形に違いがあるが、いずれも東端を燃焼部としており、共通性が窺われる。

第４号焼土遺構はそのうちで最も北側のX=48、Y=68ポイント周辺にあるもので、長軸長約２m、短軸長約１m、深さ約40cmである。平面プランはいびつな長方形で、緩やかに傾斜している。本焼土遺構では東端・西端の２カ所に燃焼面が形成されているが、西側のものは小規模で焼土も薄い。一方東端の燃焼面は厚さ20cm以上にも形成され、非熱の形跡が顕著である。こうした状況から東側の燃焼面が主に使用されたと考えられる。覆土は上層は以下に述べる土坑と共通し、下層には焼土が多量に含まれている。

なお、燃焼部土壌の水洗選別の結果、オニグルミ破片が少量検出されている。

第５号焼土遺構は第４・６号に挟まれるようにして、X=47、Y=68ポイント周辺にあるもので、長軸長約90cm、短軸長約80cm、深さ約30cmである。平面プランはいびつな円形で、緩やかに掘り込まれており、燃焼面は他の２基と比較すれば、規模は小さく形成された焼土量も少ない。覆土は土坑と同じである。

第６号焼土遺構は最も南側のX=46、Y=68ポイント周辺にあるもので、長軸長約1.50m、短軸長約70cm、深さ約30cmである。平面プランはやや不整な長円形で、緩やかに掘り込まれている。東端の燃焼面は厚く被熱の痕跡が顕著であるが、その下層にも炭化物や焼土粒を含む褐色土があり、一度掘り込みその後に埋め戻した上で使用されたと思われる。覆土の上層は土坑と共通し、下層には焼土が多量に含まれている。

なお、燃焼部土壌の水洗選別の結果、オニグルミ破片が少量検出されている。

以上述べた３基の焼土遺構東側縁辺に沿うように、南北方向にやや長い楕円形の平面プランを持つ土坑が作られている。この土坑は第12号土坑に西半部を切られていることから奈良・平安時代よりも古いこと、また配置に加え土坑の深さが焼土遺構底面よりも若干高い程度であること、さらに焼土遺構との切り合い関係も確認できなかったことから、これら焼土遺構と一連のものとしてつくられた土坑である可能性が強いと見られる。規模は南北長約3.70m、東西長約3.10cm、深さ約20cmほどと大形である。覆土はローム土ベースの暗赤褐色のみからなり、壁面から緩やかに移行しほぼ水平な底面に至っている。

なお、遺物は出土していない。

第７～９号焼土遺構 SF07～09（第６図）

調査区の中央部南寄り、第７号竪穴住居跡の南東にいくつかの焼土遺構がまとまって作られている。さらにその内の第７～９号の３基の焼土遺構は、ほぼ同規模のものがまとまって小群をつくっている。いずれも長軸は北西ー南東方向で、その南東端を燃焼部としている。

第７号焼土遺構はそのうちで最も北側のX=42、Y=78ポイント周辺にあるもので、長軸長約1.30m、短軸長約60cm、深さ約20cmである。平面プランはいびつな長円形で、燃焼面は厚さ20cmほども形成され、かなりの非熱を受けた形跡を示している。覆土は焼土を少量含む暗赤褐色が主体となっている。

なお、燃焼部土壌を水洗選別した結果、オニグルミ破片が多く検出されている。

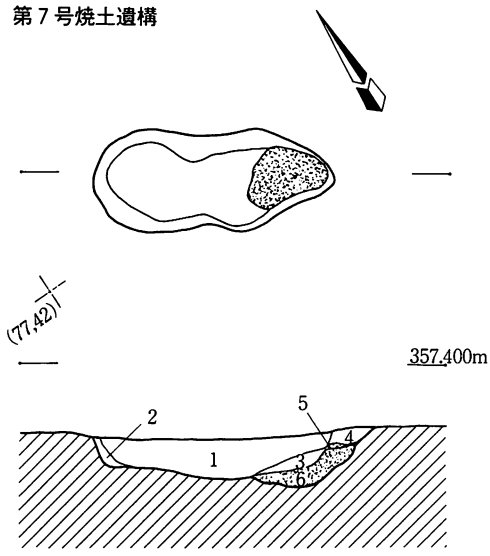
第８号焼土遺構は第１号焼土遺構南のX=41、Y=78ポイント周辺にあり、長軸長約1.30m、短軸長約50cm、深さ約20cmを測る。平面プランは長円形で、燃焼面は場所によりムラがあるが、純焼土は厚さ15cmほども形成され、やはりかなりの非熱を受けた形跡を示している。覆土は焼土を全体に含む暗赤褐色を主体とする。

なお、燃焼部土壌を水洗選別した結果、オニグルミ破片が若干検出されている。

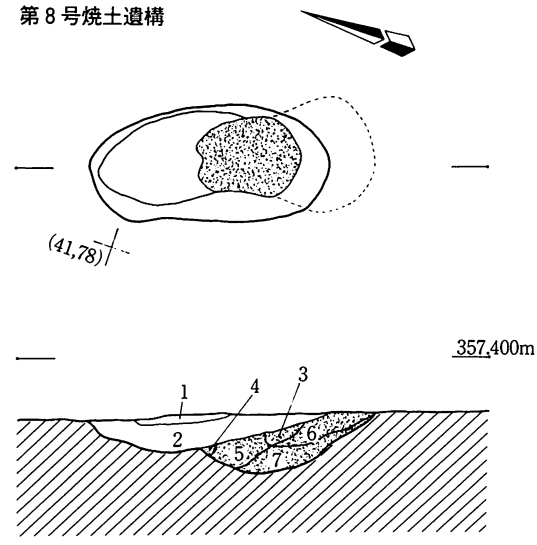
第９号焼土遺構は第１号焼土遺構の南西のX=41、Y=77ポイント周辺にあり、規模は長軸長約1.30m、短軸長約50cm、深さ約25cmである。平面プランは長円形で、燃焼面がやはり厚さ20cmほども形成され、かなりの非熱を受けている。覆土は上層が褐色土を主体とし、下層は焼土粒を多く含む暗赤褐色となっている。

遺物は、第８号焼土遺構から石器が１点出土している他、燃焼部土壌を水洗選別した結果、炭化種実塊が少量

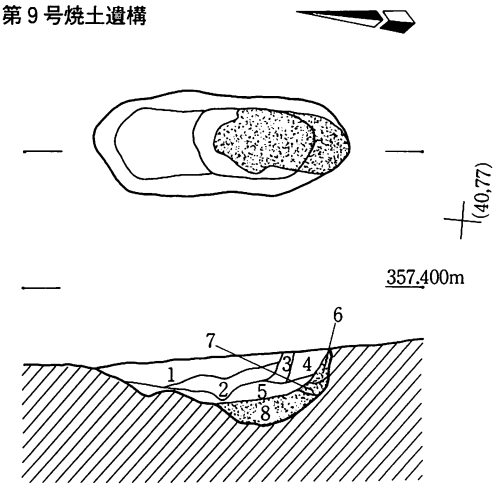
第７号焼土遺構



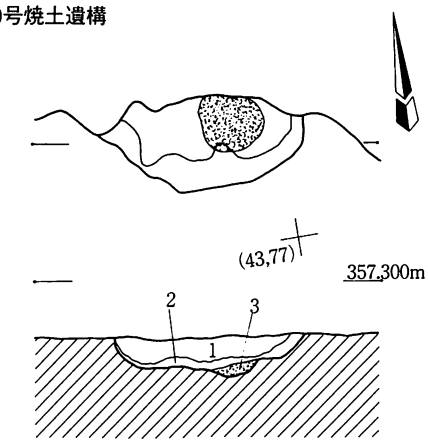
第８号焼土遺構



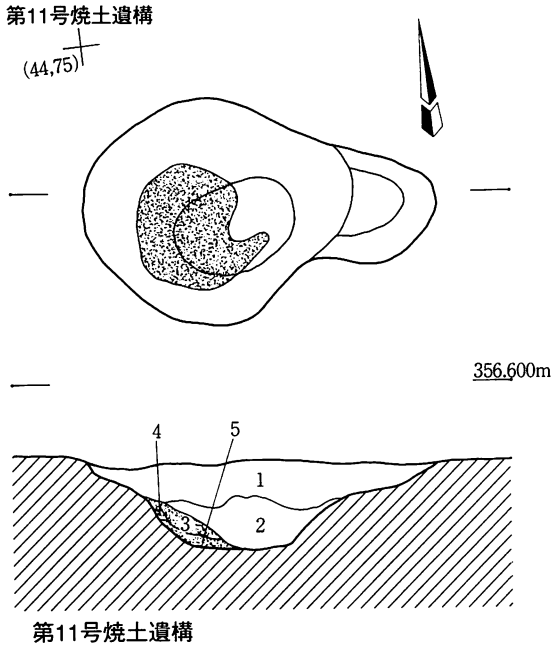
第９号焼土遺構



第10号焼土遺構



第11号焼土遺構



第７号焼土遺構

1.暗赤褐色土 5YR3/6 焼土を少し含む。
2.褐色土 7.5YR4/6 ローム土を主体とする。
3.赤褐色土 2.5YR4/8 純焼土に近い。
4.暗赤褐色土 5YR3/4 焼土を多く含む褐色土。
5.赤褐色土 5YR4/8 ほぼ純焼土。５・６層は燃焼面。
6.明褐色土 5YR5/6 純焼土。

第８号焼土遺構

1.赤褐色土 5YR4/6 焼土を含む。
2.暗赤褐色土 5YR3/4 焼土を全体に含む。
3.にぶい赤褐色土 5YR3/4 焼土をブロック的に含む褐色土。
　３～７層は燃焼面。
4.にぶい赤褐色土 5YR3/4 ３層に同じ。
5.赤褐色土 2.5YR4/8 よく焼けた純焼土。
6.赤褐色土 5YR4/8 純焼土だが、比熱度は５層よりも弱い。
7.暗赤褐色土 5YR3/6 焼土を多く含む褐色土。

第９号焼土遺構

1.暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒を多く、焼土をやや含む。
2.極暗褐色土 7.5YR2/3 砂粒・焼土をほとんど含まない。
3.暗赤褐色土 5YR3/3 焼土を多く含む。
4.暗赤褐色土 5YR3/3 ２層に似てるが、焼土粒をまばらに含む。
5.暗褐色土 7.5YR3/4 焼土ベースの土。
6.暗赤褐色土 5YR3/4 焼土粒を含む褐色土。６～８層は燃焼面。
7.暗赤褐色土 5YR3/6 ８層よりも焼土を少ない。
8.赤褐色土 5YR4/6 ローム質の土に焼土を多く含む。

第10号焼土遺構

1.暗褐色土 10YR3/4 焼土粒を少し、ローム土ブロックを一部に含む。
2.褐色土 7.5YR4/6 ローム土ベースで、焼土を少し、橙褐色スコリアを全体に含む。
3.暗褐色土 2.5YR3/6 純焼土。燃焼面。

第11号焼土遺構

1.暗褐色土 7.5YR3/4 橙褐色スコリアを多く含む。
2.褐色土 7.5YR4/6 １層土を主体とし、焼土粒を多く含む。
3.にぶい橙色土 2.5YR4/6 ローム土と焼土が混ざった土。
　３～５層は燃焼面。
4.暗赤褐色土 2.5YR3/4 ローム土に焼土を少し含む。
5.暗赤褐色土 2.5YR3/6 純焼土。

0　1m

第６図　第７～11号焼土遺構平・断面図

検出されている。

第10・11号焼土遺構 SF10・11（第６図）

調査区の中央部南寄り、第７号竪穴住居跡の南東にいくつかの焼土遺構がまとまって作られているが、先述の第７～９号焼土遺構群の他に、第10・11号の２基の焼土遺構も小群をつくっている。

第10号焼土遺構はX=44、Y=77ポイント周辺にあるもので、第７号竪穴住居跡によって破壊され、南半部分がかろうじて遺存していたものである。長軸長約1.10m、短軸長は約50cm、深さ約20cmで、平面プランは長円形、燃焼面は底面やや東よりにあるが、厚さ５cmほどと薄く赤化度も弱いため、さほど非熱を受けた形跡は見られない。覆土は焼土粒を少量含む暗褐色が主体となっている。

第11号焼土遺構は第10号焼土遺構の南西、X=43、Y=75ポイント周辺にあり、長軸長約1.90m、短軸長約1.20m、深さ約50cmを測る。平面プランはやや不整な楕円形で、燃焼面は西端にある。純焼土は厚さ10cm強ほど形成され、顕著に赤化していることからかなりの非熱を受けた形跡を示している。覆土は暗褐色土を主体とし、スコリアや焼土粒を含む。

なお、遺物は出土していない。

(2) 土坑

第１号土坑 SK01（第７図）

本土坑は調査区のやや西寄り、X=59、Y=66ポイント周辺に位置する。東側に第４号土坑がある。平面プランは南北に長い不整楕円形で、縁辺から緩く傾斜してほぼ水平な底面に至り、さらに一段低い不整形なピットに落ち込む。規模は長軸長約2.40m、短軸長約1.40m、深さは一段目で20cmほど、２段目の最深部で40cmほどを測る。覆土はローム土を主体とする褐色土である。また底面から五領ヶ台式土器の埋甕が検出されている。この土器以外の出土遺物は縄文土器10点、奈良・平安時代土器２点がある。埋甕などからすれば縄文時代中期に所属するものと考えられる。

第２号土坑 SK02（第７図）

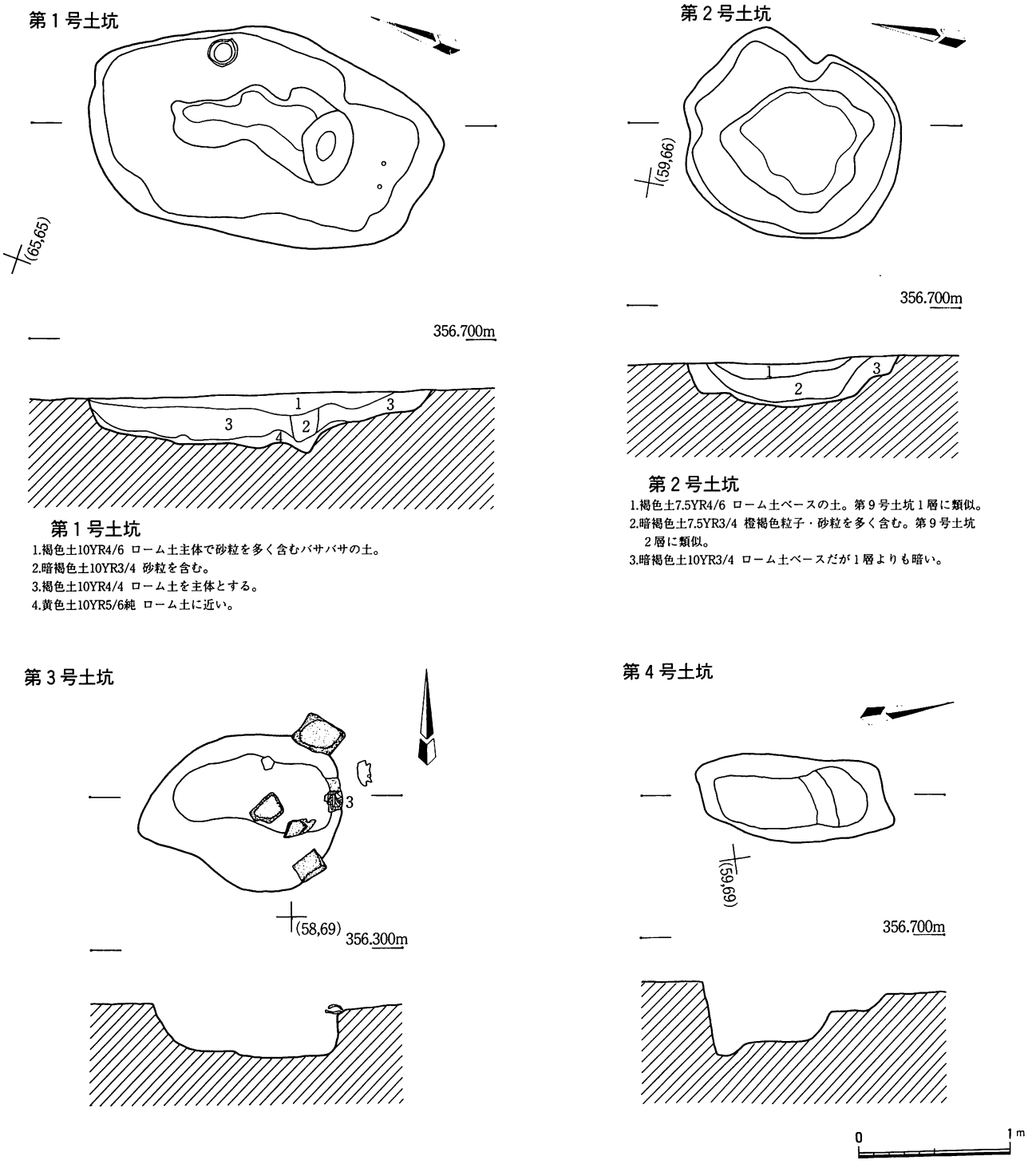
本土坑は調査区のやや西寄り、X=58、Y=68ポイント周辺に位置する。西側に第３号土坑がある。平面プランは不整な楕円形で、第12号土坑と同様に、縁辺から緩く傾斜してほぼ水平な底面に至り、さらに一段低い不整方形のピットとなる。規模は長軸長約1.50m、短軸長約1.20m、深さは一段目で20cmほど、２段目で30cmほどを測る。覆土はローム土や砂粒含む褐色土である。出土遺物は縄文土器のみが６点出土している。

第３号土坑 SK03（第７図）

本土坑は調査区のやや西寄り、X=58、Y=69ポイント周辺に位置する。第４号土坑に西側半分を切られている。平面プランはやや不整な長円形で縁辺から急激に落ちてほぼ水平な底面となる。規模は長軸長約1.40m、短軸長約１m、深さ30cmほどで、東側確認面レベルおよびその付近から中期などの縄文土器３点・石器２点が出土しており、遺構の時期もこれらとほぼ同じと推測される。

第４号土坑 SK04（第７図）

本土坑は調査区のやや西寄り、X=58、Y=69ポイント周辺に位置する。南側には第11号土坑がある。平面プランは不整な長方形で、縁辺から急激に落ち、北に向かって底面にいくつか段を持っている。規模は南北長約1.20m、東西幅約１m、最深部で深さは50cmほどを測る。出土遺物には縄文土器２点があり、これらと遺構の切り合い関係から縄文時代に所属するものと考えられる。



第７図　第１～４号土坑平・断面図

第２節　奈良・平安時代の遺構

第１項　Ⅰ区

先述したように、Ⅰ区調査範囲の多くが中近世のものと見られる平地造成面・溝によって広く削平されているため、それ以前の遺構は北西部に限って確認されている。このうち奈良・平安時代の遺構には竪穴住居跡２軒がある。

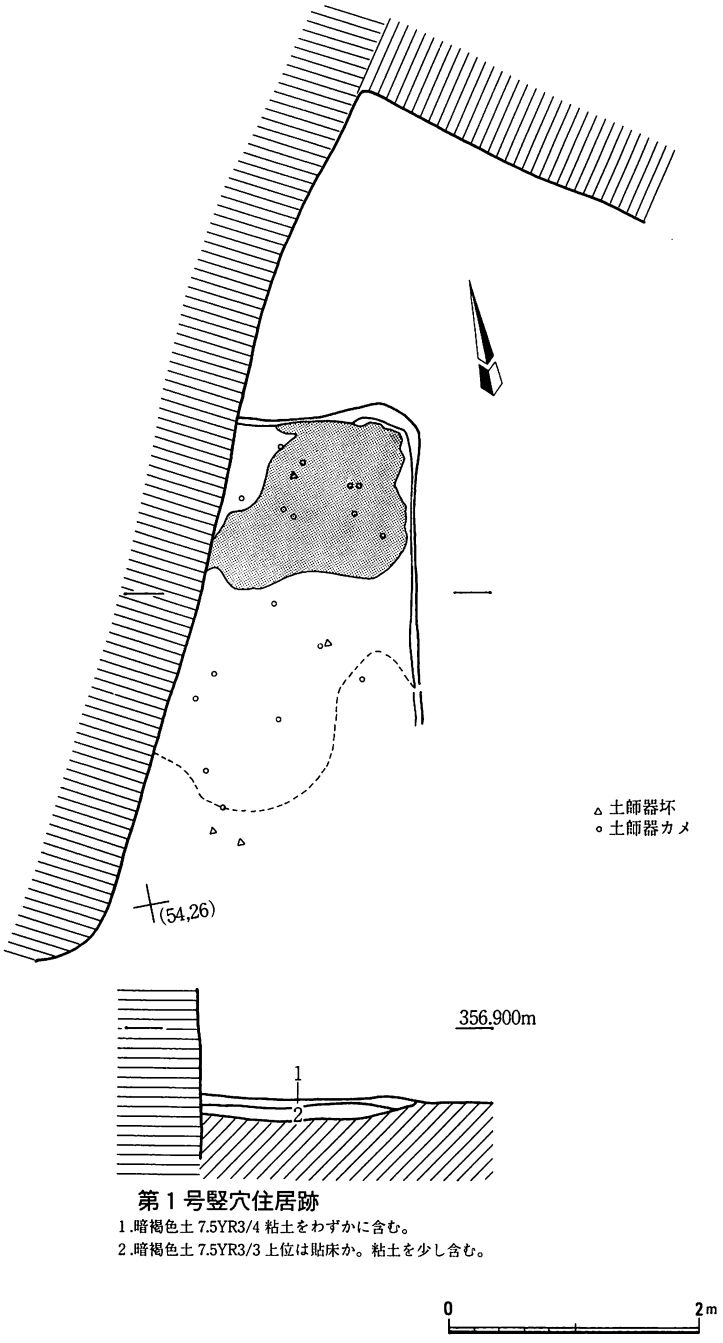
第１号竪穴住居跡 SI１（第８図）

本竪穴住居跡は調査区中央北寄り、X=54、Y=25ポイント北から検出されたものである。北・東壁と床面の一部のみがかろうじて確認できたものであり、西側はさらに調査区外までのびている。このため規模や全体の形状は不明であるが、遺存する東壁から推測すると、主軸方位はN-10°-Eとやや東に偏向する方形の住居跡だと思

われる。規模は少なくとも南北3.10m以上、東西1.90m以上で、床面積は調査範囲で4.41m²である。

掘り方はごく浅く緩やかに掘り込まれているだけのようであり、それを10cmほど埋め戻して床面としているが、北東隅から中心にかけてやや硬化した床面が確認された。なおカマドの付設位置は不明であり、柱穴等も検出されていない。

遺物は、土師器坏５点、甕22点、須恵器坏１点が出土しているが、器形や整形技法を図化できるものは無く、住居跡の時期も９～10世紀という範囲で押さえられる程度である。



第１号竪穴住居跡
1.暗褐色土 7.5YR3/4 粘土をわずかに含む。
2.暗褐色土 7.5YR3/3 上位は貼床か。粘土を少し含む。

第８図　第１号竪穴住居跡平・断面図

第２号竪穴住居跡 SI２（第９図）

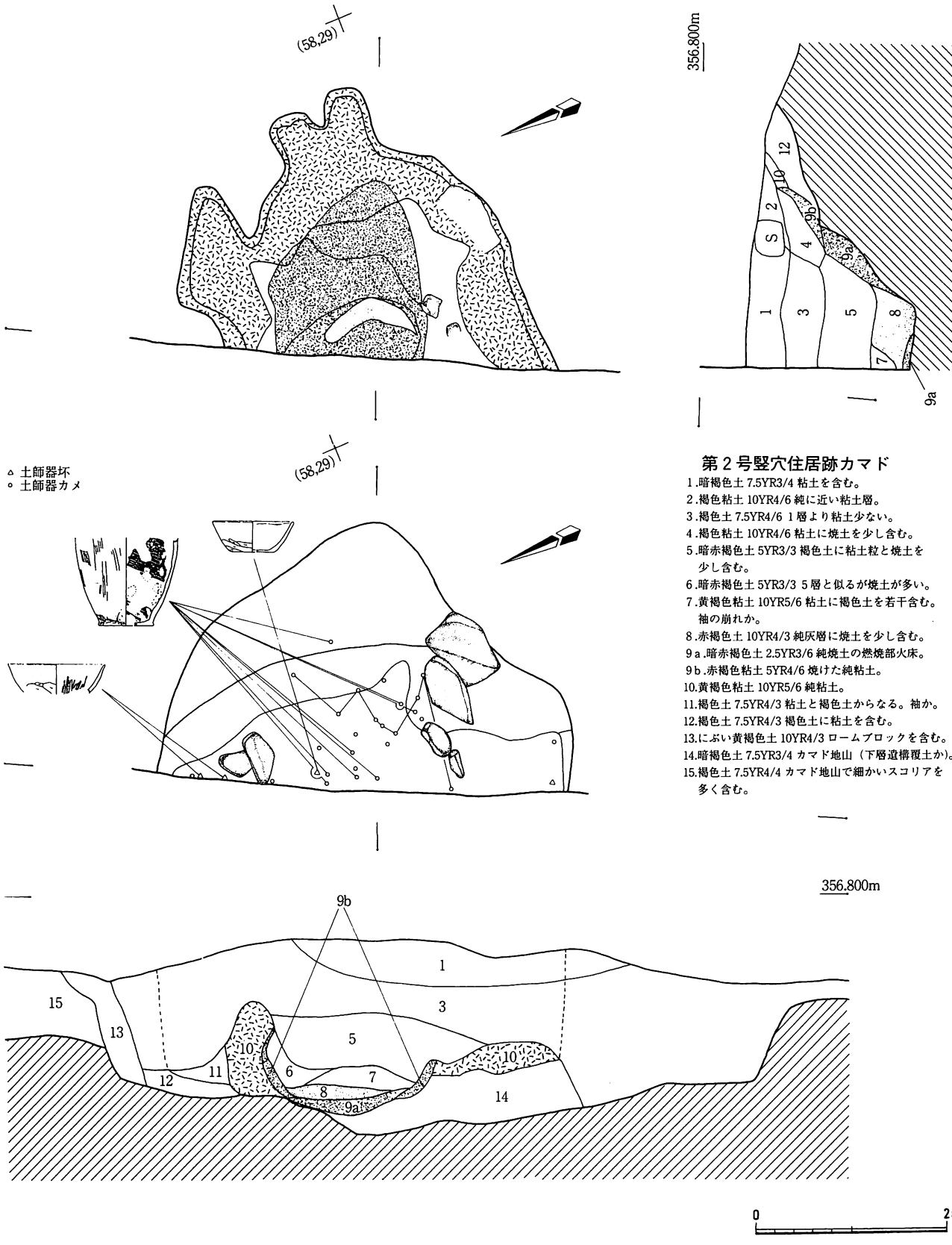
本住居跡は第１号竪穴住居跡の北、X=57、Y=27ポイント北に位置するが、住居の大半は西側の調査区外にあり、検出できたのはカマド燃焼部から煙道にかけてのみであって、住居の形状・規模等については全く不明である。

カマド　カマド自体の遺存状況は非常によい。東壁が検出されていないことから、カマド掘り方は幅およそ1.50m、長さは少なくとも95cm以上、確認面から深さ約50cmほど壁外も掘り込んでいる。そして掘り込んだ周縁全体に横褐色粘土をかなり入念に貼り付け袖および煙道とするが、さらに袖の一部にはやや大きめの礫も組み込んで補強している。この両袖に挟まれた底面および三側面は被熱によりかなり赤化しており、壁外であるこの部分が燃焼部として使用されたことが明瞭に確認できる。また燃焼面上には焼土を若干含む灰層が残っていた。またこのような状況から、燃焼部から煙道まではほとんど距離を持たず、最初およそ60°の角度で立ち上がり中位で約30°とやや角度を緩めて煙を排出するような構造であったと見られる。

遺物出土状況　奈良・平安時代の遺物は31点出土しており、その内訳は土師器坏５点、甕26点である。調査範囲がきわめて限られているため分布傾向は明らかでないが、いずれもカマドの燃焼部を中心に出土し、接合関係もごく近接している。

またカマド内土壌の水洗選別により、アワ・オニグルミ・マメ科の種実・炭化塊および動物骨が検出されている。

なお遺構の時期については良好な出土土器が少なくはっきりしないが、図示した坏とその出土位置を考慮すると、甲斐型土器編年のⅧ期、９世紀第２四半世紀を中心としたものと考えられる。



第２号竪穴住居跡カマド

1.暗褐色土 7.5YR3/4 粘土を含む。
2.褐色粘土 10YR4/6 純に近い粘土層。
3.褐色土 7.5YR4/6 1層より粘土少ない。
4.褐色粘土 10YR4/6 粘土に焼土を少し含む。
5.暗赤褐色土 5YR3/3 褐色土に粘土粒と焼土を少し含む。
6.暗赤褐色土 5YR3/3 5層と似るが焼土が多い。
7.黄褐色粘土 10YR5/6 粘土に褐色土を若干含む。袖の崩れか。
8.赤褐色土 10YR4/3 純灰層に焼土を少し含む。
9a.暗赤褐色土 2.5YR3/6 純焼土の燃焼部火床。
9b.赤褐色粘土 5YR4/6 焼けた純粘土。
10.黄褐色粘土 10YR5/6 純粘土。
11.褐色土 7.5YR4/3 粘土と褐色土からなる。袖か。
12.褐色土 7.5YR4/3 褐色土に粘土を含む。
13.にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロックを含む。
14.暗褐色土 7.5YR3/4 カマド地山（下層遺構覆土か）。
15.褐色土 7.5YR4/4 カマド地山で細かいスコリアを多く含む。

第９図　第２号竪穴住居跡カマド平・断面図

第２項　Ⅱ区

奈良・平安時代の遺構には、竪穴住居跡６軒、土坑12基、ピット１ヶ所があり、これらおよび遺構外から土器・鉄器・石器などが出土している。

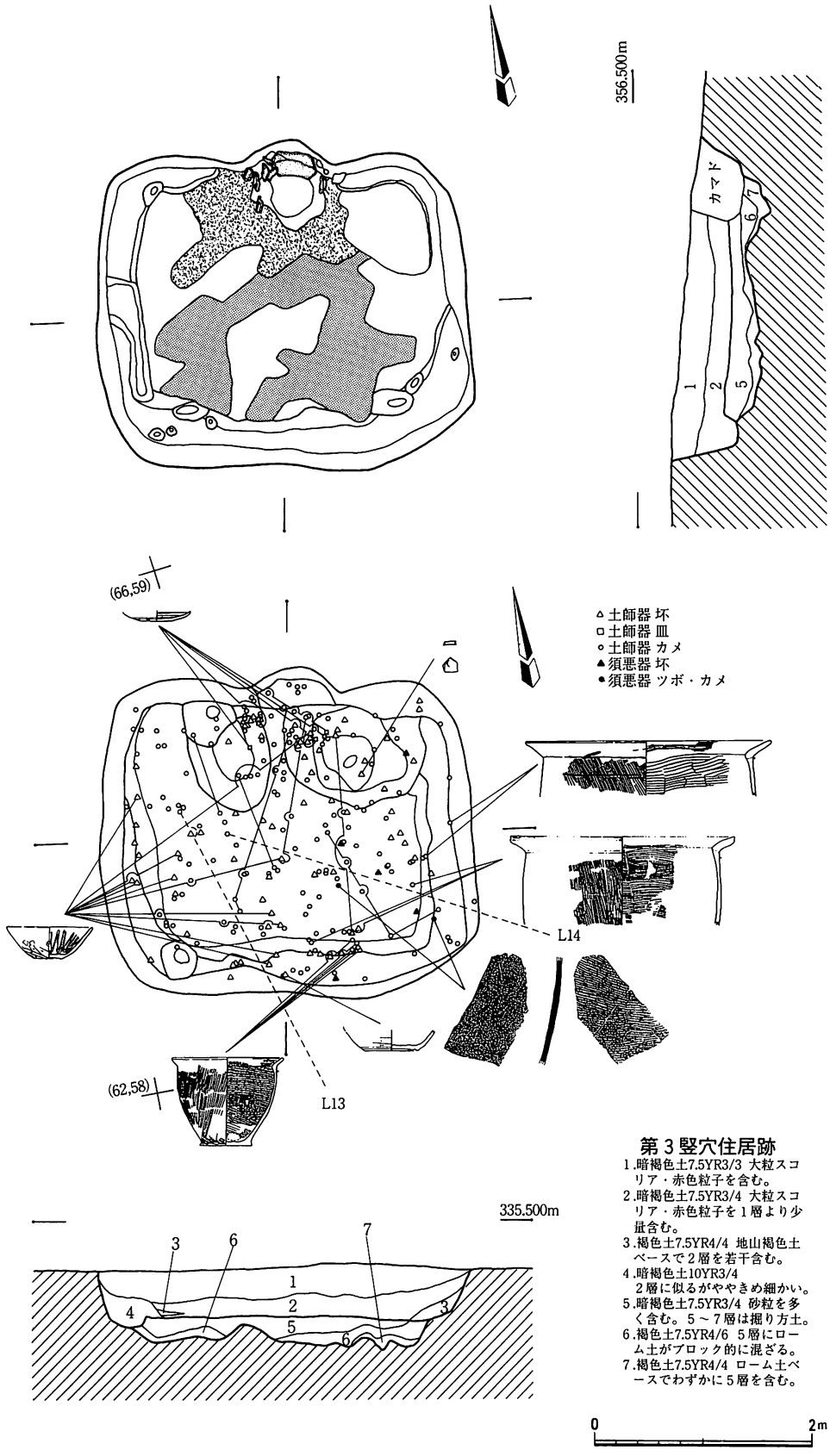
(1) 竪穴住居跡

第３号竪穴住居跡 SI３（第10・11図）

本住居跡は調査区の北西部、X=64、Y=60ポイント付近から検出されたものであり、遺存状況は良い。平面プランは隅丸で東西に若干長い長方形で、北壁ほぼ中央にカマドを持つ。カマド中心での主軸方位はN-10°-Eとやや東に偏向している。規模は南北2.80m、東西3.40mで、確認面から床面までの深さ50cm前後、カマド燃焼部を除く床面積は約7.40m²と小形の住居である。

住居跡掘り方は、まず壁際数十cm程度を段に残し、中心部分を確認面下70～80cmまで深くしかし粗雑に掘り込み、カマド設置部分では両袖にあたる場所を中心にさらに深く掘り下げている。その後、一段高く掘り残したレベル近辺まで主に暗褐色土を使い埋め戻して床面としているが、この際各壁際には埋め残しによって幅20～40cm、深さ10～15cm程度の周溝をつくっている。

床面は特に特徴的な土を使って貼ったりしてはいないが、中心部から南壁にかけて特に硬化した部分が認められた。また、第５・６号竪穴住居跡と同じくカマドに向かって右隅には白色の粘土が床面



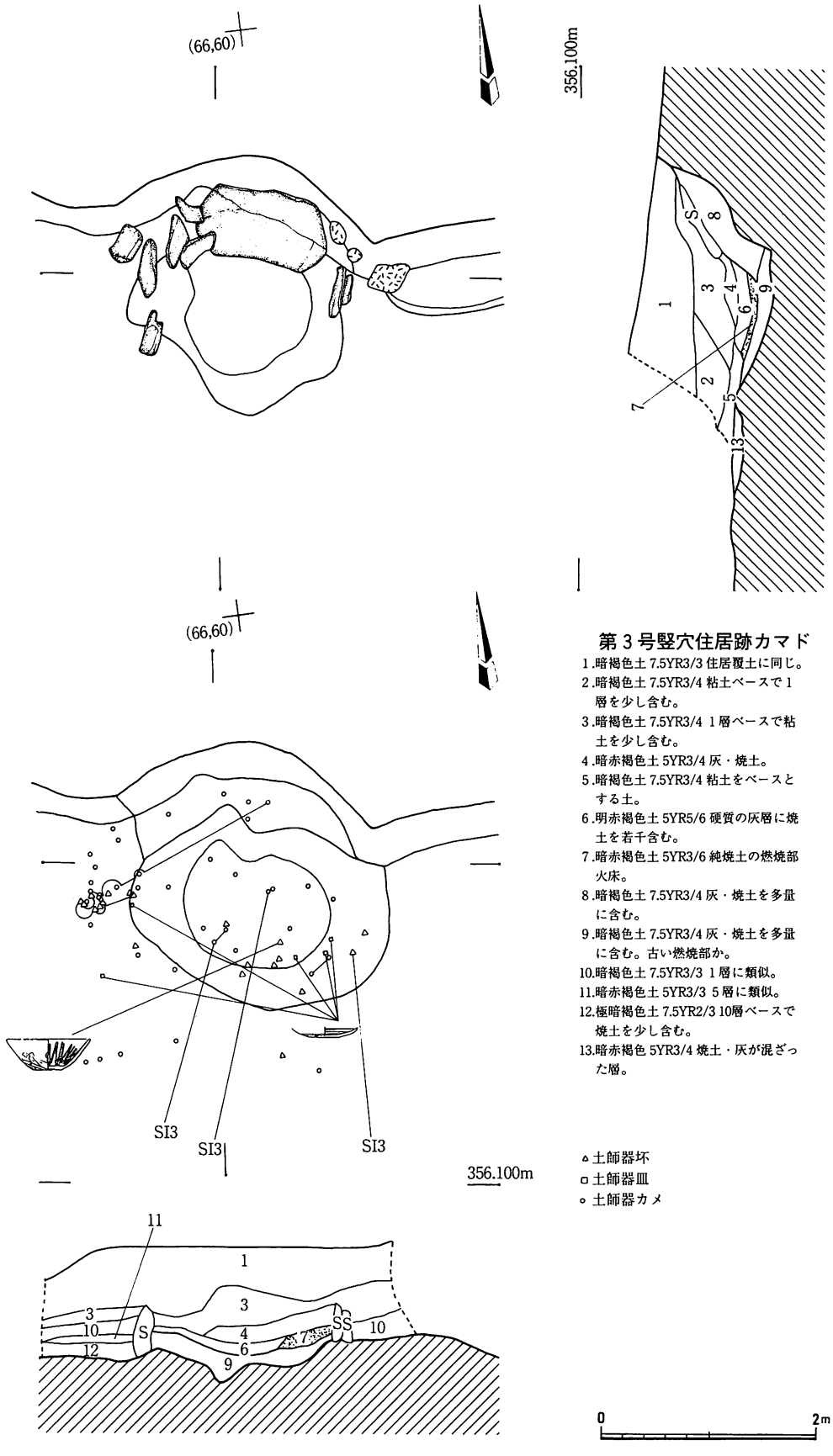
第10図　第３号竪穴住居跡平・断面図

直上数cmにのっていたが、その意味するところは明らかではない。

床面上で確認されたピットには大小合わせて８ヶ所ほどあるが、いずれも周溝際から周溝内にあり、またコーナー部に近い。ただし大きさ・深さ等はまちまちで積極的には柱穴等として認め難い。

カマド　カマドの遺存状況はよい。煙道は壁を北側へ弱く掘り込んだところに偏平な大石を横に寝かせて煙道への立ち上がりとしている。両袖は当初の様子かどうかは不明であるが、偏平な小礫を縦に置き円礫でその周りを固めて安定性を高めている。ただ、それ以外に粘土や土を使用して構築した形跡は窺われなかった。燃焼部は袖間を床面レベルより数cm程度掘り窪めつくっているが、燃焼部底面だと考えられる７層は、２・３cm程度焼土化し、かなり顕著な使用形跡を示している。なお煙道下の石や燃焼部焼土面下にも暗褐色土層が観察され、当初のカマド使用面の可能性があろう。また燃焼部外まで広く焼土が拡散していた。

遺物出土状況　遺構内ほぼ全体から269点と比較的多数の奈良・平安時代遺物が出土した。その内訳は土師器は坏79点、高台坏１点、皿５点、甕171点、須恵器は坏８点、坏蓋２



第３号竪穴住居跡カマド

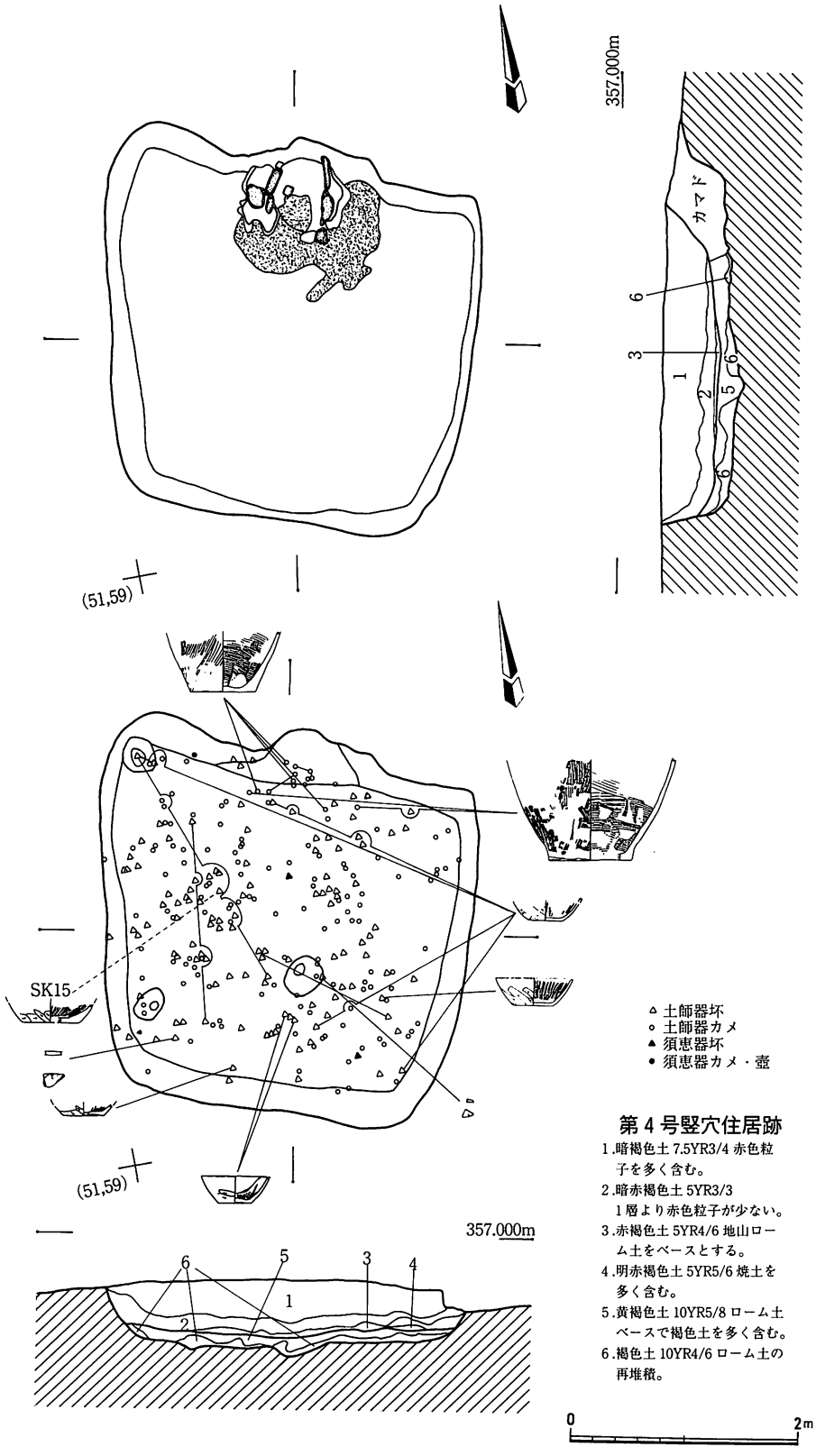
1.暗褐色土 7.5YR3/3 住居覆土に同じ。
2.暗褐色土 7.5YR3/4 粘土ベースで１層を少し含む。
3.暗褐色土 7.5YR3/4 １層ベースで粘土を少し含む。
4.暗赤褐色土 5YR3/4 灰・焼土。
5.暗褐色土 7.5YR3/4 粘土をベースとする土。
6.明赤褐色土 5YR5/6 硬質の灰層に焼土を若干含む。
7.暗赤褐色土 5YR3/6 純焼土の燃焼部火床。
8.暗褐色土 7.5YR3/4 灰・焼土を多量に含む。
9.暗褐色土 7.5YR3/4 灰・焼土を多量に含む。古い燃焼部か。
10.暗褐色土 7.5YR3/3 １層に類似。
11.暗赤褐色土 5YR3/3 ５層に類似。
12.極暗褐色土 7.5YR2/3 10層ベースで焼土を少し含む。
13.暗赤褐色 5YR3/4 焼土・灰が混ざった層。

△土師器坏
□土師器皿
○土師器カメ

第11図　第３号竪穴住居跡カマド平・断面図

点、壺・甕類３点である。また接合関係は甕２点がＬ13・L14スクエア出土品とそれぞれ接合しているものの、それ以外はすべて住居内での接合である。その接合距離を見ると、比較的近距離のものと、住居内にやや広く散らばっているものの２種が見られるようである。

またカマド内土壌の水洗選別により、コムギ・アワ・キビ・炭化穀類塊・オニグルミ・堅果・マメ科・マメ科近似種・タデ属・シロザ近似種・キイチゴ属・シソ科・イバラモ属・イネ科２種の種実およびマイワシ・魚類（真骨類）・鳥類？・哺乳類？などの骨が検出されている。



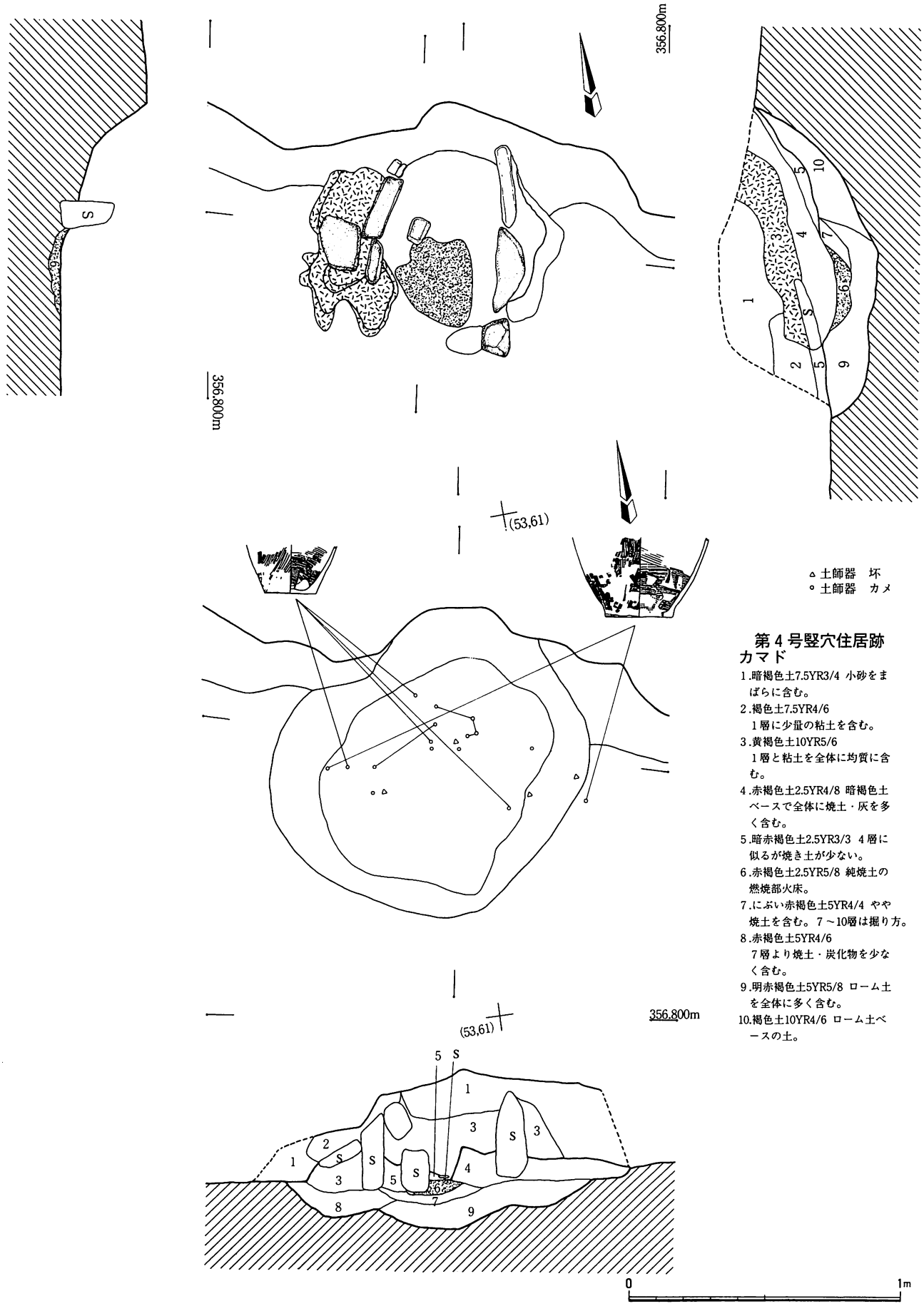
第12図　第４号竪穴住居跡平・断面図

なお、遺構の時期については良好な出土土器が少なく限定は困難であるが、図示した坏・皿とその出土位置を考慮すると、甲斐型土器編年Ⅷ期～Ｘ期、９世紀後半を中心とする年代のものと考えられる。

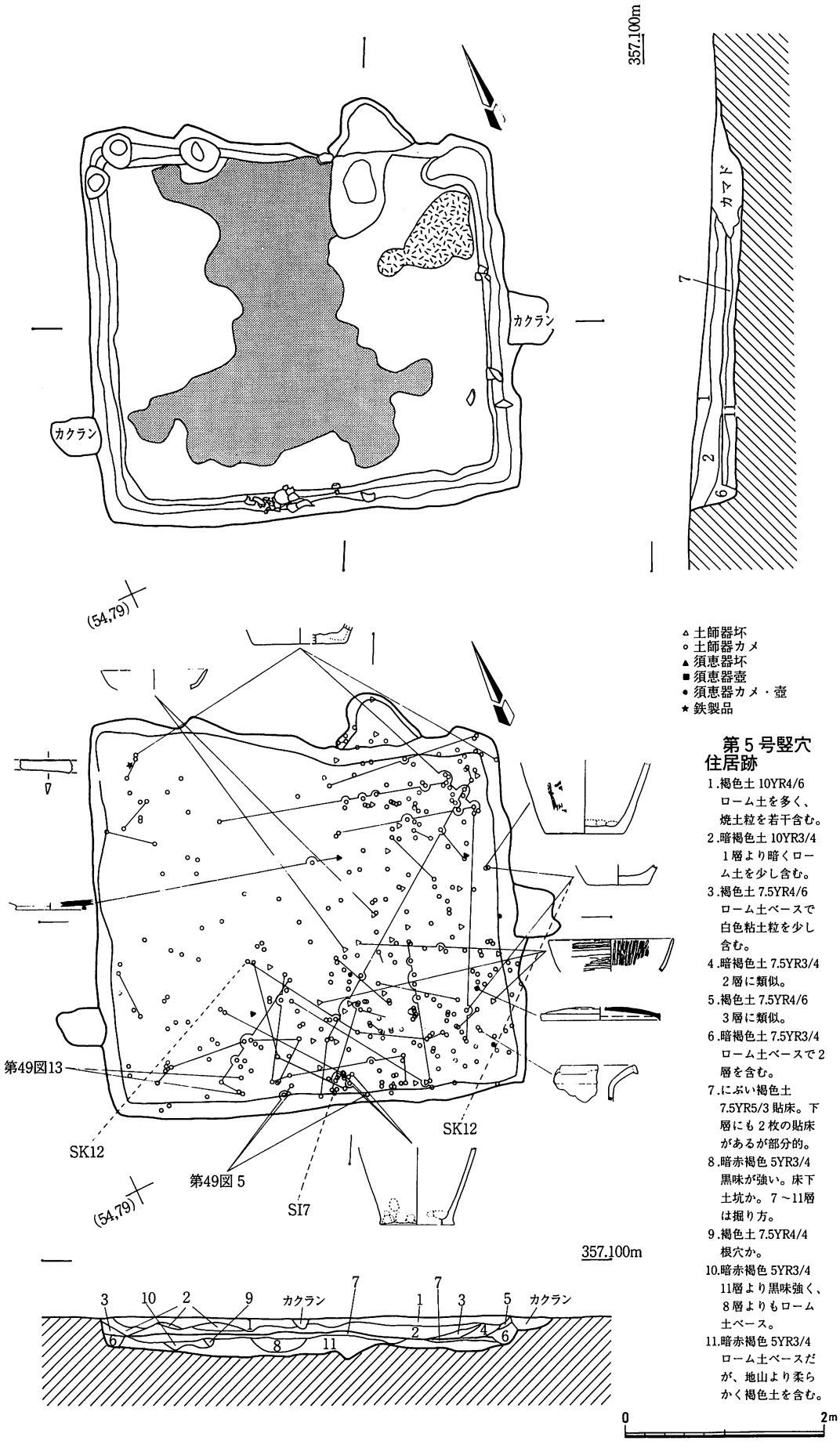
第４号竪穴住居跡 SI４（第12・13図）

本竪穴住居跡は調査区西部のX=53、Y=61ポイント付近から検出されたものであり、遺存状況は良い。平面プランは北西隅が若干張り出し、南壁がやや短いいびつな方形状で、北壁ほぼ中央にカマドを持つ。カマド中心での主軸方位はN-15°-Eとやや東に偏向している。規模は東半部で南北3.10m、東西はセクションラインで3.20m、確認面から床面までの深さ40cm強、カマド燃焼部を除く床面積は約 7.63m²とやはり小形の住居である。

住居跡掘り方は、全体をやや粗く確認面下60～70cm程度まで掘り下げ、その後、主に



第13図　第４号竪穴住居跡カマド平・断面図



△ 土師器坏
○ 土師器カメ
▲ 須恵器坏
■ 須恵器壺
● 須恵器カメ・壺
★ 鉄製品

第5号竪穴住居跡

1.褐色土 10YR4/6 ローム土を多く、焼土粒を若干含む。
2.暗褐色土 10YR3/4 1層より暗くローム土を少し含む。
3.褐色土 7.5YR4/6 ローム土ベースで白色粘土粒を少し含む。
4.暗褐色土 7.5YR3/4 2層に類似。
5.褐色土 7.5YR4/6 3層に類似。
6.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム土ベースで2層を含む。
7.にぶい褐色土 7.5YR5/3 貼床。下層にも2枚の貼床があるが部分的。
8.暗赤褐色 5YR3/4 黒味が強い。床下土坑か。7～11層は掘り方。
9.褐色土 7.5YR4/4 根穴か。
10.暗赤褐色 5YR3/4 11層より黒味強く、8層よりもローム土ベース。
11.暗赤褐色 5YR3/4 ローム土ベースだが、地山より柔らかく褐色土を含む。

第14図　第5号竪穴住居跡平・断面図

ローム土をベースとし褐色土を多く含む土でおよそ10cm強ほど埋め戻して床面としている。

床面は特に別の土で新たに貼るようなことはしていないが、カマド前面に若干範囲ながら硬化した部分が認められた。

床面上ではカマド以外にピットなど特に確認できた施設はないが、掘り方面では散発的ながら3ヶ所のやや顕著なピットが確認された。しかしながら配置等に関係性は認め難く、床面上で確認できていないこともあり柱穴などとしては認め難い。

カマド　カマドの遺存状況は大変よい。煙道は壁を北側へごく弱く掘り込んでいるだけであるが、燃焼部はまず掘り方をローム土や若干の焼土・炭化物を含む赤褐色土で埋め戻した後、40cmほどの間隔をもたせて偏平な角礫数個を主体に横立させて約60cm前方まで並べ、さらに白

色粘土を使い外側を中心に充填して袖を構築している。燃焼部は特に掘り窪めること無く床面レベルをそのまま使用しているが、袖間前方は、厚さ5·6cmほども焼土化し、かなり顕著な使用形跡が窺われた。また燃焼部中央やや左、焼土面奥端にあたる位置に角柱状の礫が置かれており、土器を下から支える支脚であったと考えられる。

なお燃焼部を掘り下げて行く段階で、袖間幅ぎりぎりに落ち込んでいる大形偏平礫が存在していた。こうした状況からこの礫が当初両袖を跨ぐように燃焼部上に据え付けられていた蓋石であった可能性が予測される。

遺物出土状況　遺構内からは奈良・平安時代の遺物が全部で266点と第３号住居とほぼ同数量出土した。その内訳は、土師器坏122点、甕141点、須恵器坏２点、壺・甕類１点である。これらの遺物は住居内ほぼ全体から出土しているが若干の偏在傾向も窺われる。また接合関係は、坏１点が第15号土坑との接合である他は、いずれも住居内のみでの接合関係であるが、やはり近距離間で接合しているものと、やや離れて接合しているものの２種が見られるようである。

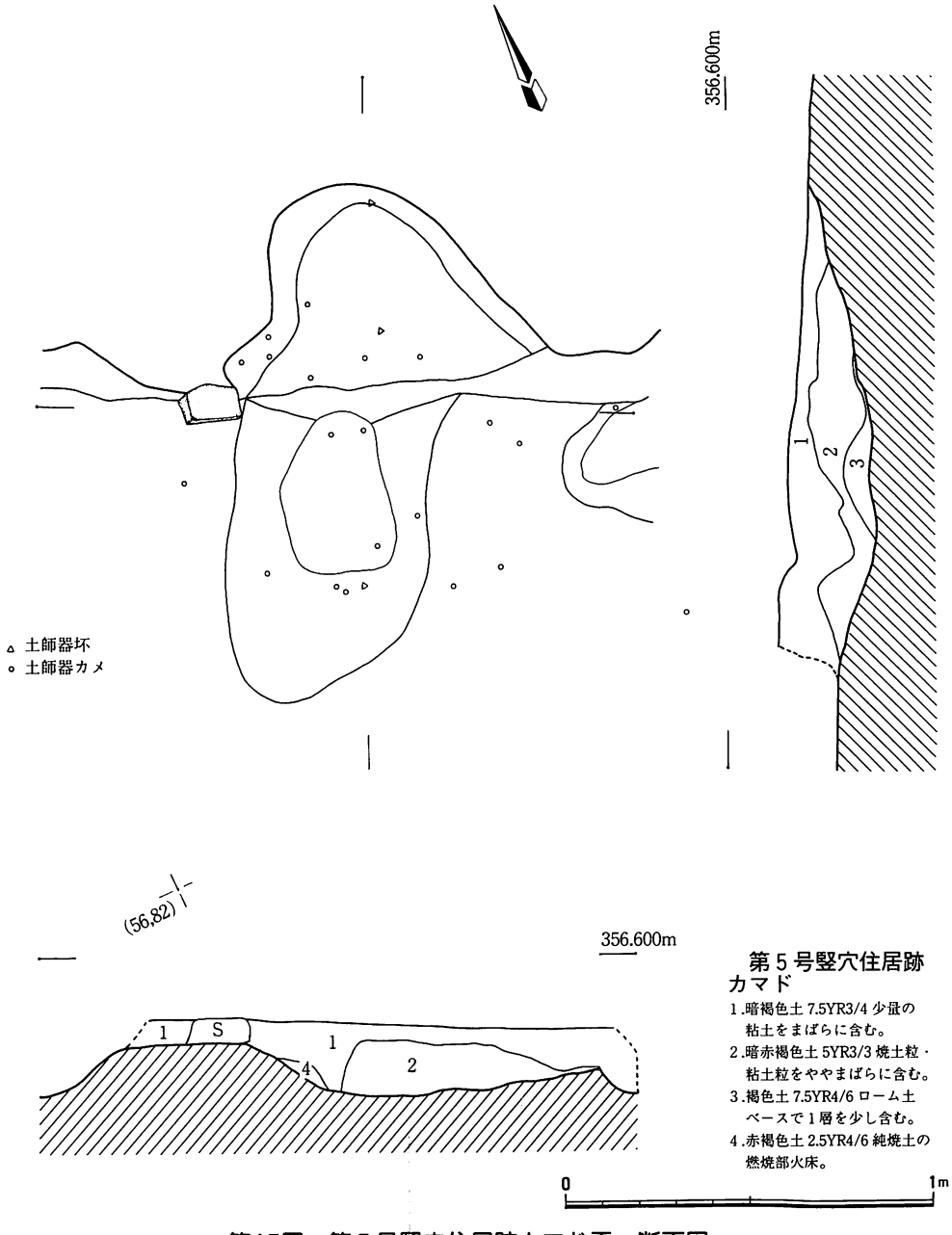
またカマド内土壌の水洗選別により、アワ・炭化塊・オニグルミ・マメ科・シロザ近似種・イネ科の種実および動物骨が検出されている。

なお、遺構の時期については、覆土から出土した坏を中心に考慮すると、甲斐型土器編年Ⅷ期、９世紀第２四半世紀のものと考えられる。

第５号竪穴住居跡
SI５（第14・15図）

本竪穴住居跡は中央部北寄りに位置し、X=56、Y=82ポイント付近から検出されたものであるが、掘り込みが浅いためか遺存状況はさほど良くない。平面プランは東西に若干長い長方形で、北壁東寄りにカマドを持つ。カマド中心で見た主軸方位はN-25°-Eとやや東に偏向している。規模は南北約3.60m、東西約4.30mで、確認面からの床面までの深さ20cm前後、カマド燃焼部を除く床面積は約14.47㎡と本遺跡の中では大形の住居である。

住居跡掘り方は、全体をやや粗く確認面下30～40cmまでほぼ水平に掘り下げ、その後主にローム質土によって20cmほど埋め戻し、その上にさらににぶい褐色土を貼っ

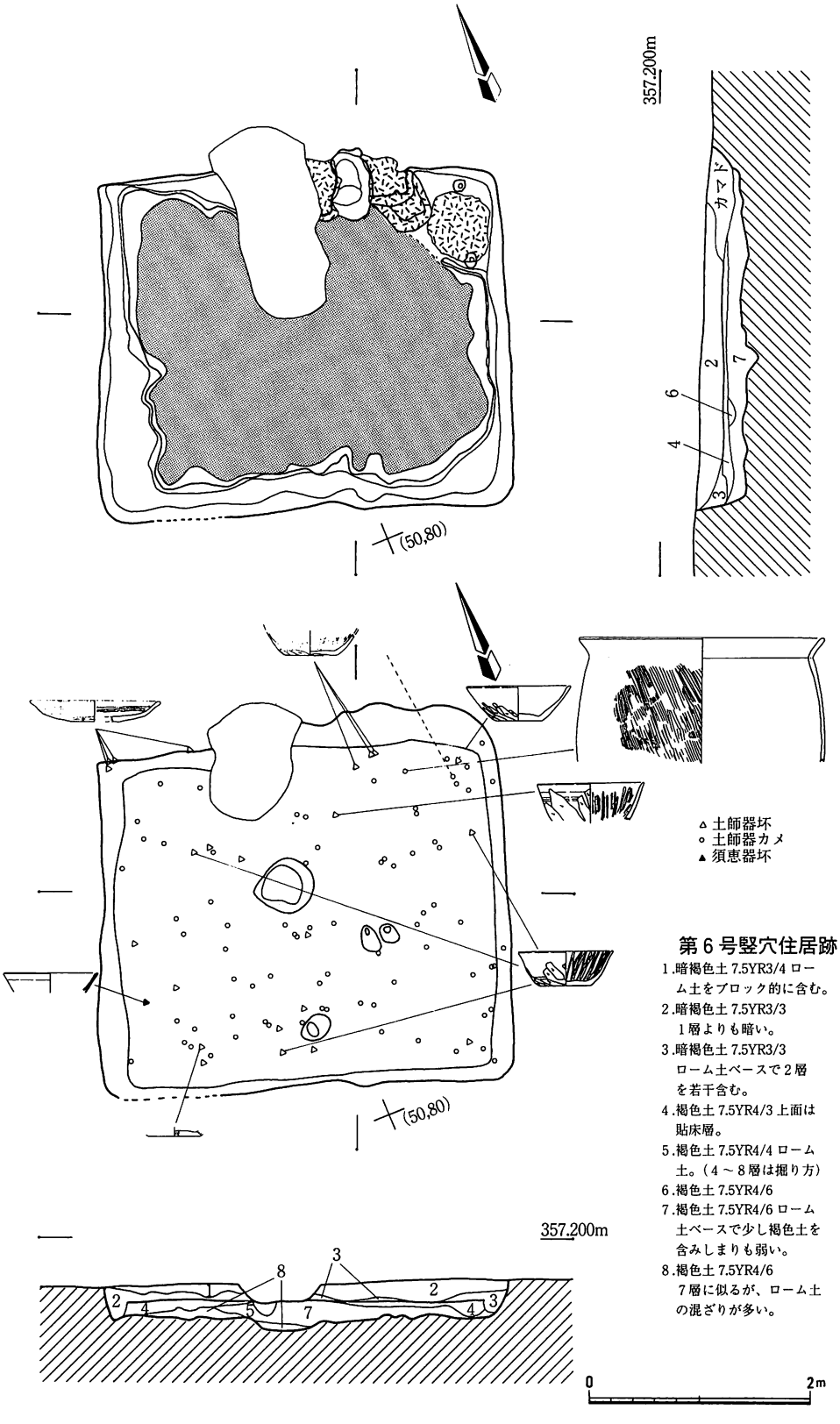


第15図　第５号竪穴住居跡カマド平・断面図

て床面としている。またこの時各壁際を幅30cm前後埋め残して、深さ10cm程度の周溝をつくっている。

このように床面は特定の土を貼って造られているが、最上層ではカマド西脇から南側にかけて顕著な硬化面が広がっていた。さらに部分的にではあるが、下層にも２枚ほど硬化した面が確認され、住居の居住期間や断絶、若しくは床面改修を示す可能性がある。また、カマドに向かって右隅には第３・６号竪穴住居跡と同様に白色の粘土が床面直上数cmのっていたが、やはりその意味するところは明らかではない。

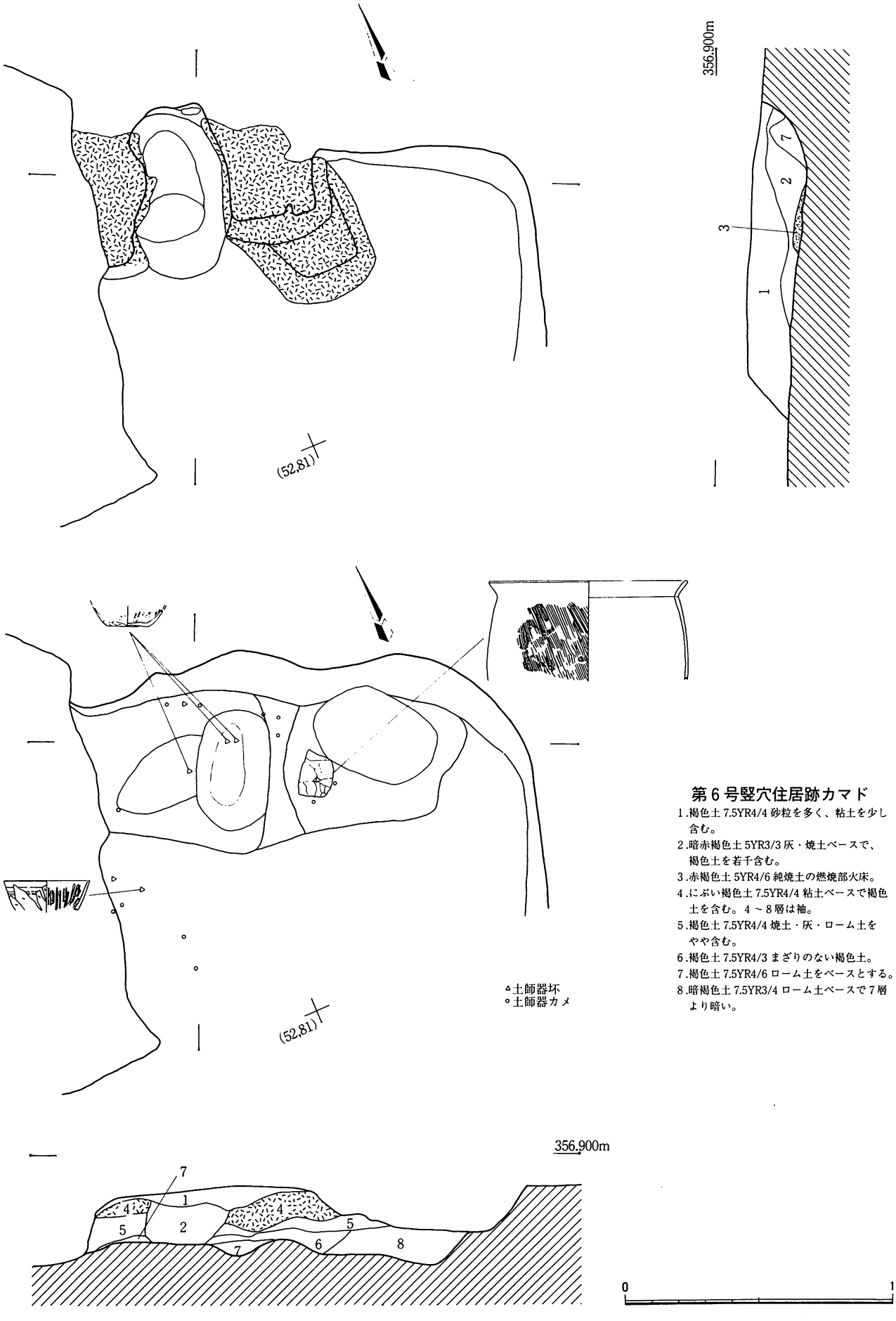
床面上で確認されたピットは３ヶ所でいずれも南壁西よりから北西隅の周溝内にあり、柱穴等の可能性があろうが、他の場所では確認できなかった。



第16図　第６号竪穴住居跡平・断面図

カマド　あまり遺存状況はよくない。煙道は北壁を約90cmの幅で最深25cmほどすり鉢状に掘り下げ、奥行き55cmほどかけて緩やかに立ち上がっていく。両袖はほとんど旧状を残していないが、左袖壁際には角柱状礫が置かれていた他、燃焼部脇に若干ながら白色粘土が付着しており、袖の痕跡である可能性がある。燃焼部は長円形状に掘り込んでつくっているが、北壁を延長したライン付近でやや赤化しており、焚き口の位置を示していよう。

遺物出土状況　遺構内から出土した奈良・平安時代遺物は全部で391点と本遺跡では多い。しかしその出土分布は住居東半分から南寄りにかなり偏る傾向が窺われる。出土遺物の内訳を見ると、土師器坏が31点、甕が352点、須恵器坏２点、坏蓋１点、壺・甕類が４点、鉄器が１点となっている。接合関係は土師器甕３点が第７号住居・第12号土坑出土品とそれぞれ接合しているが、それ以外は遺構内のみでの接合である。その距離はごく近接しているものもあるが、やや離れたもの



第６号竪穴住居跡カマド

1.褐色土 7.5YR4/4 砂粒を多く、粘土を少し含む。
2.暗赤褐色土 5YR3/3 灰・焼土ベースで、褐色土を若干含む。
3.赤褐色土 5YR4/6 純焼土の燃焼部火床。
4.にぶい褐色土 7.5YR4/4 粘土ベースで褐色土を含む。４～８層は袖。
5.褐色土 7.5YR4/4 焼土・灰・ローム土をやや含む。
6.褐色土 7.5YR4/3 まざりのない褐色土。
7.褐色土 7.5YR4/6 ローム土をベースとする。
8.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム土ベースで７層より暗い。

第17図　第６号竪穴住居跡カマド平・断面図

が接合している場合が多い。

またカマド内土壌の水洗選別により、イネ科の種実および哺乳類？の骨が検出されている。

なお、遺構の時期については図示できた覆土出土の土師器坏や須恵器坏を中心に考慮すると、甲斐型土器編年Ⅴ期以前、８世紀代のものと考えられる。

第６号竪穴住居跡 SI６（第16・17図）

本竪穴住居跡は調査区の中央部やや北寄り第５号竪穴住居跡の南に位置し、X=52、Y=80ポイント付近から検出されたものである。北側のカマド横を大形のピットによって壊されており、また確認面からの掘り込みも浅いが、遺存状況は比較的良い。平面プランは東西に若干長い長方形で、北壁やや東寄りにカマドを持つ。カマド中心での主軸方位はN-20°-Eとやや東に偏向している。規模は南北3.10m、東西3.70mで、確認面から床面までの深さ20cm前後、カマド袖・燃焼部を除き推定復元した床面積は約10.09㎡と本遺跡では中形の住居である。

住居跡掘り方は、全体を確認面下30～40cmまでやや粗くであるがほぼ水平に掘り下げ、さらに住居中央には径50cm前後、深さ10cmほどの小土坑と３ヶ所ほどの長径10～20cm程度の小ピットを掘り込んでいる。しかしながらこれらは床面上では確認されておらず、居住時に機能していた何らかの施設である可能性は低い。この掘り方を20cmほどローム土を主体として埋め戻し、さらに褐色土を使って床面としている。また各壁際は部分的にかなりの幅差があるものの、幅10～20cm、深さ10～15cm程度埋め残して周溝をつくっている。

床面はカマド前面から住居内全体にかけて硬化した部分が広く認められた。また、本住居でも第３・５号竪穴住居跡と同様にカマドに向かって右隅にはカマド袖に使用したものと同種の白色粘土が床面直上数cmにのっていたが、その意味するところは不明である。床面上ではこれ以外に特に何らかの施設等は確認されなかった。

カマド　住居より新しいピットによってカマドの左袖の西端から西側が失なわれているが、それ以外の部分では比較的遺存状況はよい。カマドは煙道部分を北壁ラインより外側にはほとんど掘り込まずにつくられている。燃焼部は若干掘り込んだ後、褐色土でその両側に袖の基盤をつくり、さらにその上に黄灰色粘土を貼って両袖をつくっている。また燃焼部前面よりから純焼土層が検出されており、焚き口の痕跡と考えられる。

遺物出土状況　遺構内から出土した奈良・平安時代遺物は125点と比較的少なく、遺構内全体にやや散漫な分布状況を持っていた。これら遺物の内訳は土師器坏25点、皿４点、甕94点、須恵器坏１点、壺・甕類１点である。接合状況を見るといずれも遺構内のみで接合しており、一部はやや広い接合範囲を持つが、多くはごく近接した範囲内で接合している。

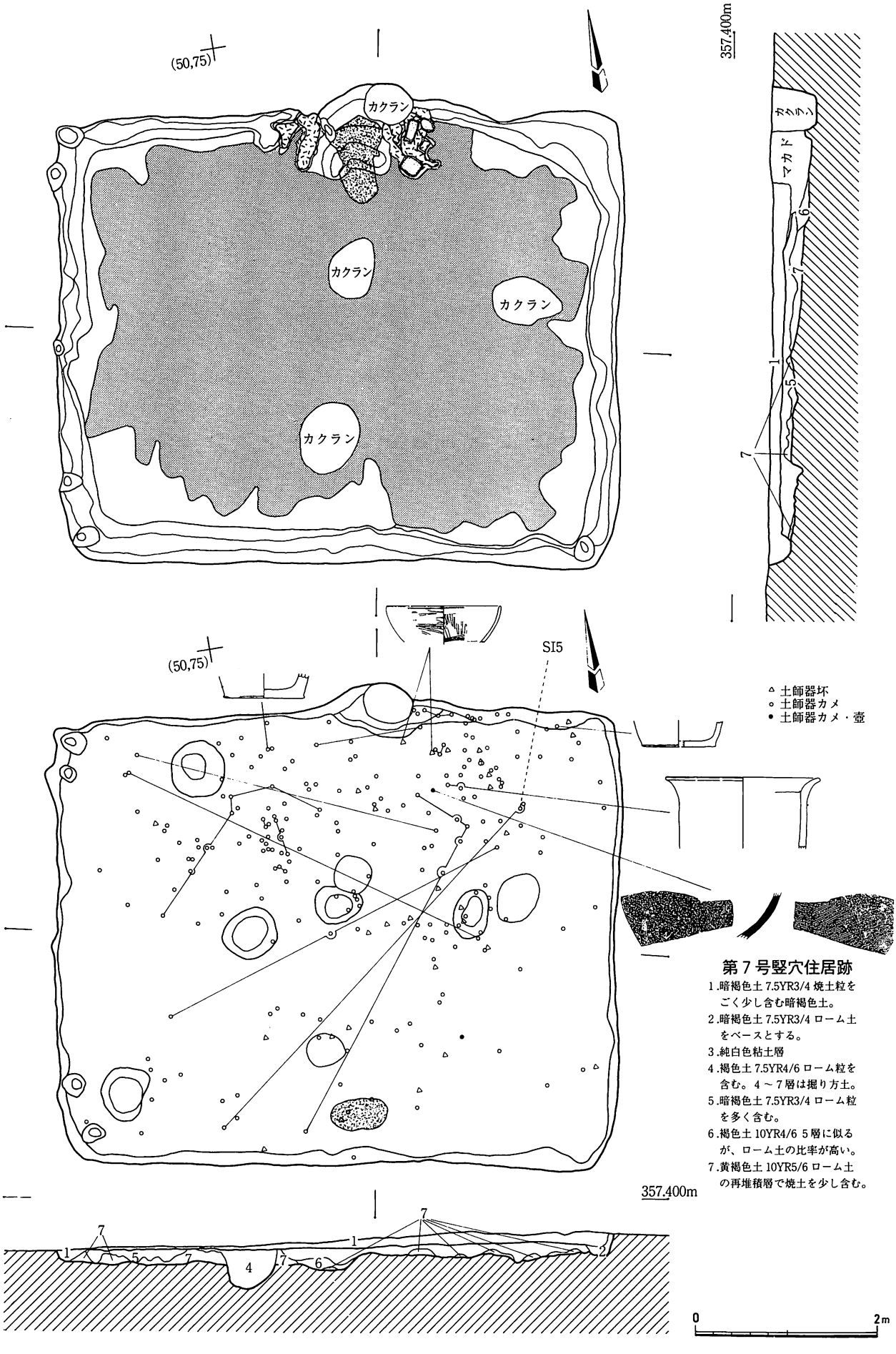
またカマド内土壌を採取し水洗選別を行った結果、炭化種実は出土しなかったが、哺乳類？の骨が検出されている。

なお、遺構の時期についてはカマドなどから出土した坏類を中心に考えると、甲斐型土器編年Ⅷ期、９世紀第２四半世紀を中心とする年代と考えられる。

第７号竪穴住居跡 SI７（第18・19図）

本竪穴住居跡は調査区のほぼ中央、第７号竪穴住居跡の南西に位置し、第８号竪穴住居跡と南西壁の一部を接している、X=47、Y=76ポイント付近から検出された遺構である。掘り込みがかなり浅くまた住居より新しいピットによって部分的に壊されているものの、比較的遺存状況は良い。平面プランは東西方向に長い長方形で、北壁わずかに東寄りにカマドを持つ。カマド中心での主軸方位はN-10°-Eとやや東に偏向している。規模は南北約5.00m、東西約6.30mで、確認面から床面までの深さ10cm前後、カマド袖・燃焼部を除く床面積は約27.71㎡と本遺跡で検出された住居の中では最大かつ他とは格段の規模を持つものである。

住居跡掘り方は、全体を確認面より20cmほどの深さまでやや粗く掘り下げているが、南側は１mほどの幅で若干ではあるが他よりやや深く掘られており、弱い段をもっている。また掘り方面には長径50～60cm、深さ10cm弱の小土坑が掘られており、その中にはやや褐色の粘土が充満されていた。一方、中央部南壁際には長径50～60cmほどの範囲が被熱により焼土化していたが、これは掘り方を掘った段階でこの場所で火焚き行為が行なわれ



第７号竪穴住居跡

1.暗褐色土 7.5YR3/4 焼土粒をごく少し含む暗褐色土。
2.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム土をベースとする。
3.純白色粘土層
4.褐色土 7.5YR4/6 ローム粒を含む。４～７層は掘り方土。
5.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒を多く含む。
6.褐色土 10YR4/6 ５層に似るが、ローム土の比率が高い。
7.黄褐色土 10YR5/6 ローム土の再堆積層で焼土を少し含む。

第18図　第７号竪穴住居跡平・断面図

たのか、それとも本住居の南東には縄文時代焼土遺構が比較的密集しているので、その内の一つが住居によって破壊され焼土面のみがかろうじて残ったかのどちらかと思われるが断定できない。この他、3ヶ所ほど長径60cm、深さ10～20cm程度の小土坑が存在した。しかしながらこれらは床面上では確認されておらず、居住時に機能していた何らかの施設である可能性は少ない。こうした掘り方を10～20cmほど暗褐色土およびローム土によって埋め戻し、床面としている。この時各壁際は幅30～40cmほど埋め残して深さ10cm程度の周溝をつくっている。

床面は特に特徴的な土を使って貼ったりしてはいないが、カマド前面から壁際まで広く硬化した部分が認められた。

床面上で確認されたピットは6ヶ所ほどあるが、いずれも三隅と西壁周溝内にほぼ均等距離を持って分布している。唯一西北隅では確認されていないが、この住居が本遺跡で最大の大きさであることも考慮すると、これらのピットが上屋を支える構造材の柱穴であった可能性も考える必要があろう。

カマド　カマド右袖奥から煙道にかけての一部がピットによって失われているが、全体的には遺存状況はよい。煙道は壁を北側へ若干掘り込んだ程度でごく短く、一段下がって燃焼部に至る。両袖は一部に礫を組み込んでいるが、基本的には黄褐色粘土を燃焼部を挟み70cmほどの間隔で壁から60～80cmほどの長さまで積み上げて構築している。燃焼部には厚さ10cmほどにも焼土化した粘土が残されており、かなり使用された形跡が窺われる。また直接カマドと関係するものかどうかはっきりしないが、カマド前面から東寄りにかけて粘土が若干堆積していた。

なお、第8号竪穴住居跡との先後関係は切り合い部分がごくわずかであることもあって、遺構的には明らかではないが、出土遺物の編年学的成果からすれば第7号竪穴住居跡が第8号竪穴住居跡よりも古いものと推測される。

遺物出土状況　出土した奈良・平安時代遺物は304点と比較的多いが、その出土位置はカマドを中心とした北半に偏る傾向が見られる。遺物の内訳では、土師器坏35点、皿1点、甕265点、須恵器壺・甕類2点、灰釉陶器椀1点などとなっている。接合状況を見ると第5号竪穴住居跡出土品と接合しているものが1点あるほか、全体的に遺構内に広く接合範囲を持つものが多い。

また、カマド内土壌の水洗選別により、ムギ類・アワ・炭化塊・オニグルミ・マメ科・サンショウ属の種実およびマイワシ・魚類（真骨類）・哺乳類？の骨が検出されている。

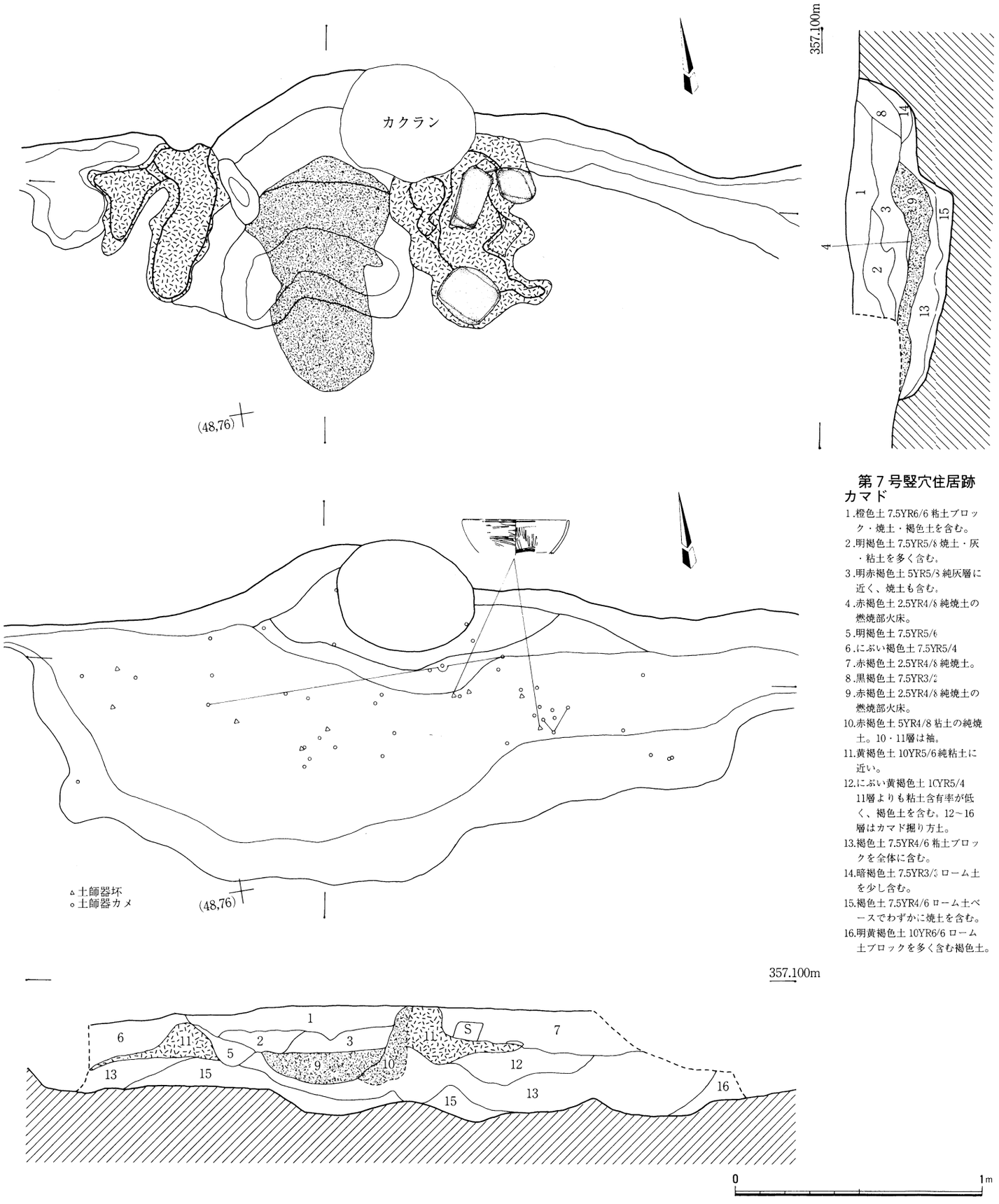
なお、遺構の時期については図化できた遺物が少なく困難であるが、坏類を中心に考えると、甲斐型土器編年V期以前、8世紀代のものと考えられる。

第8号竪穴住居跡 SI 8（第20・21図）

本住居跡は調査区の中央部南寄り、X=43、Y=72ポイント付近から第7号竪穴住居跡南壁に一部を接するような位置で検出された竪穴住居跡であり、南壁付近は第14号土坑（SK014）によって切られている。床面までの掘り込みはごく浅く、遺存状況はさほど良いとは言えない。平面プランは南壁に若干疑問を残し、また西壁の両隅がやや張り出すものの、ほぼ方形と思われ、本遺跡では珍しく西壁ほぼ中央にカマドを持つ。カマド中心での主軸方位はN-80°-Wと大きく西に偏っている。規模は東西3.10m前後、南北はおそらく3.50m以下と推測される。確認面から床面までの深さは10cm以下、カマド燃焼部を除く床面積は推定で約10.72m²と復元され、本遺跡では中規模程度の住居である。

本住居跡の掘り方はやや特異である。住居各壁からすり鉢状に深く掘り込んでおり、最も深いところでは床面から1m近い。また底面の一部は長円形の土坑状を呈す所もある。こうした検出状況から、住居とは別の古い土坑もしくは一部にそうした存在の可能性も考慮したが、覆土は基本的にローム土をベースとした褐色土が通常のレンズ状堆積をしており、セクション等からは掘り込みを持つ新たな土坑の存在は特に確認できなかった。しかしながら、住居造築以前にそうした遺構が存在し、その痕跡を住居として利用した可能性は否定できない。

床面は、この掘り方をあらかた埋めた後ににぶい黄褐色土を貼っているが、カマド前面から東壁方向にかけて特に硬化した部分が認められた。また周溝はつくっておらず、ピット等の諸施設も確認されていない。

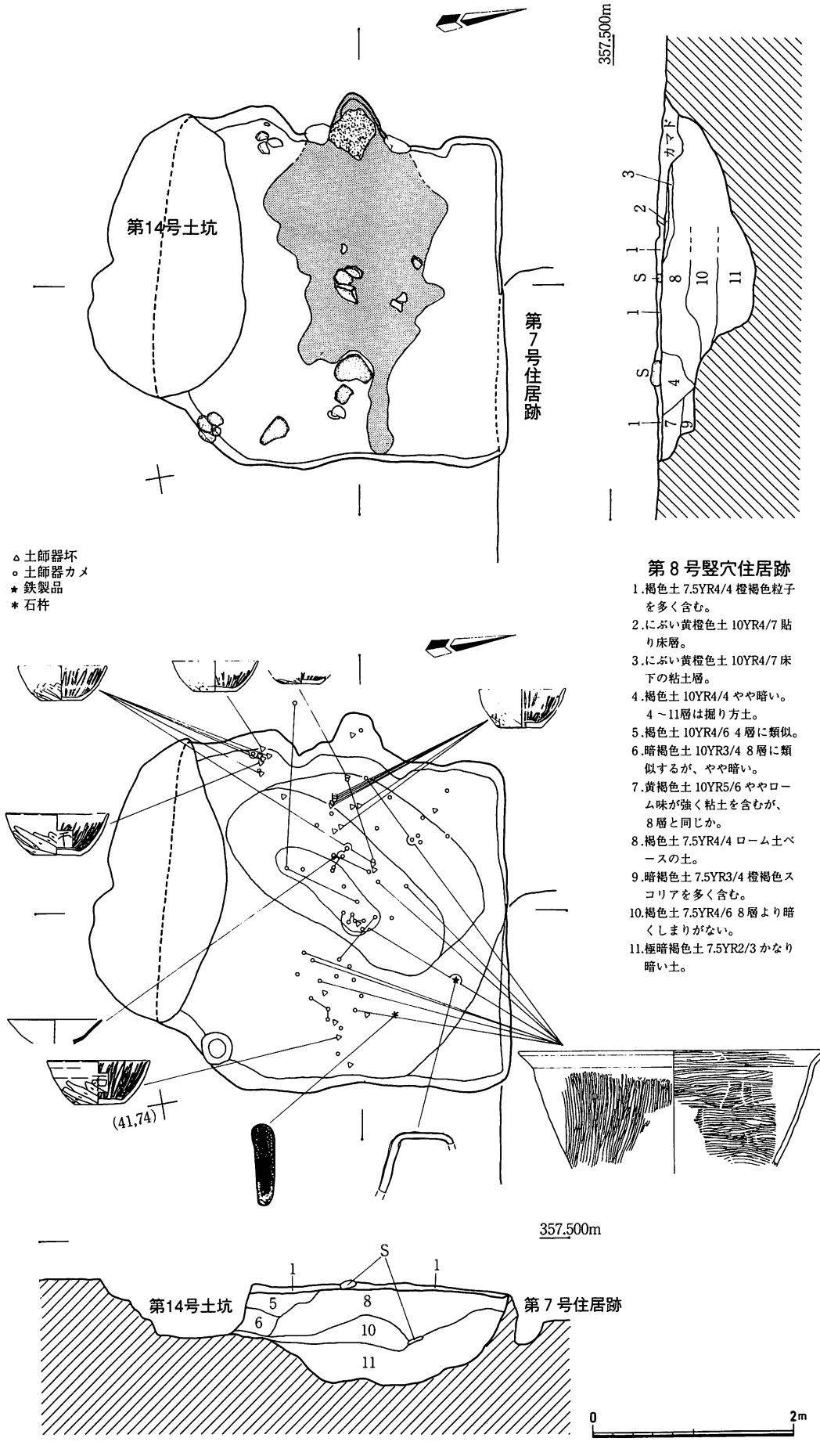


第７号竪穴住居跡カマド

1.橙色土 7.5YR6/6 粘土ブロック・焼土・褐色土を含む。
2.明褐色土 7.5YR5/8 焼土・灰・粘土を多く含む。
3.明赤褐色土 5YR5/3 純灰層に近く、焼土も含む。
4.赤褐色土 2.5YR4/8 純焼土の燃焼部火床。
5.明褐色土 7.5YR5/6
6.にぶい褐色土 7.5YR5/4
7.赤褐色土 2.5YR4/8 純焼土。
8.黒褐色土 7.5YR3/2
9.赤褐色土 2.5YR4/8 純焼土の燃焼部火床。
10.赤褐色土 5YR4/8 粘土の純焼土。10・11層は袖。
11.黄褐色土 10YR5/6 純粘土に近い。
12.にぶい黄褐色土 1CYR5/4 11層よりも粘土含有率が低く、褐色土を含む。12～16層はカマド掘り方土。
13.褐色土 7.5YR4/6 粘土ブロックを全体に含む。
14.暗褐色土 7.5YR3/3 ローム土を少し含む。
15.褐色土 7.5YR4/6 ローム土ベースでわずかに焼土を含む。
16.明黄褐色土 10YR6/6 ローム土ブロックを多く含む褐色土。

0　1m

第19図　第７号竪穴住居跡カマド平・断面図



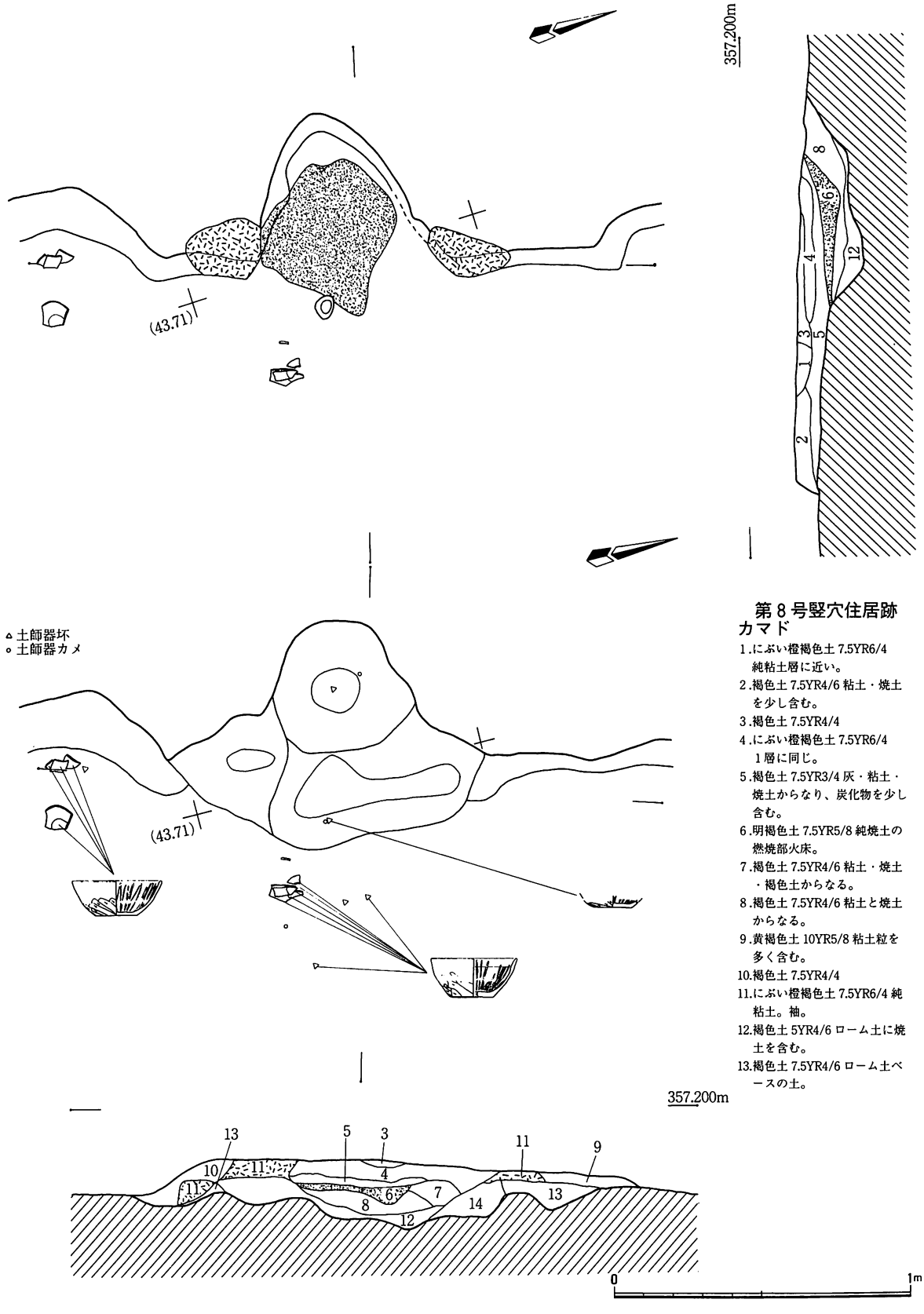
第8号竪穴住居跡

1.褐色土 7.5YR4/4 橙褐色粒子を多く含む。
2.にぶい黄橙色土 10YR4/7 貼り床層。
3.にぶい黄橙色土 10YR4/7 床下の粘土層。
4.褐色土 10YR4/4 やや暗い。4～11層は掘り方土。
5.褐色土 10YR4/6 4層に類似。
6.暗褐色土 10YR3/4 8層に類似するが、やや暗い。
7.黄褐色土 10YR5/6 ややローム味が強く粘土を含むが、8層と同じか。
8.褐色土 7.5YR4/4 ローム土ベースの土。
9.暗褐色土 7.5YR3/4 橙褐色スコリアを多く含む。
10.褐色土 7.5YR4/6 8層より暗くしまりがない。
11.極暗褐色土 7.5YR2/3 かなり暗い土。

第20図　第8号竪穴住居跡平・断面図

なお、第７号竪穴住居跡との先後関係は切り合い部分がごくわずかであることもあって遺構的には明らかではないが、出土遺物の編年学的成果からすれば第８号竪穴住居跡が第７号竪穴住居跡よりも新しいものと推測される。

カマド　掘り込みが特に浅いこともあり遺存状況はさほどよくない。掘り方は燃焼部をやや掘り下げ、壁を西側へほぼ水平に40cmほど掘り込んで煙道を徐々に立ち上げている。燃焼部はこれを粘土や焼土を主体とする土で若



第８号竪穴住居跡カマド

1.にぶい橙褐色土 7.5YR6/4 純粘土層に近い。
2.褐色土 7.5YR4/6 粘土・焼土を少し含む。
3.褐色土 7.5YR4/4
4.にぶい橙褐色土 7.5YR6/4 1層に同じ。
5.褐色土 7.5YR3/4 灰・粘土・焼土からなり、炭化物を少し含む。
6.明褐色土 7.5YR5/8 純焼土の燃焼部火床。
7.褐色土 7.5YR4/6 粘土・焼土・褐色土からなる。
8.褐色土 7.5YR4/6 粘土と焼土からなる。
9.黄褐色土 10YR5/8 粘土粒を多く含む。
10.褐色土 7.5YR4/4
11.にぶい橙褐色土 7.5YR6/4 純粘土。袖。
12.褐色土 5YR4/6 ローム土に焼土を含む。
13.褐色土 7.5YR4/6 ローム土ベースの土。

第21図　第８号竪穴住居跡カマド平・断面図

干埋め戻して利用しており、床面とほぼ同レベルで西壁ラインよりも煙道側には比較的顕著な焼土面が形成されていた。両袖の様子はほとんど不明であるが、煙道と壁の境付近に黄灰色の粘土によって造っていたようで、若干ながらその痕跡である粘土が残っていた。

遺物出土状況　遺構内から出土した奈良・平安時代遺物は85点と少ない。またこれらは平面的に床面硬化範囲の広がりと重なるように分布している。遺物内訳は土師器坏30点、甕44点、鉢８点、須恵器坏１点、石杵１点、鉄製品１点となっている。接合個体数は割合に多く、ごく近接して接合したものと遺構内各所に広く散らばって接合したものの２種に分けられる。

また、カマド内土壌の水洗選別により、アワ・炭化塊の種実および哺乳類？の骨が検出されている。

なお、遺構の時期についてはカマドを中心に出土した坏類などから考えると、甲斐型土器編年Ⅷ期、９世紀第２四半世紀を中心とする年代のものと考えられる。

(2) 土坑

第５号土坑 SK05（第22図）

本土坑は調査区の西南隅近く、X=53、Y=57ポイント周辺に位置し、東南に接して第８号土坑がある。平面プランはやや南北方向に長い楕円形で、規模は長軸長約1.70m、短軸長約1.30m、深さ20cm強を測る。浅いが掘り方はしっかりしており、縁辺からやや丸みを持って水平な底面に移る。覆土は砂粒を含む褐色土である。出土遺物は縄文石器２点、奈良・平安時代土師器６点である。なお本土坑は第６・７号土坑と同じく、形状的にいわゆる「円形土坑」に類似している。

第６号土坑 SK06（第22図）

本土坑は調査区の西南隅近く、X=51、Y=58ポイント周辺に位置し、西北に接して第７号土坑がある。平面プランはほぼ正円に近く、規模は長径約1.60m、短径約1.50m、深さ40cm強を測る。掘り方のしっかりとした土坑である。縁辺からほぼ垂直に落ち、屈曲して水平な底面となる。覆土はローム粒や砂粒を含む暗褐色土もしくは混ざりの少ない暗褐色土である。出土遺物は20点ほどであるが、縄文石器１点を除きすべて奈良・平安時代の土師器類である。なお本土坑も第５・７号土坑と同じく、形状的にいわゆる「円形土坑」に類似している。

第７号土坑 SK07（第22図）

本土坑は調査区の西部南寄り、X=50、Y=64ポイント周辺に位置する。平面プランはほぼ正円で、規模は直径約1.10m、深さ40cmほどで掘り方のしっかりとした土坑である。縁辺からほぼ垂直に落ち、水平な底面となる。覆土はローム粒や砂粒を含む褐色土である。出土遺物は奈良・平安時代土師器３点のみである。なお本土坑も第５・６号土坑と同じく形状的に、南関東を中心に古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落で多数確認される「円形土坑」に類似している。

第８号土坑 SK08（第22図）

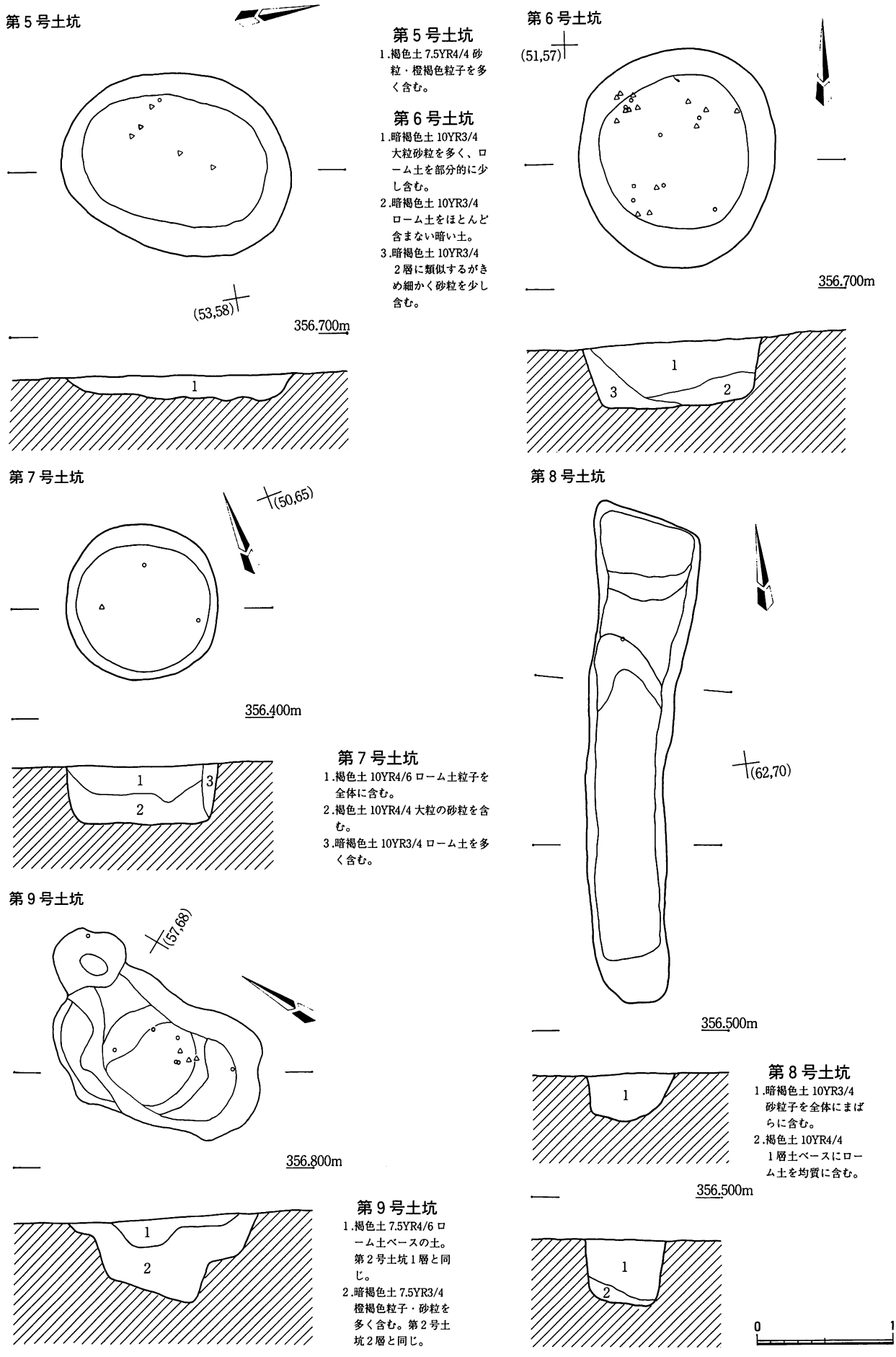
本土坑は調査区西部北際から検出されたもので、X=62、Y=69ポイント周辺に位置する。平面プランは細長い溝状で、底面はほぼ平らであるが北寄りに一部段が見られる。規模は南北長約3.50m、東西幅約60cm、深さは約30～50cm程度であるが、掘り込みはしっかりとしている。覆土は砂粒を若干含む暗褐色土である。出土遺物は奈良・平安時代の土師器２点である。

第９号土坑 SK09（第22図）

本土坑は調査区ほぼ中央部西寄り、第16号土坑の北、第３・４号土坑の南から検出されたもので、X=57、Y=68ポイント周辺に位置する。平面プランは不整形な長方形で、北にピットがある。規模は南北長約1.60m、東西長約90cm、深さは最深部で60cmほどである。全体的に粗雑な掘り方で、縁辺から急激に落ちた後、底面は一段をつくってさらに落ち込んでいる。覆土は基本的に第２号土坑と同じで、ローム土粒子を多く含む褐色土と暗褐色土からなる。出土遺物はすべて奈良・平安時代の土師器12点である。

第10号土坑 SK010（第23図）

本土坑は調査区の中央部やや西寄りで、第11号土坑によって北端を切られており、X=51、Y=69ポイント周辺



第22図　第5～9号土坑平・断面図

に位置する。平面プランは東西に長い楕円形で、若干凹凸が多い底面からやや傾斜して立ち上がり縁辺に至っている。規模は長軸長約1.80m、短軸長約1.10m、深さ60cmほどを測る。覆土は暗褐色土を中心とする。出土遺物は縄文石器３点と奈良・平安時代土師器１点である。

第11号土坑 SK011（第23図）

本土坑は調査区の中央部やや西寄りで、第10号土坑の北端を切ってつくられていたもので、X=50、Y=68ポイント周辺に位置する。平面プランはかなり南北に長い長方形で、規模は長軸長約2.70m、短軸長約80cm、深さ20cmほどを測る。壁は各面ともほぼ垂直に立ち上がり、底面は南から北に向かって若干であるが傾斜している。覆土は暗褐色土の単層である。出土遺物は縄文石器１点と奈良・平安時代土師器２点である。

第12号土坑 SK012（第23図）

本土坑は調査区の中央部南寄りから検出されたもので、X=47、Y=66ポイント周辺に位置する。平面プランは南北方向にやや長い長方形で、第４～６号焼土跡群とそれを包括するように掘られた土坑を切ってつくられている。規模は南北長約1.70m、東西長約1.50m、深さ約１mと掘り込みの大変しっかりとした土坑である。壁面からほぼ垂直に落ち、屈曲してやや凹凸があるがほぼ水平な底面となる。覆土は上位にきめの細かい暗褐色土が、下層には極暗褐色土が若干堆積している。出土遺物は46点と土坑では比較的多いが、内訳は縄文土器８点・石器３点、奈良・平安時代土師器坏５点、甕30点である。

第13号土坑 SK013（第24図）

本土坑は調査区ほぼ中央部の北際の第５号住居西から検出されたもので、X=79、Y=77ポイント周辺に位置する。平面プランは不整形な長方形で、規模は南北長約1.80m、東西長約3.40m、深さは最深部で60cmほどと比較的大形である。全体的にラフな掘り方の土坑であるが、不整形な縁辺から落ちた後、長円形状の平面形に段をつくってさらに落ち込んでおり、セクションでは切り合い関係は認められないものの、形態的には２重の土坑状になっている。底面はほぼ水平で東端の底面直上からやや大きな円礫が２つほど出土した。覆土は上層がローム土粒子を多く含む褐色土、下層は暗褐色土からなる。出土遺物は縄文土器・石器が７点、奈良・平安時代土師器類２点となっている。

第14号土坑 SK014（第24図）

本土坑は調査区の中央部南際近く、X=41、Y=72ポイント周辺にあり第８号竪穴住居跡を切ってつくられている。平面プランは東西に長い長円形で、規模は長軸長約2.80m、短軸長約1.60m、最深部で深さ80cmほどを測る。縁辺から徐々に深くなり、底面は若干の段を持つ。覆土は比較的単純でローム土ベースの褐色土による一次堆積の後、多量の暗褐色土によって埋まっている。出土遺物は奈良・平安時代土師器１点があるだけだが、切り合い関係から平安時代以降のものと考えられる。

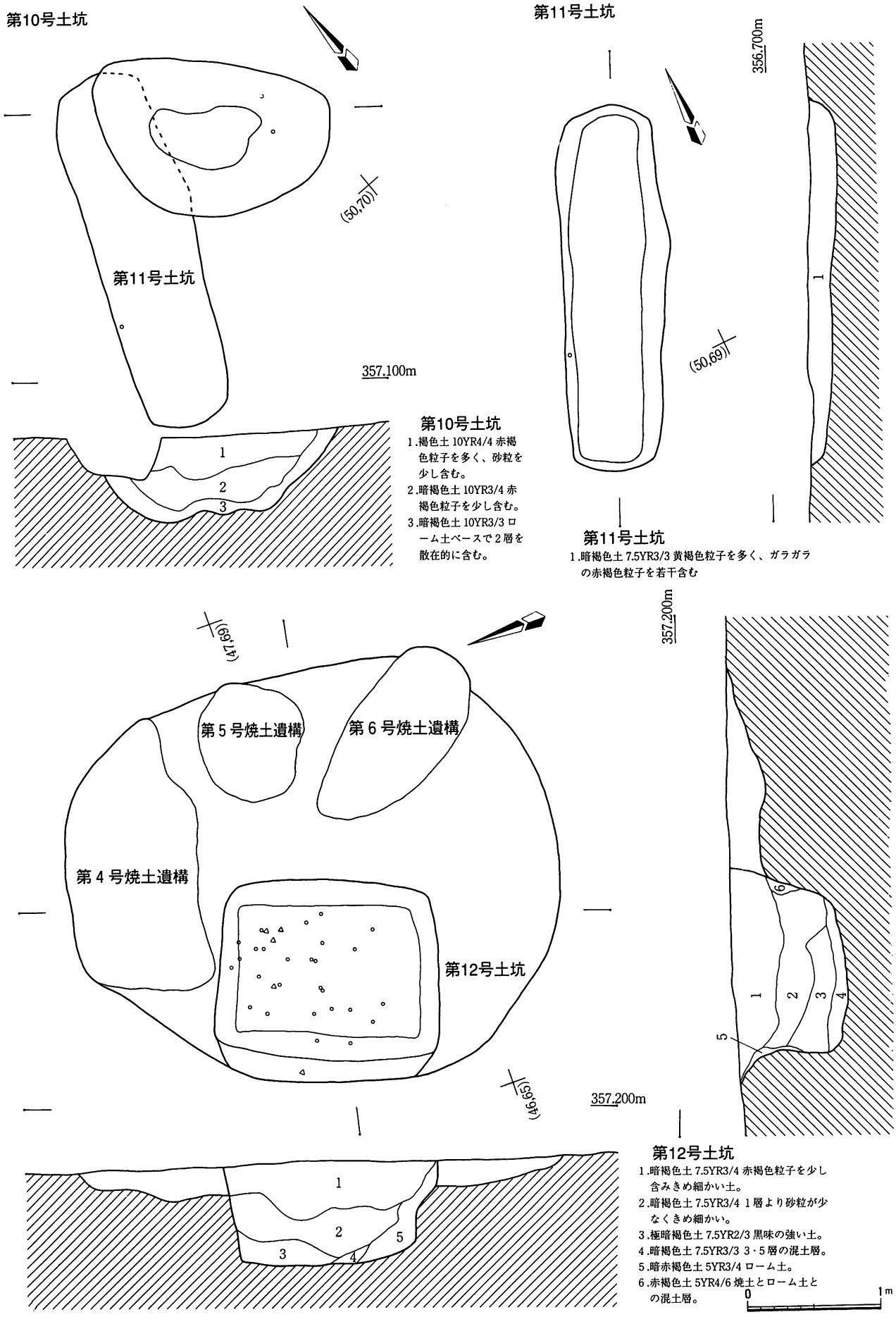
第15号土坑 SK015（第25図）

本土坑は調査区東部の南際寄りから検出されたもので、X=39、Y=82ポイント周辺に位置する。平面プランは不整形な長方形で、第21号土坑に切られ、第20号土坑とは南辺を接してつくられている。規模は南北長約3.60m、東西長約1.50mで、深さは最深部で50cmほどである。全体的に比較的粗い掘り方の土坑で、底面はかなり凹凸があり、縁辺はやや緩やかに立ち上がっている。覆土は上層が黄褐色粒子を大変多く含む褐色土、下層はローム粒を多く含む暗褐色土からなる。本土坑は切り合い関係から第21号土坑よりは古いことが明らかであるが、出土遺物は奈良・平安時代土師器１点のみである。

(3) ピット群（第２図）

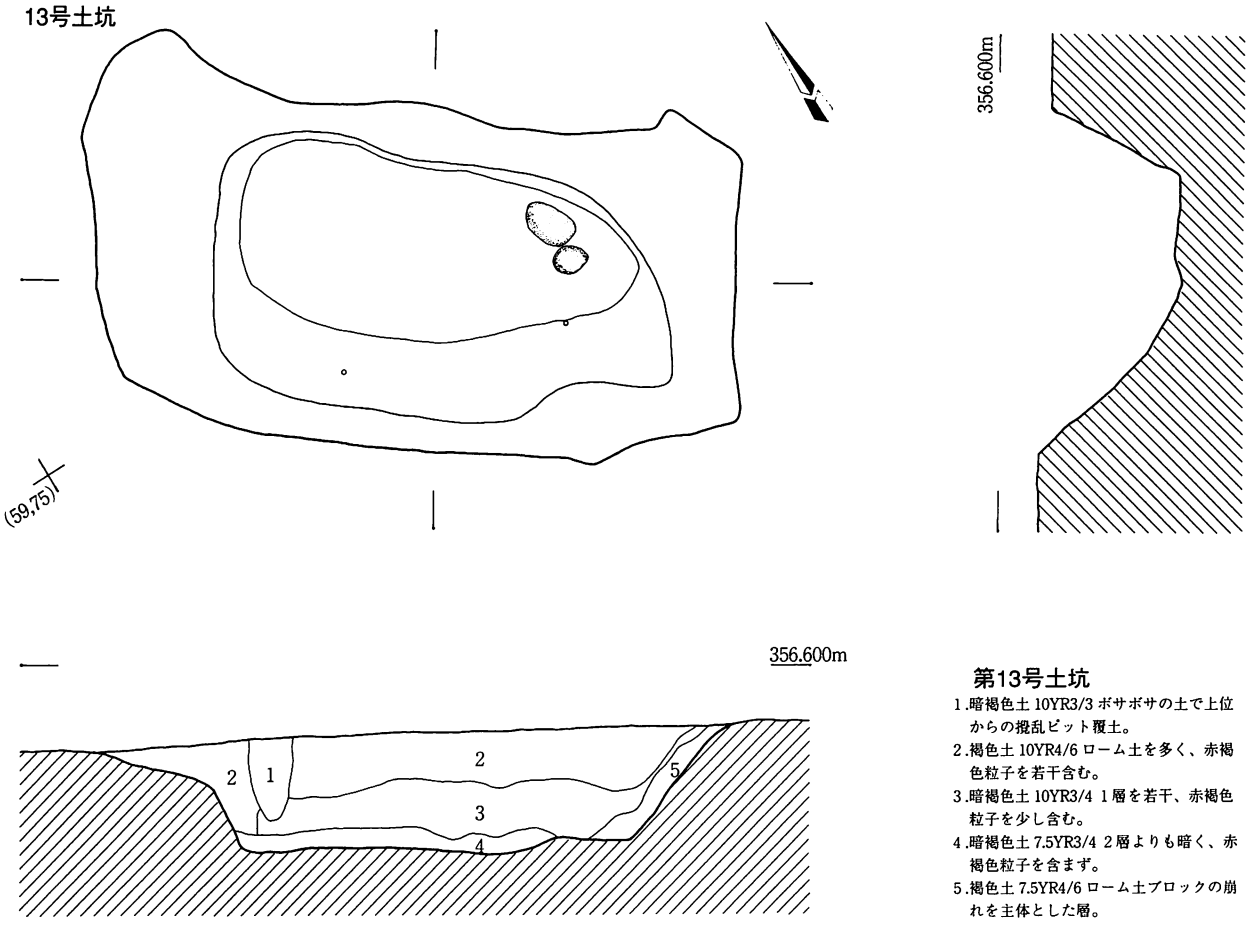
Ⅱ区からは、大小併せて139カ所のピットが検出されたが、これらは調査区中央部に偏る傾向が見受けられる。またこれらのピットの配置や並びから検討して見ると、一見掘立柱建物跡に復元できそうなものもあるが、深さなどがまちまちで統一性が窺われないことから認定には至っていない。ただし何カ所かでは列を構成しているように見受けられるものあり、柵列等に復元できる可能性はある。

一方これらのピット覆土は多くの場合、褐色土もしくは暗褐色土で、他の遺構覆土と比較すれば、おおむね奈



第23図　第10～12号土坑平・断面図

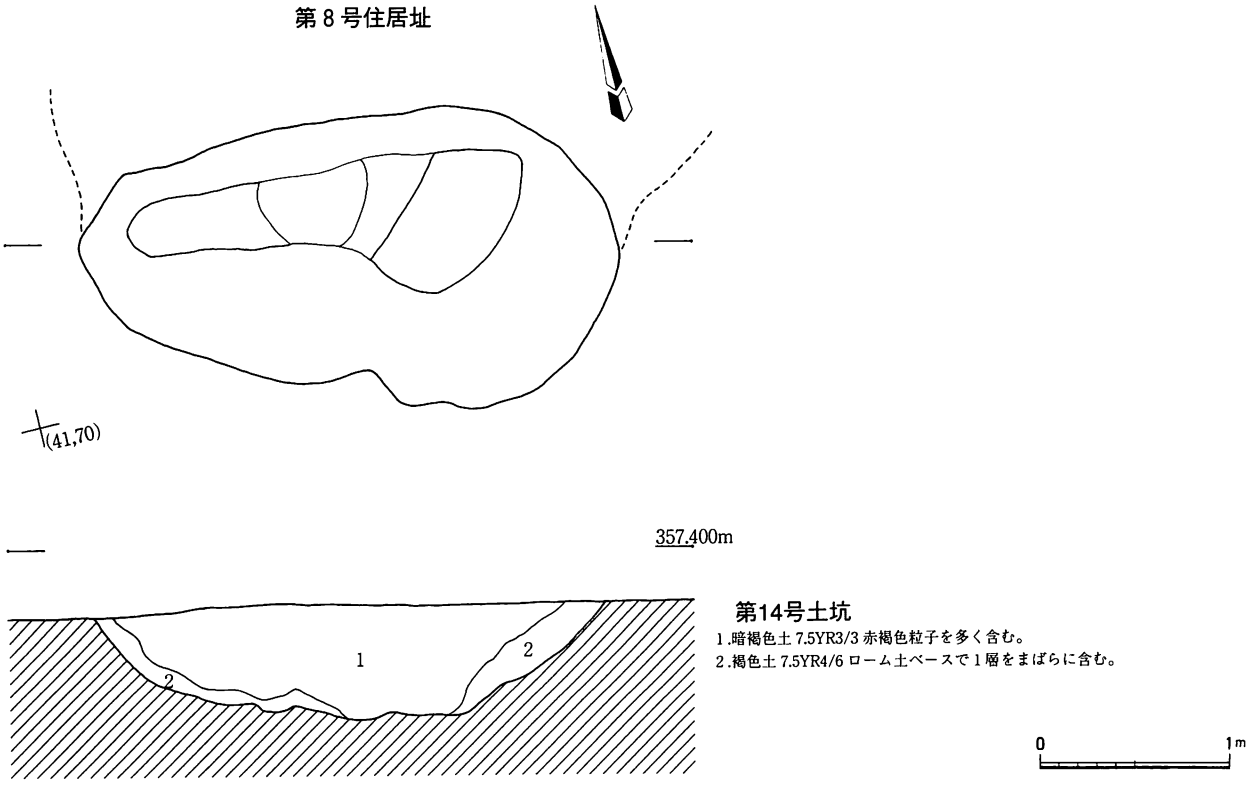
13号土坑



第13号土坑

1.暗褐色土 10YR3/3 ボサボサの土で上位からの攪乱ピット覆土。
2.褐色土 10YR4/6 ローム土を多く、赤褐色粒子を若干含む。
3.暗褐色土 10YR3/4 1層を若干、赤褐色粒子を少し含む。
4.暗褐色土 7.5YR3/4 2層よりも暗く、赤褐色粒子を含まず。
5.褐色土 7.5YR4/6 ローム土ブロックの崩れを主体とした層。

第14号土坑

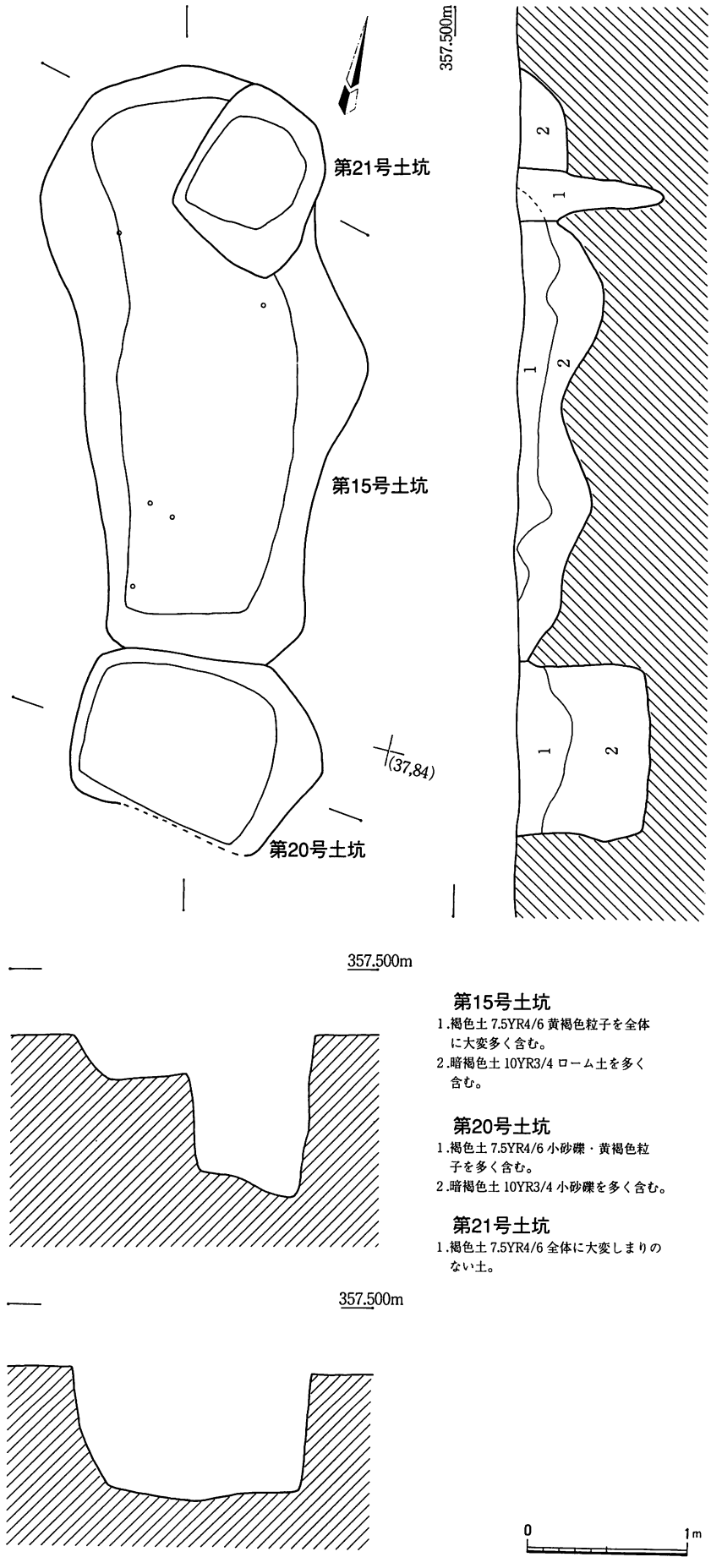


第14号土坑

1.暗褐色土 7.5YR3/3 赤褐色粒子を多く含む。
2.褐色土 7.5YR4/6 ローム土ベースで1層をまばらに含む。

0 1m

第24図　第13・14号土坑平・断面図



第15号土坑

1.褐色土 7.5YR4/6 黄褐色粒子を全体に大変多く含む。
2.暗褐色土 10YR3/4 ローム土を多く含む。

第20号土坑

1.褐色土 7.5YR4/6 小砂礫・黄褐色粒子を多く含む。
2.暗褐色土 10YR3/4 小砂礫を多く含む。

第21号土坑

1.褐色土 7.5YR4/6 全体に大変しまりのない土。

第25図　第15・20・21号土坑平・断面図

良・平安時代遺構覆土と類似していることから、こうしたピット群も多くは同時期のものである可能性が高いと推測される。しかしながらほとんど遺物が伴出していないため、明確な時期の限定は困難である。なおピットから出土した遺物は全部で61点であるが、その内訳は縄文時代土器10点、石器７点、奈良・平安時代土師器坏10点、甕29点、須恵器坏１点、壺・甕類３点、渡来銭１点である。

この他、遺構外から出土した奈良・平安時代の遺物は、土師器坏49点、甕78点、須恵器坏１点、壺・甕類４点、灰釉陶器椀・皿類１点の合計133点である。

第３節　中・近世の遺構

第１項　Ⅰ区

平地造成面・第１号溝（第27図）

Ⅰ区では調査範囲の南東部を中心にローム層を切り込んで、溝（第１号溝）の開削および平地面が造成されていた。この溝は調査区外の東側から徐々に幅を広げながらＳ字状に湾曲しつつ調査区の北へ抜けていくが、深度は全体的にほとんど変わらず底面で標高355.6mを維持している。また途中２ヶ所でより小規模な溝を併せている。時期を検討し得る遺物はほとんどないが、近世の陶磁器等が２点ほど、泥人形１点が出土している。これらの溝の機能は明らかではないが、この溝の西端に接するように、近代以降のもので、石組を持ち明らかに水路と推測される複数の溝が存在しており、水田等への導水路である可能性は否定できない。ただし水路だとすれば、導水方向が問題となろう。

平地造成面はこの第１号溝の南に接して造成されている。底面はほとんど水平であり畝のような高まりは存在しなかった。ただし一部では築山のようにローム層が掘り残されているが、その理由は明らかではない。一方、壁面の堆積状況を見ると、造成面範囲のみにほぼ水平な粘質砂層が何層か形成されていることから、これらの低位面は水田として造成・利用されていた可能性が高いと推測される。この平坦面が造成された時期についても確実な資料はないが、出土した少数の陶磁器片から、第１号溝と同じく近世のことと考えられる。

なお、この第１号溝の内部には南方向からと推測される大形の円礫が多数存在しており、地震等によって引き起こされた調査区域南側の山地崩落に伴ってここまでおよんだものと推測される。

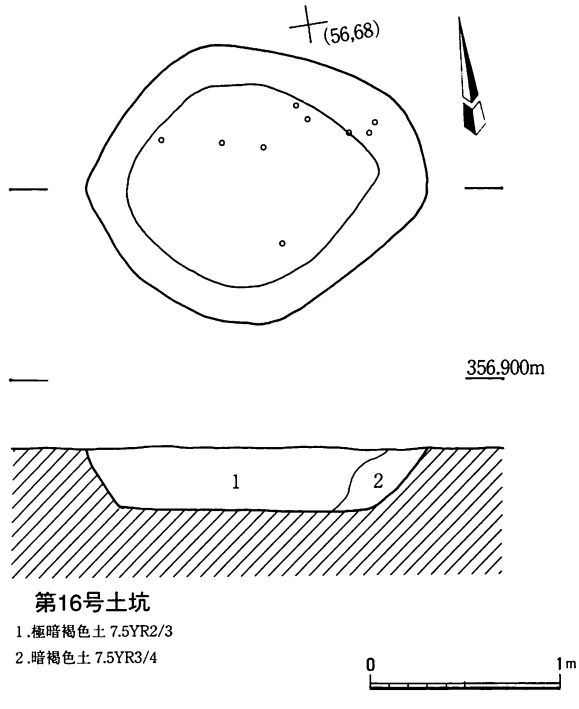
第２項　Ⅱ区

Ⅱ区で中・近世のものと判断できる遺構は土坑１基とピット１ヶ所のみである。

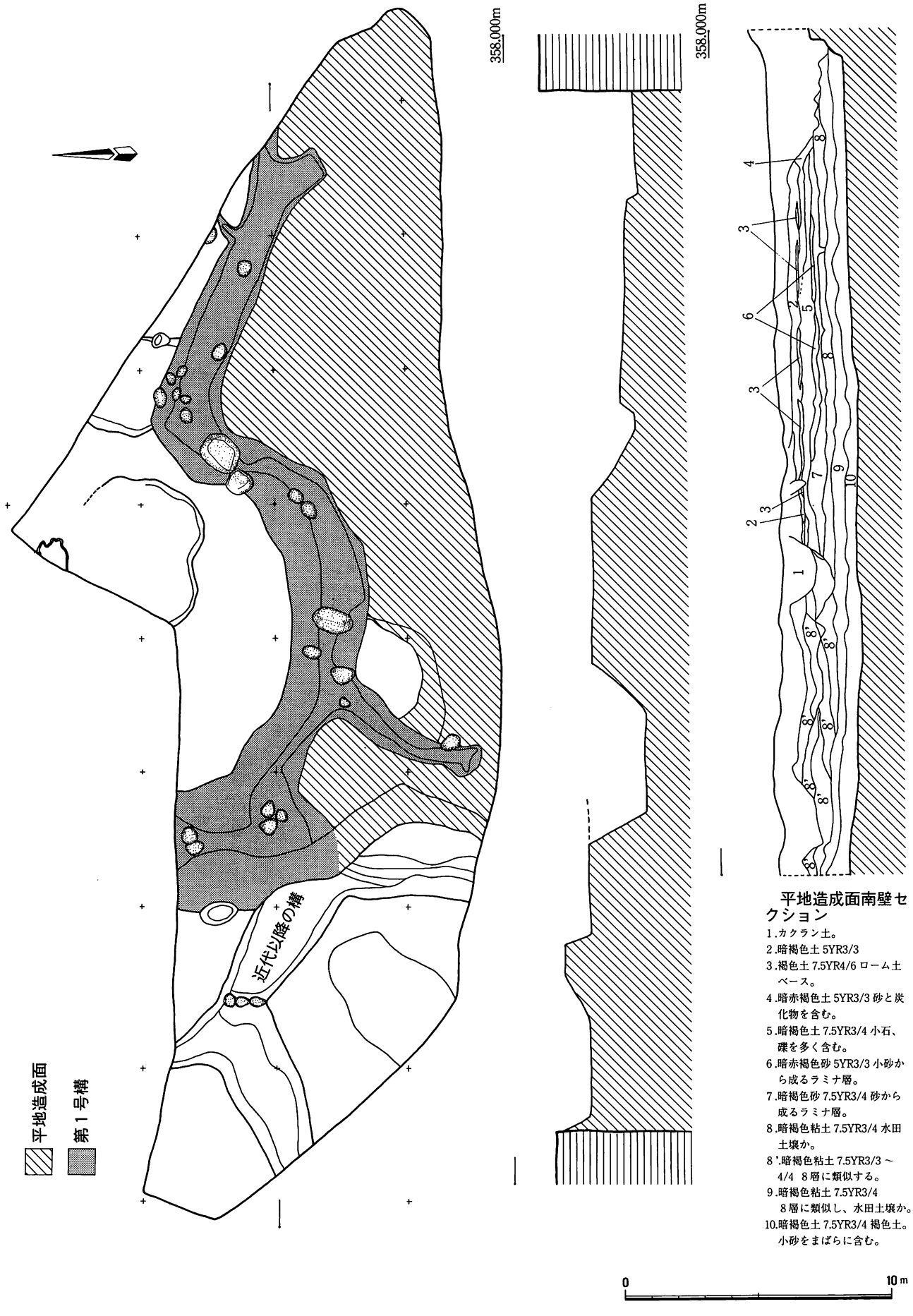
(1) 土坑

第16号土坑 SK016（第26図）

本土坑は調査区の中央部やや西寄り、X=55、Y=68ポイント周辺に位置する。平面プランはやや東西に長い楕円形で、規模は長軸長約1.80m、短軸長約1.40m、最深部で深さ30cmほどを測る。縁辺からほぼ垂直に落ち、ほぼ水平な底面となる。覆土はかなり暗い暗褐色土によって埋まっている。出土遺物は縄文土器３点、奈良・平安時代土師器10点そして中・近世陶磁器１点である。



第26図　第16号土坑平・断面図

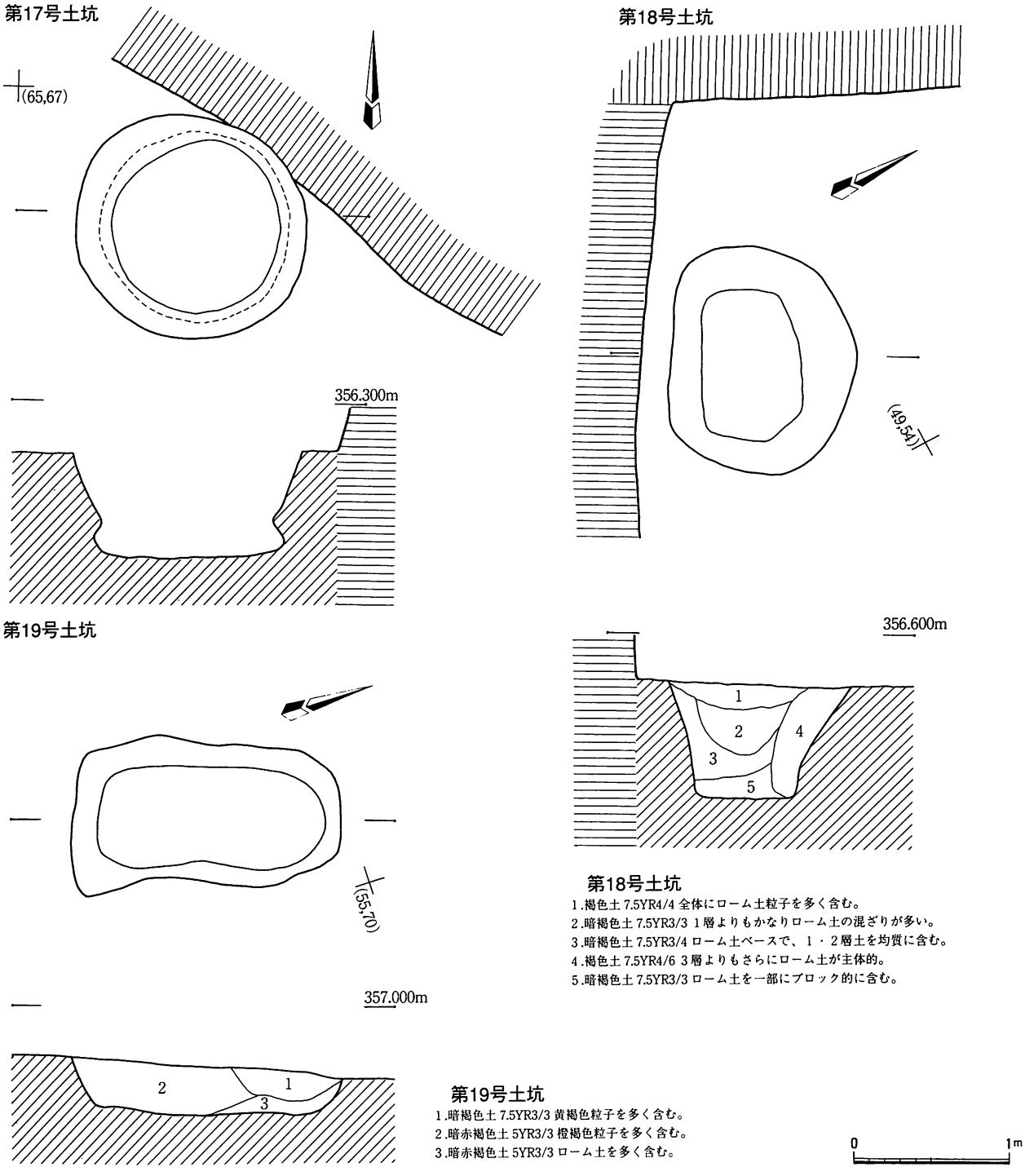


第27図　Ⅰ区平地造成面、第１号溝平・断面図（1/200）

(2) ピット

第２号ピットＰ２（第２図）

Ⅱ区のほぼ中央、X=50、Y=71ポイント周辺にある小ピットで、覆土より縄文石器と北宋銭（紹聖元宝）１枚が出土したため、中・近世の遺構と判断した。



第28図　第17～19号土坑平・断面図

第４節　時期不明の遺構

第１項　II区

大多数のピット以外で、時期の判断がつかない遺構は、土坑５基である。

(2) 土坑

第17号土坑 SK017（第28図）

本土坑は調査区の西南隅、X=49、Y=53ポイント周辺に位置する。平面プランは東西方向にやや長い隅丸長方形で、規模は長軸長約1.40m、短軸長約1.20m、深さ70cmほどを測る掘り方のしっかりとした土坑である。水平な底面から屈曲して立ち上がり撥状に開いて縁辺に至る。覆土はローム土ベースの褐色土や暗褐色土である。なお遺物は出土していない。

第18号土坑 SK018（第28図）

本土坑は調査区の西部北際の、X=64、Y=68ポイント周辺に位置し、東に接して第８号土抗がある。平面プランはほぼ正円形で、規模は直径約1.40m、深さ70cmほどで、掘り方はしっかりしている。若干丸底気味の底面は10cmほどオーバーハングしており、高さ20cmほどのところでくびれて開き気味に立ち上がっている。なお遺物は出土していない。

第19号土坑 SK019（第28図）

本土坑は調査区の中央部やや西寄り、第18号土坑南東のX=54、Y=69ポイント周辺に位置する。平面プランは南北方向に長い長方形で、規模は長軸長約1.70m、短軸長約90cm、最深部で深さ30cmほどを測る。縁辺からほぼ垂直に落ち、ほぼ水平な底面へ移行する。覆土は暗褐色土によって埋まっている。なお遺物は出土していない。

第20号土坑 SK020（第25図）

本土坑は調査区東部の南際から検出されたもので、X=37、Y=83ポイント周辺に位置する。平面プランは若干東西に長い長方形で、北辺全体を第15号土坑に接しているが、新旧関係ははっきりしない。規模は南北長約１m、東西長約1.50m、深さ約80cmと掘り込みは大変しっかりとしている。覆土は小砂礫を多く含む褐色土である。なお遺物は出土していない。

第21号土坑 SK021（第25図）

本土坑は調査区東部の南際寄りから検出されたもので、X=40、Y=82ポイント周辺に位置する。平面プランはややいびつな方形で、第15号土坑を切ってつくられている。規模は南北長約１m、東西長約80cm、深さ約１mと掘り込みの大変しっかりとした土坑である。覆土は全体にしまりのない褐色土である。切り合い関係から本土坑は第15号土坑よりは新しいことがわかる。なお遺物は出土していない。

（小林公治）

第３章　出土遺物

第１節　縄文時代の遺物

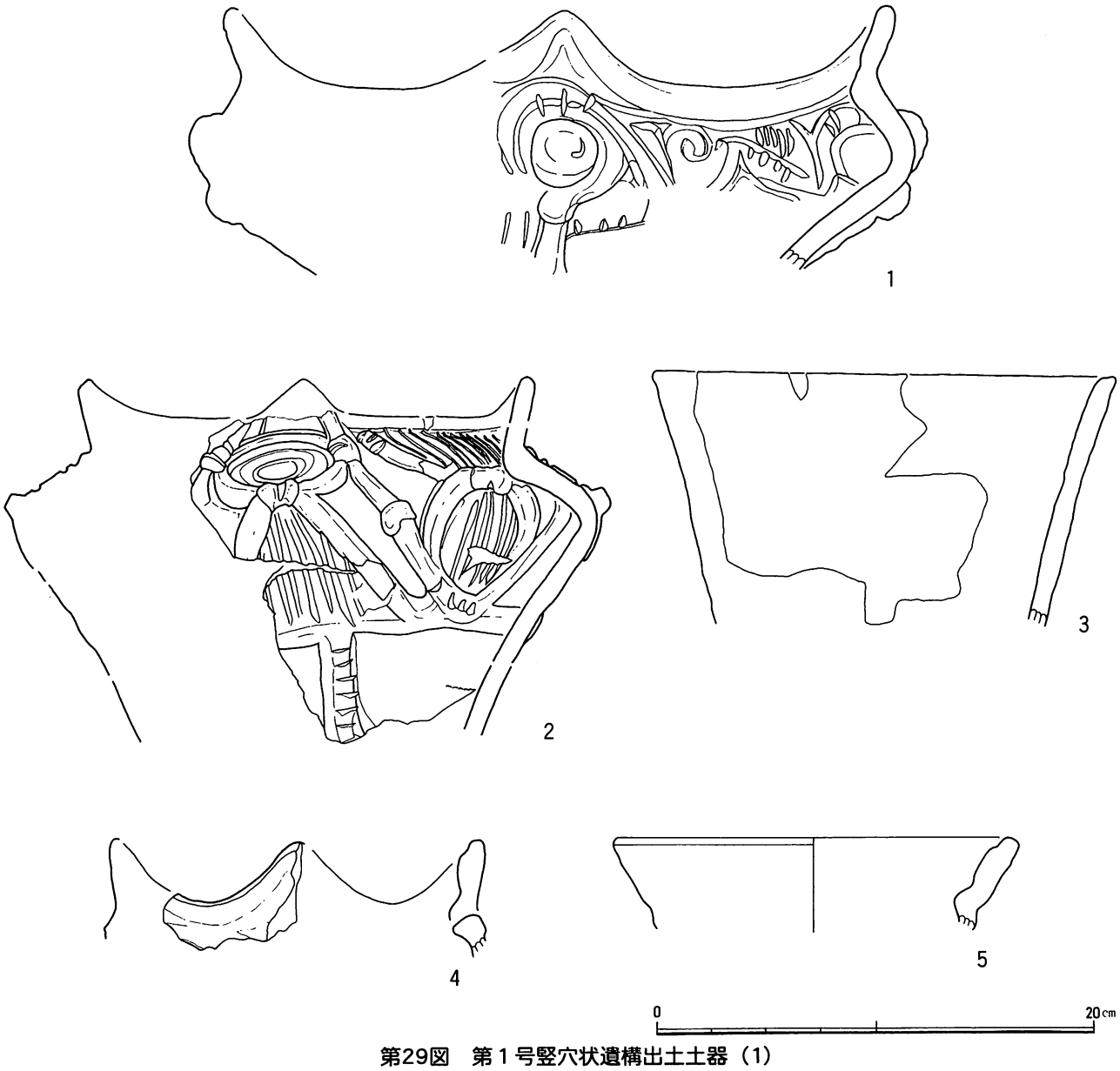
第１項　Ⅰ区

第１号竪穴状遺構出土遺物（第29～32図）

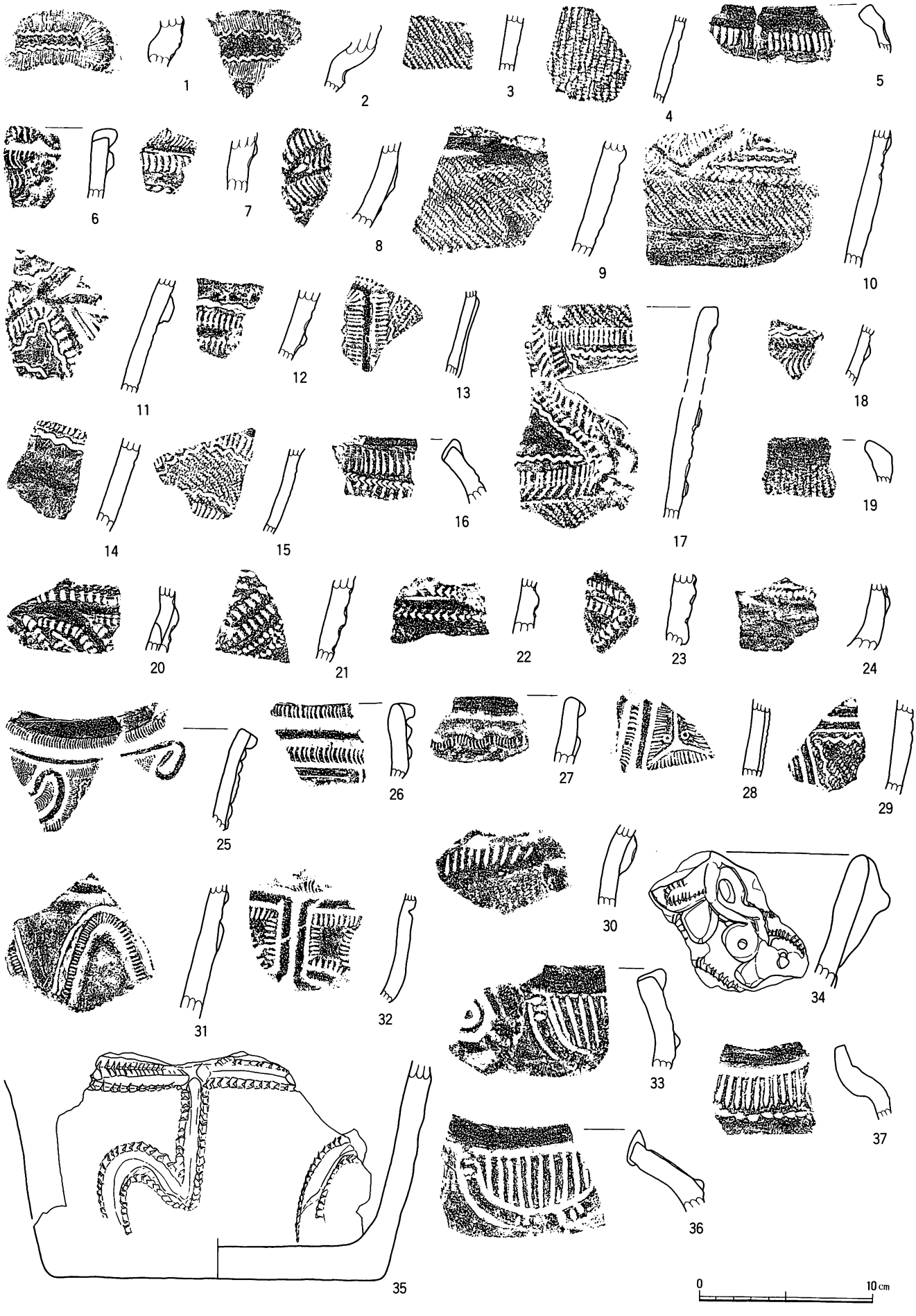
土器（第29～31図）

第29図は井戸尻Ⅱ式段階に位置付けられるもので、すべて口辺部しか存在しない。１は波状口縁で、口縁部文様帯は隆帯によって４単位に区画されるものであり、この区画文内には刻みが施されている。２は口縁部文様帯が隆帯によって４単位に区画され、区画内は縦位の沈線があり、胴部には口縁部文様帯下に隆線が垂下し、この隆帯上には刻みが施されている。３は無文地の粗製土器。４は波状口縁、５は平縁の口縁部である。

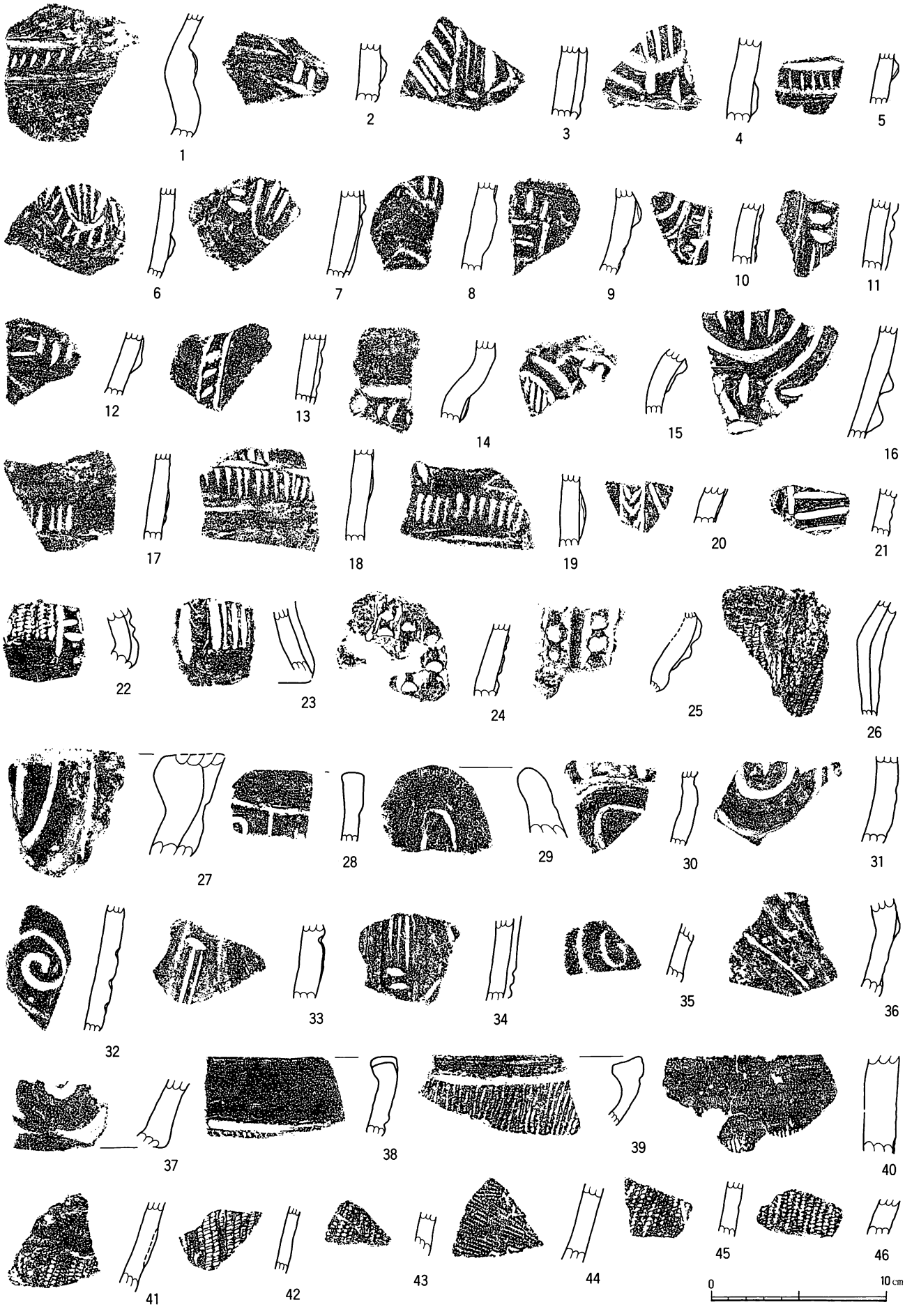
第30図１・２は新道式で、口辺部分には楕円形区画文が施され、その区画内には爪形文と沈線文が配されている。３～35は藤内式でそのほとんどがⅠ式段階に位置付けられよう。３・４・９・19は縄文が施されたものである。５・７・８、10～18、20～24はキャタピラ文が施されるもので、10は三角形の区画文が配され、隆帯上には刻みが、区画文内には横位に波状沈線が施されている。11・13・14・15・18はキャタピラ文脇に沈線が施されている。17は隆帯上に矢羽状の刻みによる区画文が配され、隆帯脇には沈線が施されている。16はキャタピラ文脇にクサビ文が施されている。６、25～26、28は隆帯上にＣ字状の爪形文を施すもので、28は隆帯の区画文内に三



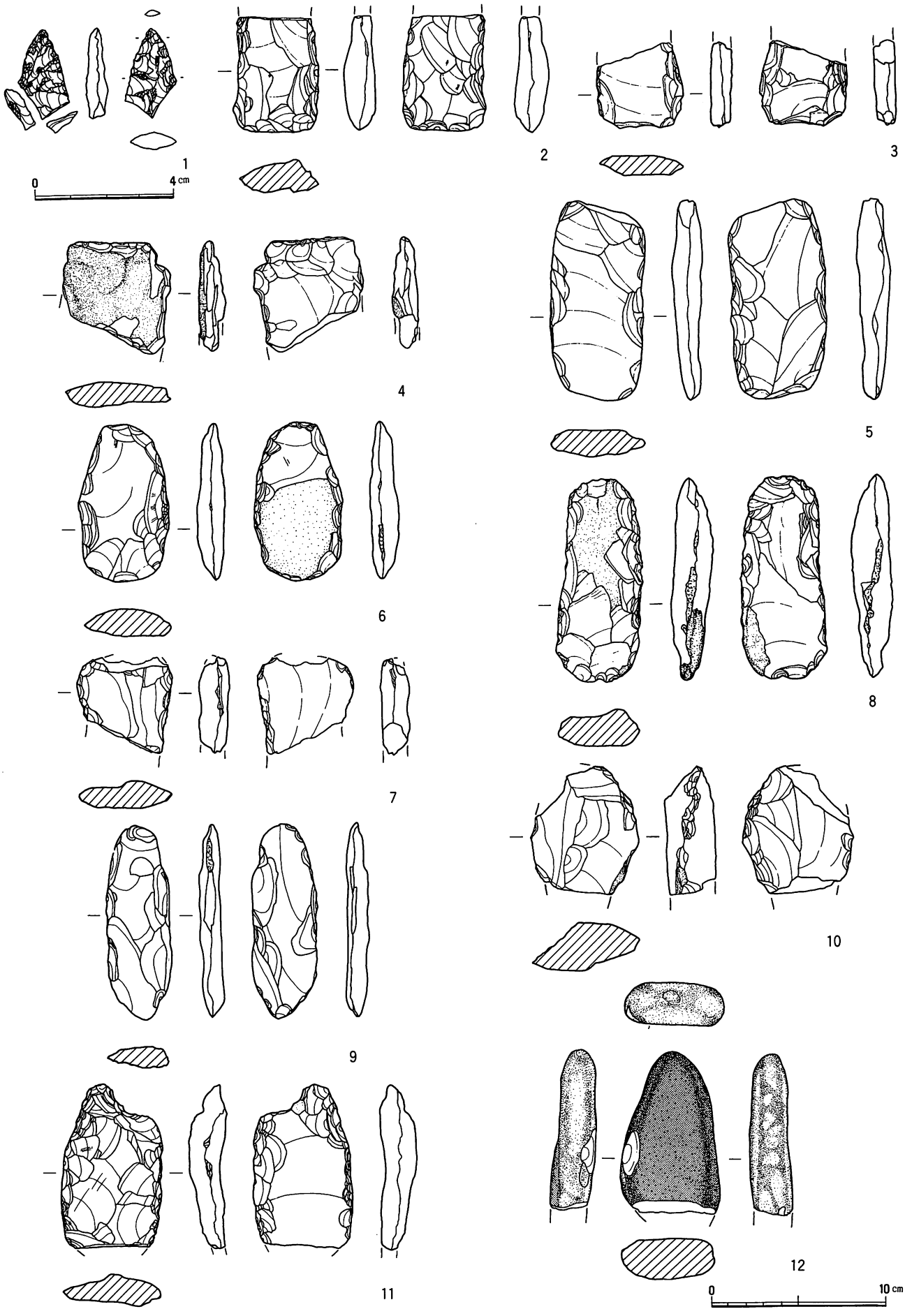
第29図　第１号竪穴状遺構出土土器（1）



第30図　第１号竪穴状遺構出土土器（2）



第31図　第１号竪穴状遺構出土土器（3）



第32図　第１号竪穴状遺構出土石器

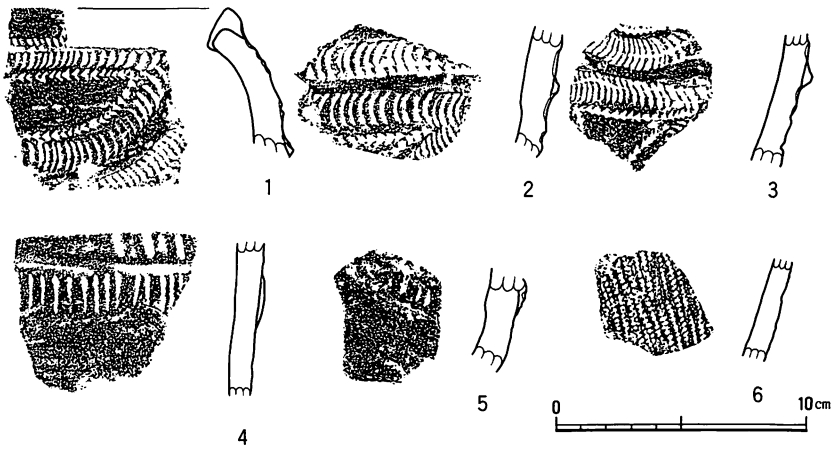
叉文が存在する。20～24は棒状工具による押し引き文で、三角押文やくさび文が施されている。29は区画文内に沈線を施すもの。27・31～34は隆帯上もしくは区画内に刻みが施されるもので、27・31は波状文をもつ。なお34には一部に赤色物質がわずかに付着残存している。35は底部で、横位と縦位に垂下する隆帯の脇に沿って押引きによる三角押文が施されている。第30図の35～37、第31図は井戸尻式段階のものである。第30図の36・37は口縁部で、半楕円形の区画文内に、縦位の沈線が施された櫛形文が見られる。37は口唇部下に縦位の刻みがあり、その脇に棒状工具による刺突文が施されている。第31図の1～19、21・22・33・34は隆帯上に刻みを持つ区画文内に、斜位ないし縦位の沈線が施されている。20・23は隆帯上に矢羽状沈線が施されているもので、34の表面には赤色塗彩が認められる。24・25は、指頭もしくはヘラ状工具による押圧隆帯が施されている。26～37は刻みを持たない隆帯が施されたもの。38～40・44は地文に撚糸が充填されているもので、39は浅鉢の口縁で、その他は深鉢である。41～43、44～46は縄文が施されたもので、41は貼り付の微隆起線が認められる。なお、37の内面には調理内容物がオコゲとして付着しているが、その種類を特定することはできない。

（野代幸和）

石器（第32図・第2表）

第32図1は黒曜石製の石鏃である。折損[1]により形態が不明である。左側の折れ面においては表面[2]側にリングが収束しているのに対し右側の折れ面では裏面側に収束しており、前者が後者を切っている。尖頭部[3]側では最終調整剥離まで一貫して反時計回りの錯向剥離を行っているが、体部側の左側縁においては背面に最終調整剥離[4]を加えている。

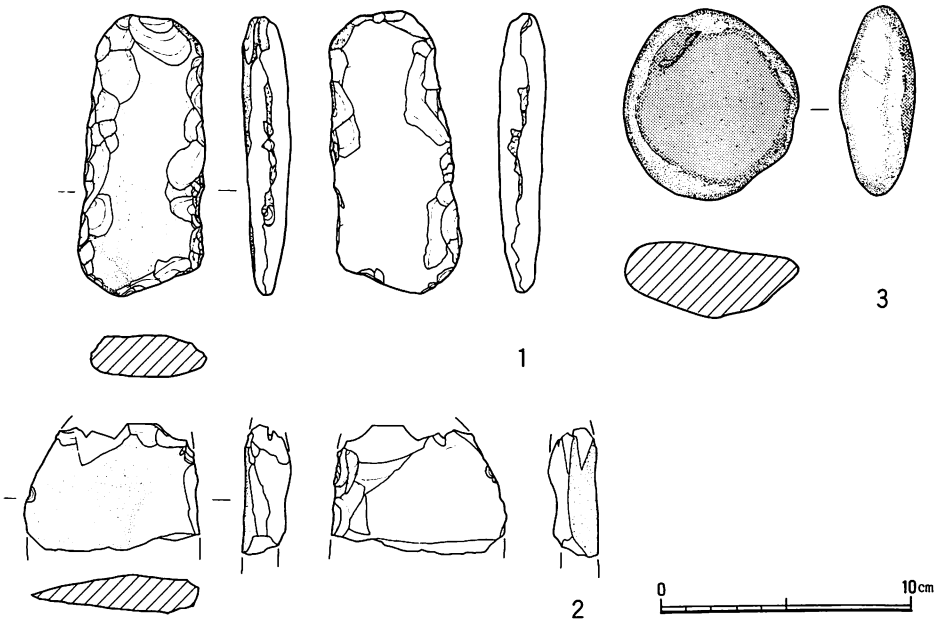
2～10の9点は打製石斧類である。このうち2～6・8は大山柏氏の分類（1927）による短冊形におおむね分類され、7と10は欠損しているため明らかではないが分銅型のものの可能性がある。8の両側面端はかなり明瞭な「潰れ」が観察され、着柄によるものである可能性がある。9は両端がやや尖り他の打製石斧とは異質な形態を持つが、一応打製石斧類としておきたい。



第33図　第2号竪穴状遺構出土土器

11は図上端部の片側半分に表面から集中的に剥離して抉りを入れ、突起状の刃部を作出している点で特徴的な石器である。両側面にも刃部が作られているが、打製石斧とは区分しておきたい。12は扁平な磨石・敲石類で表裏に磨面が観察される。

（網倉邦生・小林公治）



第34図　第2号竪穴状遺構出土石器

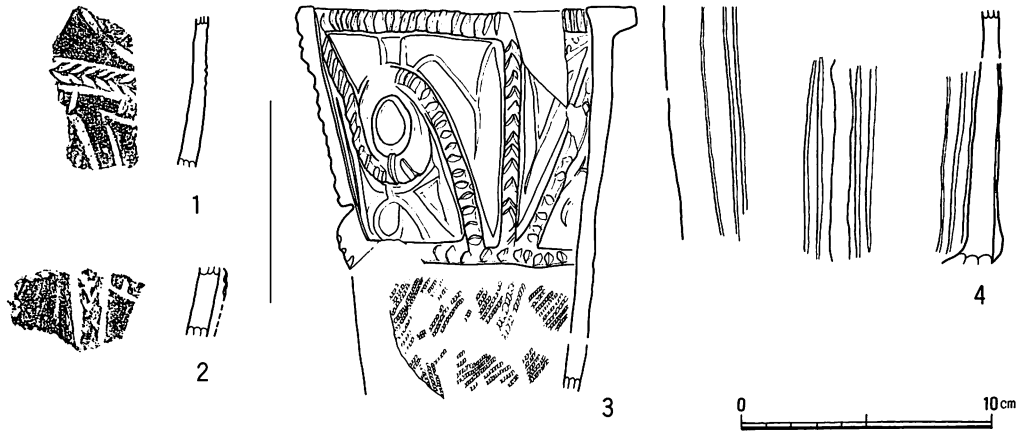
第2号竪穴状遺構出土遺物（第33・34図）

土器（第33図）

1～3は新道式で、半楕円形と三角形の区画文を配置

し、その区画内には爪形文とくさび文が施されている。4～6は井戸尻式に属するものと考えられ、4・5は隆帯上に刻みを持つもので、6は胴下半部のもので縄文が施されている。

(野代)



第35図　第2・3号土坑出土土器

石器（第34図・第2表）

1・2は打製石斧類である。1は短冊形のもので、基部よりの両側面端および基部の一部に着柄による可能性がある「潰れ」が観察される他、刃部にも若干の潰れと片半に刃部欠損が見られ、使用によって生じた痕跡の可能性がある。2は大きく破損しているため不明点が多いが、分銅型の可能性があろう。3は磨石・敲石類で表裏面に若干の磨面が観察される。

(小林)

第2項　II区

第2・3号土坑（第35図）

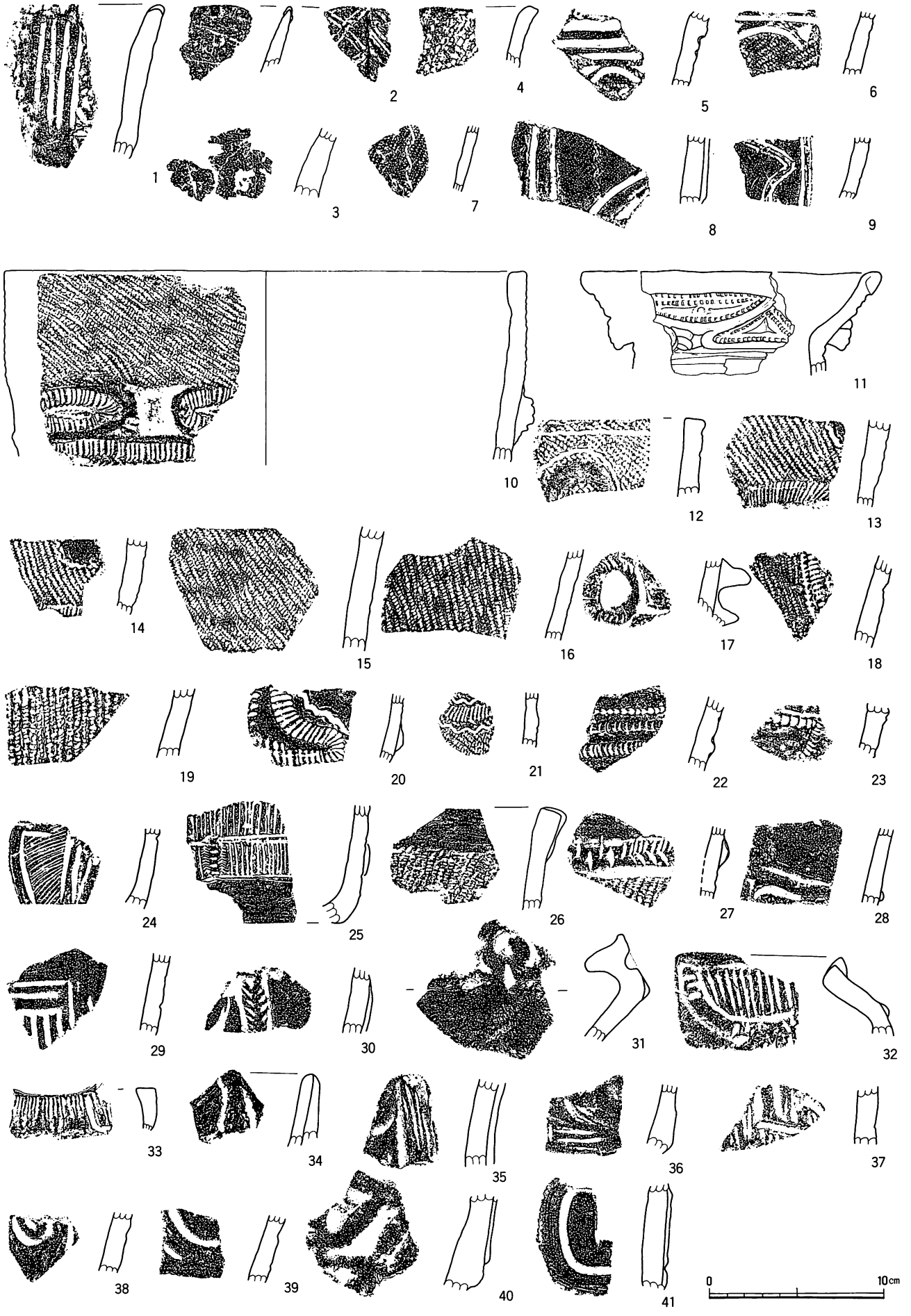
土器　1・2は第2号土坑出土のもので、隆帯上に矢羽状沈線を施した井戸尻Ⅱ式に比定されるものである。3・4は第3号土坑出土のもので、3は胴上部から上で半個体分残存しており、約14cmの最大径を測り深鉢型土器である。口辺部には三角形の区画文が展開し、隆線上は刻まれ、縦位の隆線には矢羽状を呈する区画文内には、中心部に円文が存在し、周囲に展開する文様帯には交互刺突文や三叉文などが充填され、井戸尻Ⅲ式に比定される。

(野代)

遺構外出土遺物（第36図～44図）

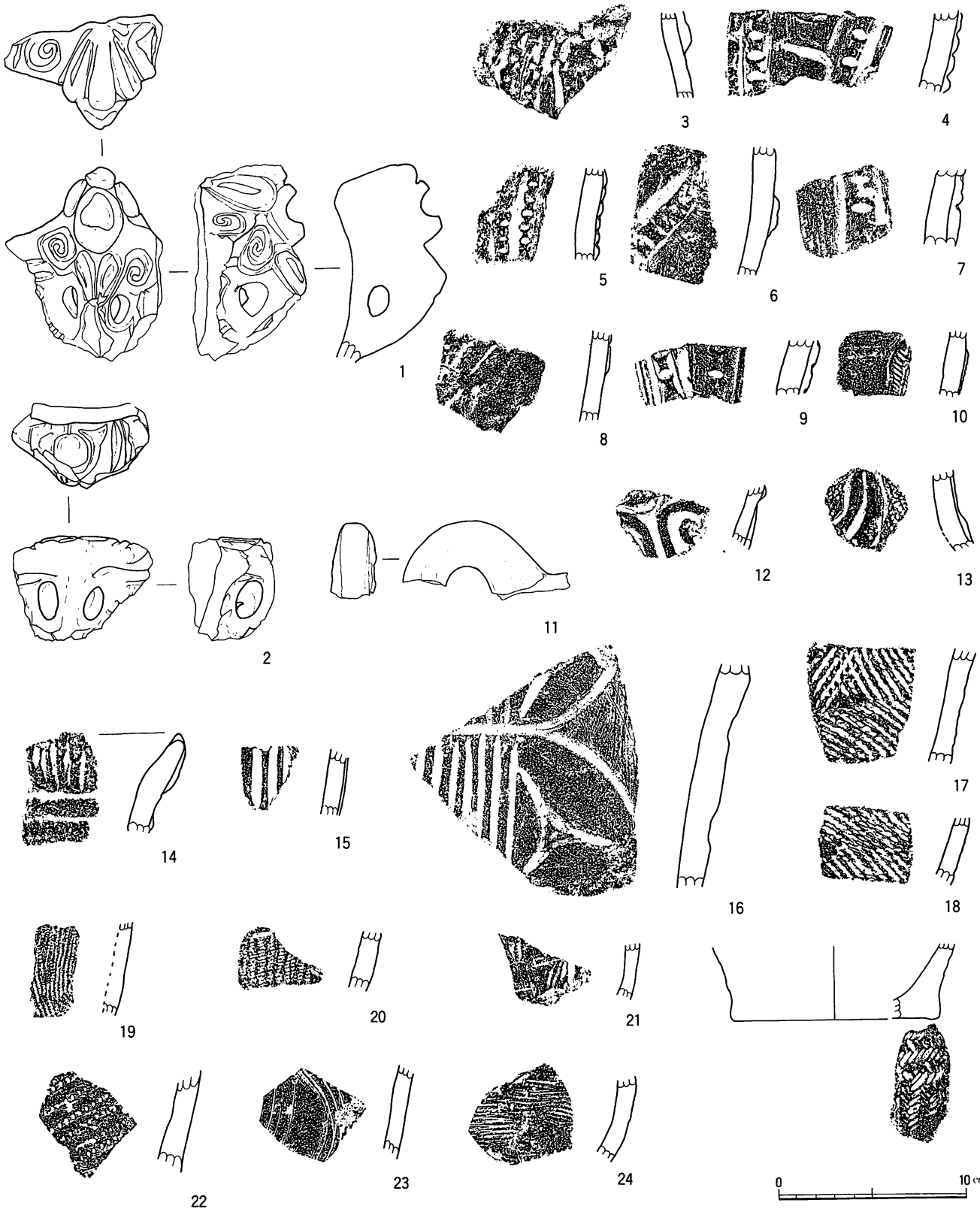
土器（第36図～38図）

第36図1は早期後半の条痕文系土器群に属する野島式に比定されるもので、縦位と斜位の条痕によって文様が構成され、口唇部に刻みが施されている。2・3は前期初頭の中越式段階に比定されるもので、2点とも繊維を含んでいる。2は口縁部に弱い垂紐貼付文が見られ、その両脇には沈線による格子目文が施される。3は無文である。4は前期前半の関山式と考えられ、粗めの縄文が施されている。5～9、第37図14は中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式に比定されるもので、5～8は縄文地、6には三角印刻文が、9は無文地に横位と縦位に沈線文が施されており、7・8は縦位に結節縄文が見られる。11は推定径16.8cmを測る新道式で、口縁部文様帯には半楕円形と三角形の隆帯による区画文があり、区画文脇には棒状工具による押し引き文が巡り、その内部には三叉文などが配される。10・12～25は藤内式に比定されるもので、10は口縁部縄文帯下に楕円形区画文が配され、その内部はキャタピラ文と沈線が施されている。12～14は縄文地に沈線による円文が施され、その内部は磨消されている。18・22・23は押し引きによる連続爪形文が施され、17・22には三角押文が並走する。20・21にはキャタピラ文が配され、脇には沈線が施されている。24にはパネル文が見られ、区画内には斜行沈線が施される。25は底部付近で、横位の文様帯を区画する平行沈線と縦位の沈線が配され、この文様帯内には短隆帯を縦位に貼付したムカデ状文が施されている。第36図26～41、第37図1～13・15・16は井戸尻式に比定されるものである。27・30は隆帯上に矢羽状沈線が見られるが、27では一部交互刺突化している。32は櫛形文が見られ、区画する隆帯上には交互刺突文が、区画内には縦位の沈線が施されている。その他のものは隆帯と沈線文を併用するものである。第37図1・2は渦巻文などが施された把手部分、3～10は隆帯上に刻みが付けられたもので、12・13は縄文地に隆帯が、5は無文地に隆帯が、16は楕円区画内に縦位の沈線と三叉文が施されている。第37図17～25、第38図1は中期後葉



第36図　縄文時代遺構外出土縄文土器（1）

の曽利式に比定されるもので、25の底部には網代痕がある。第37図22、第38図の２～４は加曽利ＥⅣ式で、２は口唇部下に沈線が横走し、口縁部下には無文地に沈線によって渦巻文と考えられるものが施されている。４は縄文地に微隆起線が縦位に施される。第38図５～７は後期初頭の称名寺式で、５～７は沈線と沈線の間に施された磨消縄文によるＪ字文などが見られるＩ式、６は無文地に沈線が縦位に垂下するⅡ式。９～16は後期前葉の堀之内式で、９はＩ式に比定されるであろう注口土器の口縁部で、その他のものはⅡ式段階に属するもので、10は口唇部に隆帯上が刻まれて紐状を呈するものが横位に見られ、その下には胴上部に広がる横帯区画の沈線文が二条



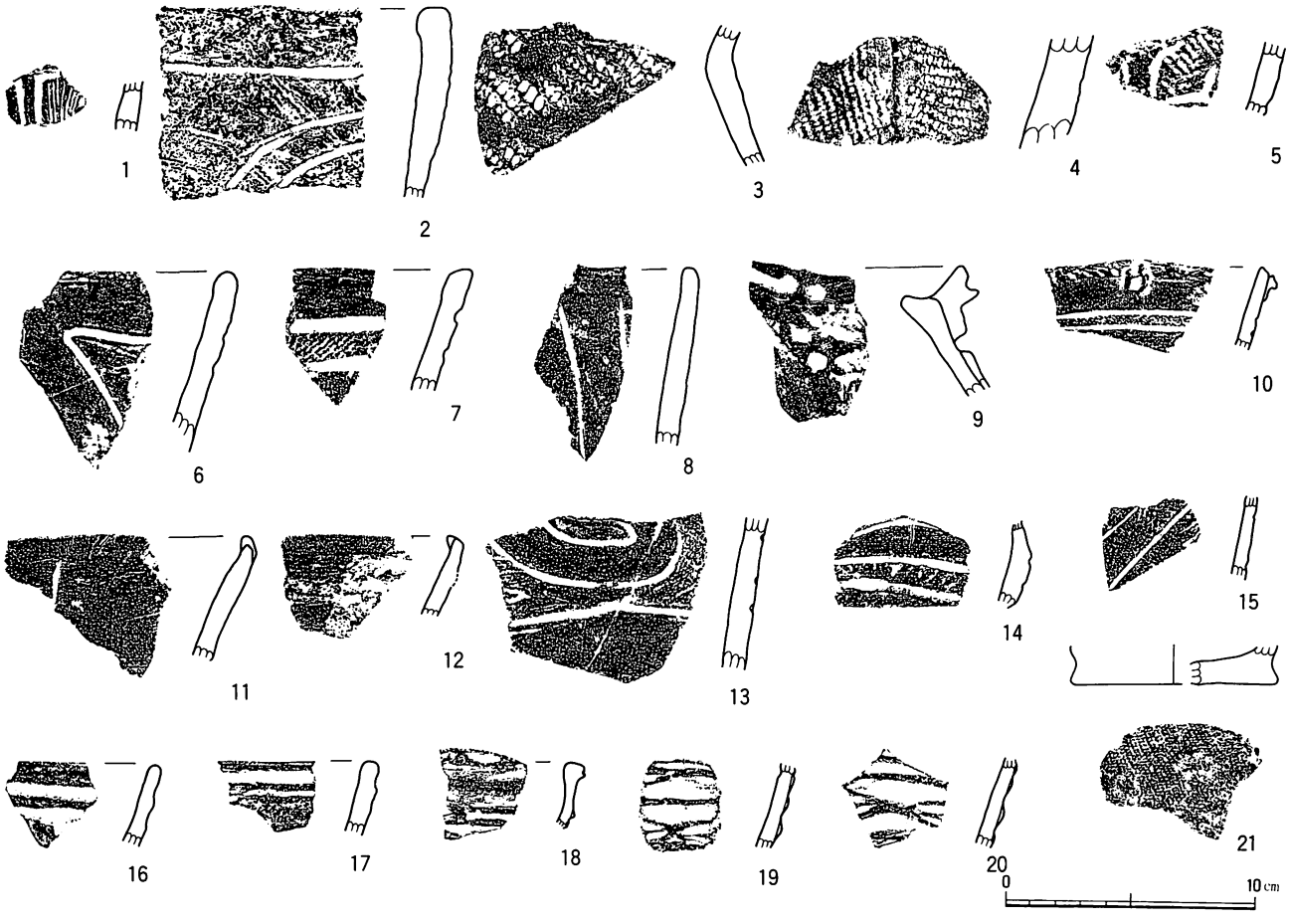
第37図　縄文時代遺構外出土縄文土器（2）

見られる。11・12は口唇部が内側に屈曲する。12～15は沈線文を基調とするものである。17～22は網状浮線文と変形工字文が配された晩期末葉の氷Ⅰ式である。

（野代）

石器（第39図～44図・第２表）

第39図１～６は凹基無茎鏃である。１は緑色凝灰岩製で左右側縁の中位に４対の非対称な鋸歯縁状突起を有す。尖頭部先端の折れ面は表面に、左脚部の折れ面は裏面側にリングを収束させている。尖頭部における調整が、反時計回りの錯向剥離から、両側縁の表面側に最終調整剥離を加えるのに対し、体部中央では左側縁から右側縁へ両面調整を加えている。２はチャート製で左右側縁は緩やかに内湾しており、左右脚部の形態や尖頭部及び脚部と体部との断面厚は共に著しく異なる。時計回りの錯向剥離によって作業は進行し、最終調整剥離を左側縁においては表面に加え、右側縁の尖頭部側においては裏面に、体部側においては表面に加えて作業を終えている。3は黒曜石製で左右側縁は直線状を呈するが、尖頭部先端までは連続せず両側縁は直角で交わる。左脚部の折れ面は背面側にリングを収束させ、背面には素材面と考えられる時差のある剥離痕を残す。右側縁から左側縁へそれぞれ両面調整を加え、最終調整剥離を左側縁では腹面側に、右側縁は背面に加えている。４は珪質頁岩製で両側縁が緩やかに外湾し正三角形状を呈す。腹面体部に残置する剥離痕は主要剥離面であり、素材剥片を横位に用いて調整を加えている。時計回りの錯向剥離によって作業を進め、最終調整剥離を左側縁においては背面側に、右側縁の尖頭部側には腹面側に、体部側では背面側に加えられている。5は黒曜石製で左右側縁は連続せず尖頭部が鋭角な刃先角を形成している。尖頭部近辺に加えられた調整によって周囲の剥離痕が切られていることから、リダクション(5)の可能性が指摘できる。時計回りの錯向剥離から最終調整剥離を右側縁には表面に加えているが、左



第38図　縄文時代遺構外出土縄文土器（3）

第39図　縄文時代遺構外出土縄文石器（1）

側縁では両面に加えられ連続性を有さない。6はチャート製で左右側縁は緩やかに外湾しており、基部は鋸歯状を呈する。尖頭部を取り込んだ折れ面はステップエンド状に剥離され、表面右側にリングが収束しネガティブ状を呈する。基部側からの調整が左右の剥離痕を切っているため剥離工程は不明だが、表面に最終調整剥離を加えている。

第39図7～10は凹基有茎鏃である。7は黒曜石製で左右脚部の折れ面には、裏面側にネガティブバルブが存在する。左回りの錯向剥離によって形態を作出し、最終調整剥離を左右側縁の表面に加えて作業を終えている。裏面及び右側縁における調整が散漫であることや、両側縁が非対称であることなどから未成品である可能性が指摘できる。8は黒曜石製で側縁は鋸歯状を呈し、尖頭部及び脚部が直線的であるのに対し側縁中位は内湾する。左脚部及び茎部の折れ面は共にポジティブであり、前者は裏面側に、後者は表面にリングを収束させている。時計回りの錯向剥離によって進められるが、最終調整剥離は不規則に加えられ連続性を有さない。9は黒曜石製で体部中央の折れ面及び茎部の折れ面では裏面側にリングが収束し、前者はネガティブ、後者はポジティブ状を呈す。背面側では左側からの調整が切っているが、腹面側においては体部中央に主要剥離面が残置しているため切り合いは不明である。最終調整剥離は背面に加えられている。10は黒曜石製で尖頭部及び体部を大きく取り込んだ折れ面と茎部の折れ面では共に表面側にリングが収束しポシティブであるのに対し、左脚部と右脚部の折れ面は共にネガティブであるが前者は裏面側に、後者は表面側にリングが収束する。折損により体部は失われているが、最終調整剥離は表面に集中する。

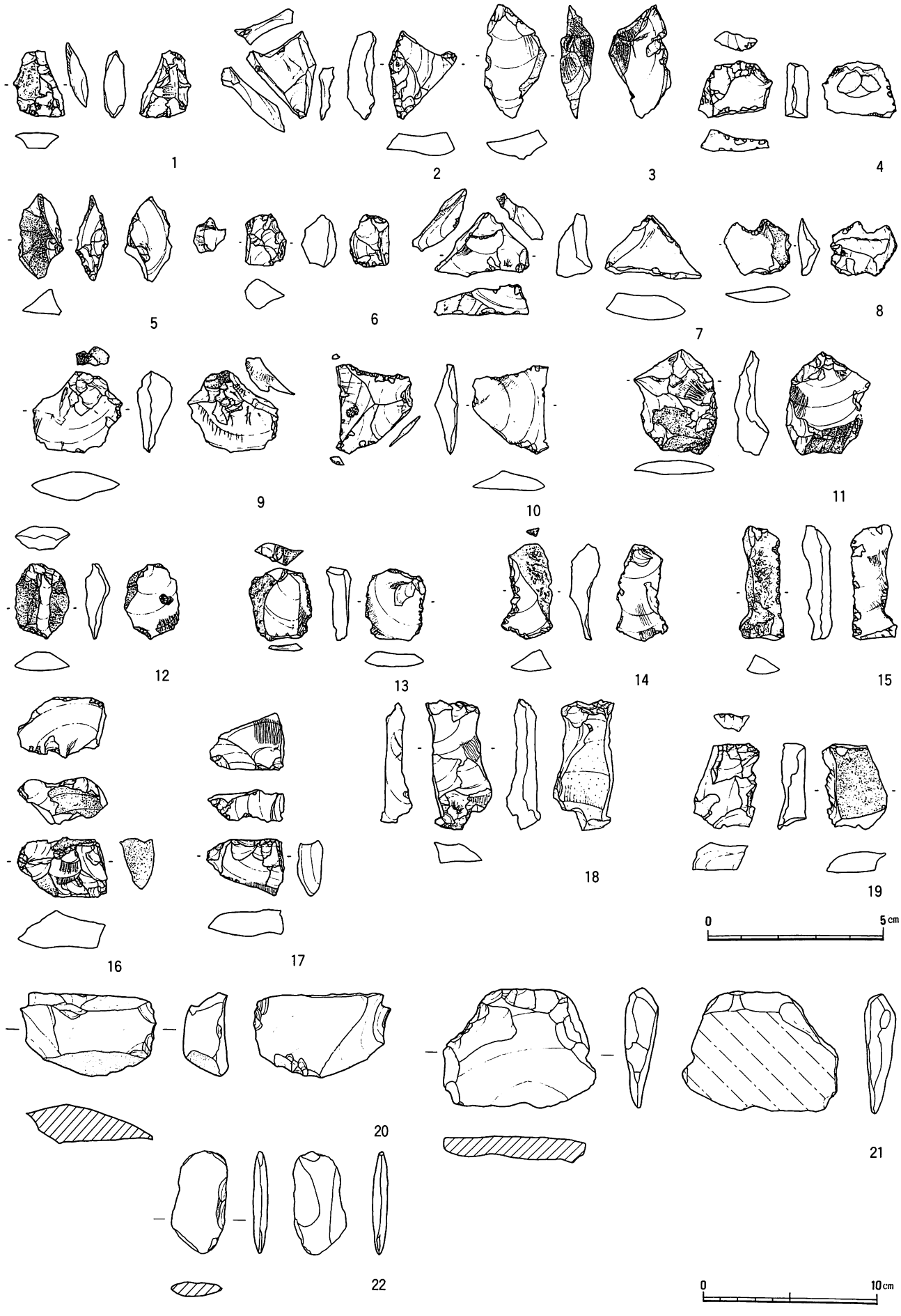
第39図11～13は未成品と考えられるものである。11は形態が非対称であり、調整が密である部位と散漫である部位に分かれることから黒曜石製凹基無茎鏃の未成品だと認定できる。裏面右側縁の中位において、階段状剥離が極度に発達した結果放棄したと考えられる。尖頭部では右側縁から左側縁へ両面調整を加えているが、体部では時計回りの錯向剥離によって作出されている。12は尖頭部を意識した調整が認められることから石鏃未成品の可能性が高いが、基部を形成する剥離単位が無いことや腹面のバルブを除去しようとする意図が明確でない点から石匙・削器の未成品である可能性も考えられる、横長剥片を素材とした黒曜石製の両面調整未成品である。左側縁から右側縁へ両面調整を加えている。13は尖頭部及び両側縁の形成を目的とした調整が散漫であり、背面には礫面、腹面には主要剥離面を残置していることから、チャート製の横長剥片を素材とした石鏃未成品だと考えられる。右側縁から左側縁へ両面調整を行っているが、左側縁の尖頭部側では背面に、体部側及び右側縁では腹面に最終調整剥離を加えている。

第39図14・15は石錐である。14は縦長剥片を素材とした黒曜石製のもので、右辺は素材縁に沿って調整が進行し、左辺は素材を斜めに断ち切る位置に辺を設定している。打面とバルブは調整によって除去されているが、背面に残された先行剥離面から同一打面上で連続した剥片剥離を行ったことが分かる。機能部は時計回りの錯向剥離によって作出された。15は横長剥片を素材とした黒曜石製のもので、素材剥片の縁辺に浅い調整を加えることによって、機能部としている。機能部と考えられる縁辺には使用痕が顕著に認められる。打面は点打面であり、垂直割れに起因する剥離が腹面側の打面左に存在する。片理が発達しており、腹面に片理割れがある。

第39図17は縦長剥片を素材とした黒曜石製の削器である。形態的には掻器を想定させるが、調整が進行した部位は鋭角を呈する。素材剥片の打面側に刃部を設定し、両面調整によって打面とバルブを除去している。端部における突起状の形態は意図的に作出されたものではなく、裏面調整の際に生じた片理割れによるものである。

第39図18は珪質頁岩製の石匙である。つまみ部を作出するための調整は微弱であり、左右の辺及び下辺は緩やかに外湾する。背面中央に存在する剥離痕は素材面であり、腹面中央に残置する剥離痕は主要剥裏面である可能性が高い。つまみ部の調整は時計回りの錯向剥離によって作業が進行しているが、最終調整剥離は不規則である。

第39図19～21は使用痕を有する剥片である。19は黒曜石製の剥片の端部に打面を設定し、背面側に対して剥片剥離を行った際生じたウートラパッセを利用し、作業面と腹面で形成する辺を機能部としている。使用痕の有無は別として、素材の用い方としては第40図18・19と共通する。機能部は緩やかに内湾し、辺の中央を中心に使用痕を残す。20は縦長剥片を素材とした黒曜石製のもので、下半部の折れ面はネガティブ状を呈し、背面側にリングが収束する。打面は剥離面打面であり、左端に打点がある。素材剥片の左辺及び折れ面の2辺に使用痕を残す。



第40図　縄文時代遺構外出土縄文石器（2）

主要な刃部と考えられる左辺は浅く不連続な調整を有すが、素材縁を変更させるものではない。21は角礫を素材とした黒曜石製のもので、20と同じく剥片剥離の際にウートラパッセ状に剥離した端部の辺を用いて、機能部としている。素材剥片の打面を取り込んだ折れ面は２面あり、相反した方向にリングが収束している。折れ面と両側縁において、浅い調整が認められる。

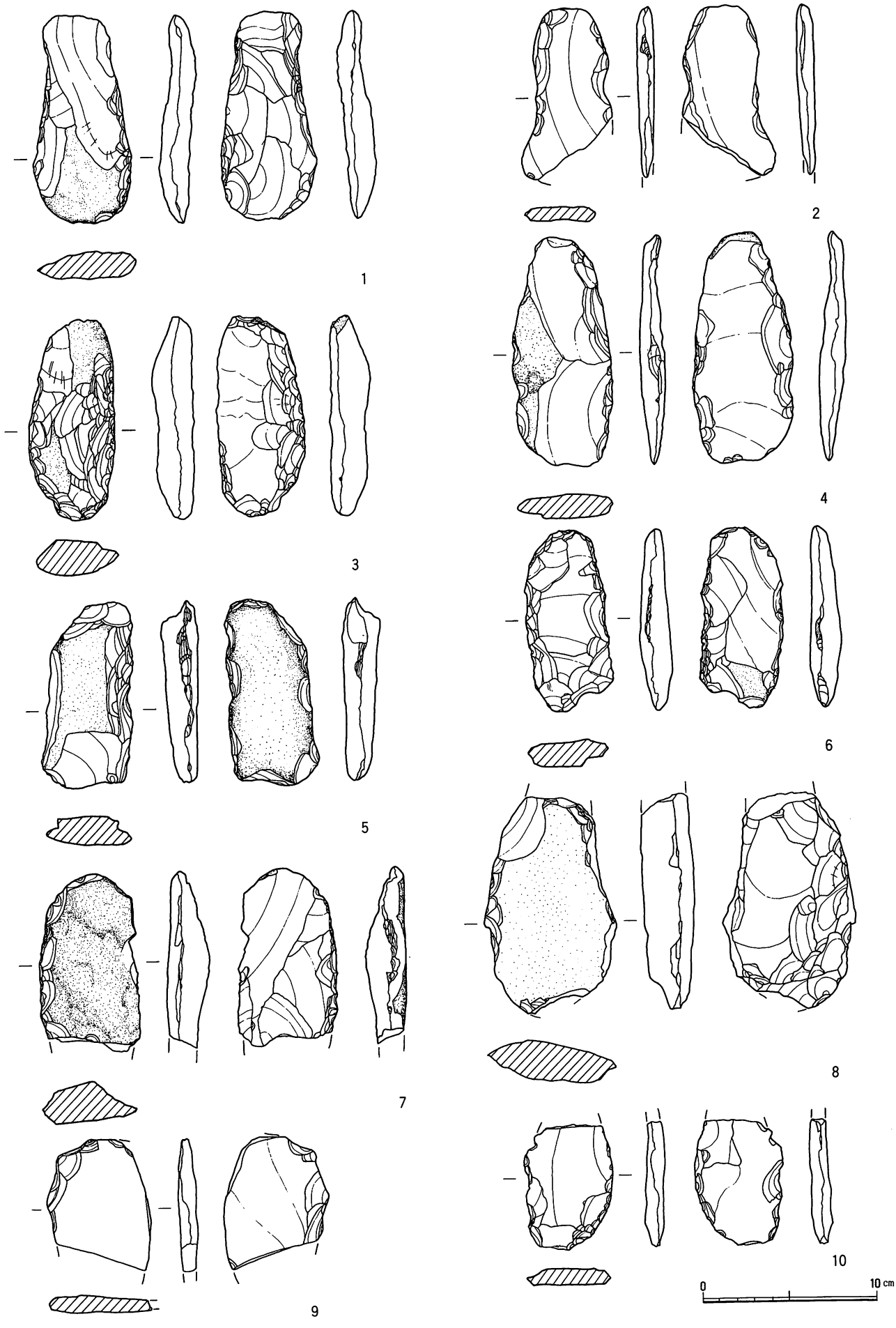
第39図16・22～25は黒曜石を石材とする微細な剥離痕を有する剥片である。いずれも縦長剥片を素材としている。16の打面は背面からの調整により除去されており、右側の折れ面はネガティブ状を呈している。剥片の端部ではヒンジフラクチャーが生じている。微細な剥離痕は背面の直線状の縁辺を主に認められるが、散漫である。22の打面は点打面であり、打面右の折れ面は垂直割れである。腹面はフラットであり、バルブの発達がなく、ヒンジフラクチャーぎみに剥離している。微細な剥離痕は左側縁の中位に集中している。23の打面は折損と調整によって除去されているが、バルブは残置している。左側縁の下半部から端部にかけて刃潰しと考えられる急斜度調整が認められる。微細な剥離痕は右側縁の縁辺に散漫に存在する。24の打面を取り込んだ折れ面は垂直割れに起因する左側縁の剥離面と共にネガティブを呈する。腹面におけるバルブは発達せず、右側縁には微細な剥離痕と調整による凹部を有すがどちらが主要な刃部かは不明である。25の打面は礫打面であり背面側に傾斜しているが、腹面への調整により大きく失われている。剥片の端部はヒンジフラクチャーを起こしている。左右側縁に微細な剥離痕が認められるが、調整による凹部も存在する。

第39図26は黒曜石製の石錐未成品である。尖頭部の折れ面と下半部を取り込んだ折れ面は共にポジティブ状を呈し、表面側にリングが収束しているが、調整によって切られている。裏面に比べて表面の調整は散漫であり、右側縁中位に発達した階段状剥離が認められる。形態作出のための調整は右回りの錯向剥離によって進行している。

第40図１～15はいずれも二次加工剥片である。このうち１・２は両面調整を要する石器（石鏃等）の未成品であり、他と明確に区別可能である。３～15は、調整を加えた部位を刃部とするもの（第40図８・10・13～15）と両面調整の途中で作業を放棄したと考えられるもの（６・７）という２つの分類項目によって２分できるが、数量の保証が十分でないことや分類項目の境界線に位置する資料が多数存在することから、素材剥片の形状別に分類した。３～７は横長剥片素材、８～13は幅広剥片素材、14・15は縦長剥片素材であるが、素材剥片の形態は斉一性を有さない。２の石材がチャートであるのを除いて、他は全て黒曜石である。

１は折損により作業を放棄した両面調整の未成品である。図では横位に据えたが素材を縦位に用いた可能性もある。腹面中央の主要剥離面には素材剥片剥離時に生じたヒンジフラクチャーと考えられる隆起が存在する。２は調整を進行した結果、階段状剥離が発達したため作業を放棄したと考え得る両面調整の未成品である。折れ面が３面あり、上部と右側の折れ面がネガティブであるのに対し、左側の折れ面はポジティブ状を呈す。

３は礫打面であり、転礫の稜上を加撃している。剥片の端部に押圧剥離により凹部を２つ作出しているが、背面上半部にも調整が加えられているため、上記の分類項目にどちらでも分類し得る可能性を有す。４は腹面側に傾斜する剥離面打面であり打面の中央に打点を有す。右側縁と端部の折れ面は共にネガティブである。端部折れ面から背・腹面へ、背面から端部折れ面へと調整が加えられているが、性格は不明である。５は剥離面打面であり、背面に時差のある剥離痕を有す。打面左側のポジティブな折れ面は、石核作業面を取り込んだものである。右側縁下半部と左側縁上半部に調整が加えられているが、性格は不明である。６の左側における折れ面はポジティブであり、背面側にリングが収束する。背面左側に残置している剥離痕が主要剥離面であり、背面右側に調整を加えて作業を終えている。両面調整を加えるが明確な形態は有さない。７は左側と右側に折れ面を有すが、左側はネガティブであり、右側はポジティブである。端部に調整を加えた後、背面に直接打撃を加えているが、剥離面の形状から素材を薄くする剥離であることが分かる。８の打面は調整によって除去されているが、バルブと背面の形状から点打面であると推定できる。押圧剥離によって、直線状の調整を端部に、凹状調整を左側縁に加えている。刃部作出を目的とした調整の可能性が高い。９の打面は礫打面であり、打面左側の折れ面はネガティブである。背面はフラットであり、腹面端部はヒンジフラクチャー状を呈す。背・腹面の右側縁に押圧剥離によって調整を施すが、調整の性格は不明である。10は折れ面を３面有すが、端部右側はポジティブであり他の２面



第41図　縄文時代遺構外出土縄文石器（3）

はネガティブである。打面は点打面であり、端部はヒンジフラクチャー状を呈する。調整は背面左側縁と腹面右側縁に集中し、端部に散漫な調整が窺える。11は石核端部を取り込んだウートラパッセ状に剥離しており、背面と端部に礫面を大きく残置する。調整は腹面左側縁の基部側と背面に残る礫面に左右から加えられているが、性格は不明である。12は線打面であり、バルブが発達している。背面には礫面を大きく残し、腹面の左側縁に礫面を取り込んだ部位がある。調整は時計回りの錯向剥離によって、剥片の端部に加えられている。調整の性格は不明である。13は２面調整打面であり、打点は打面の左端に存在する。剥片の端部は折損し、ネガティブである。調整は背・腹面の右側縁に集中し、背面右側縁の下半部には凹部が作出される。調整は刃部作出を目的としている。14は礫打面であり、打面右側に打点を有す。調整は背面側の左側縁と端部を中心に加えられている。両面を調整している部位も存在するが、素材剥片の形状を保持していることから刃部作出を目的とする可能性が高い。15は線打面であり、端部にヒンジフラクチャーが生じている。調整は背面右側縁において連続的に、腹面の左右側縁において断続的に加えられている。14と同じく調整の性格は刃部作出である可能性が高い。

第40図16・17は直接打撃を用いて剥片剥離を行っているが、作業面に残されている剥離面から考えると素材剥片の形状はいずれも小さく、本遺跡の石器素材となり得るかどうか不明であり、素材を薄くするための剥離である可能性も否定できない。しかし本稿では、①打面・作業面が固定されていることや、②形態作出の意図がなく使用痕等も有さないことから、これらを石核の残核であると捉え、石核として扱うことにする。いずれも黒曜石製である。16は表面左側に残置している剥離痕から、打面と作業面を転移する石核の残核であることが分かる。表面に対して片理面を打面に剥片剥離を行った後、打面左側から加えられた剥離面を打面に裏面へ剥片剥離している。この際にウートラパッセが生じたため、右側の折れ面に打面を移して表面へ加撃している。17は同一打面で表裏に作業面を設けている石核である。右側の折れ面はポジティブを呈し、裏面側にリングが収束している。表面に対して剥片剥離を行った後、裏面に剥離を加えているがその際に石核の端部を取り込んでいる。この剥離を最後に作業を終えている。

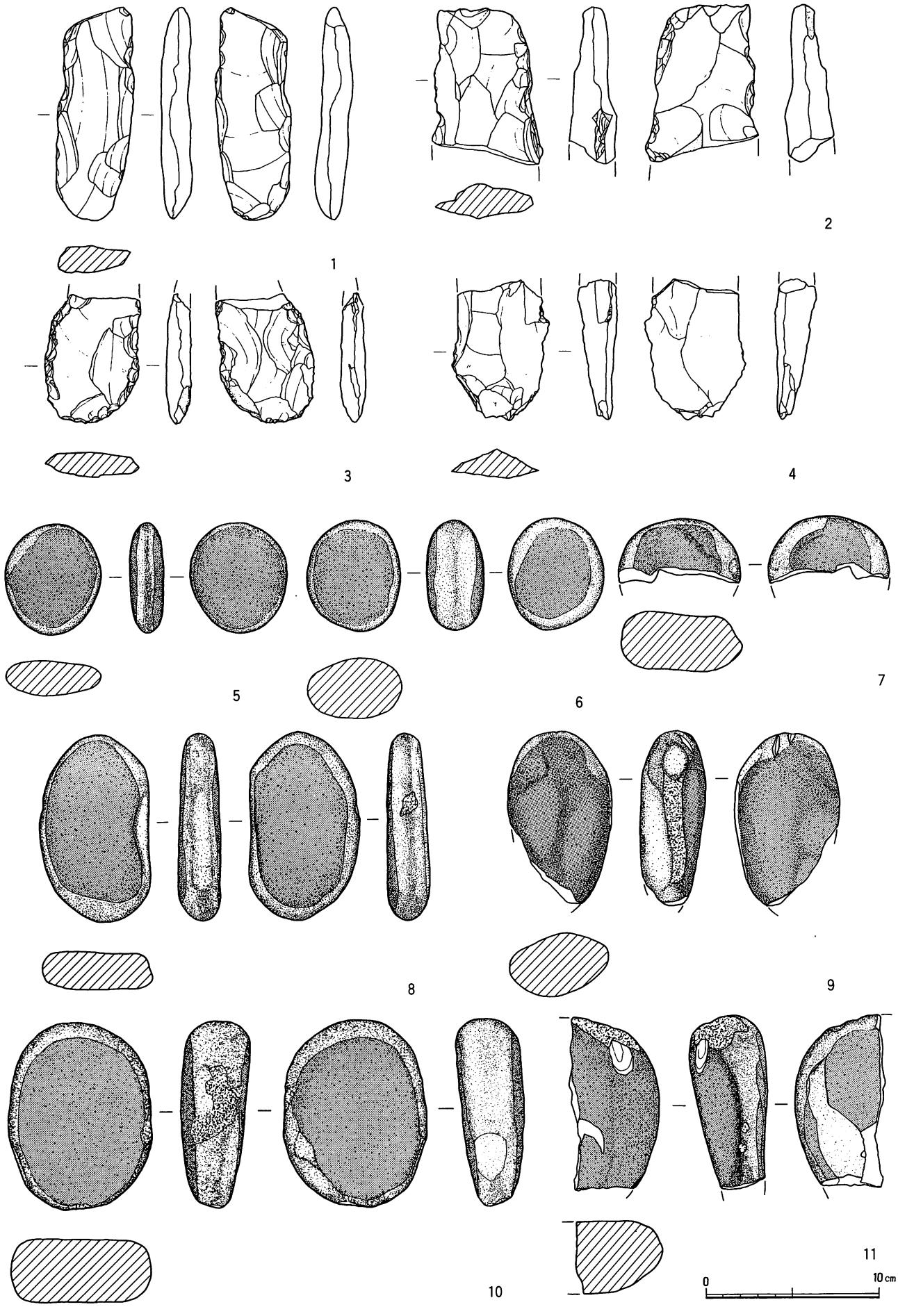
第40図18・19は複数の属性を有するため、境界的な石器として捉えることにする。どちらも黒曜石製である。18は右側縁に微細な剥離痕を有し、表面にフラットな先行剥離面を残置している。表面に剥離を加えた後、縦位に切断して右側縁を刃部として用いたと考えられるが、打面を除去した調整の性格は不明である。折れ面において、表面側の中位にネガティブバルブがあり、表面中央には時差のある剥離痕を有す。19はヒンジフラクチャーが生じた剥片の端部を素材とし、素材を横位に用いて腹面を作業面に設定しているが、腹面に残置する剥離痕はヒンジフラクチャーを呈する。剥片剥離の後、打面右側に調整を加えているがその性格は不明である。折れ面が３面あり、打面を設けている面はポジティブであるが、他はネガティブである。

第40図20～22は非定形な石器である。20は厚手の縦長剥片を横位から直線的に剥離して除去し、側面の片方を表裏面から若干の剥離を加えて刃部としている。21は剥片の端部と両側に若干の剥離による整形によって基部を作り出し、反対側を刃部としている。22は大変薄い剥片の両側に簡単な剥離を加え整形している。形状的には打製石斧に似るが、大きさや重さからすると区分するべきだと思われる。

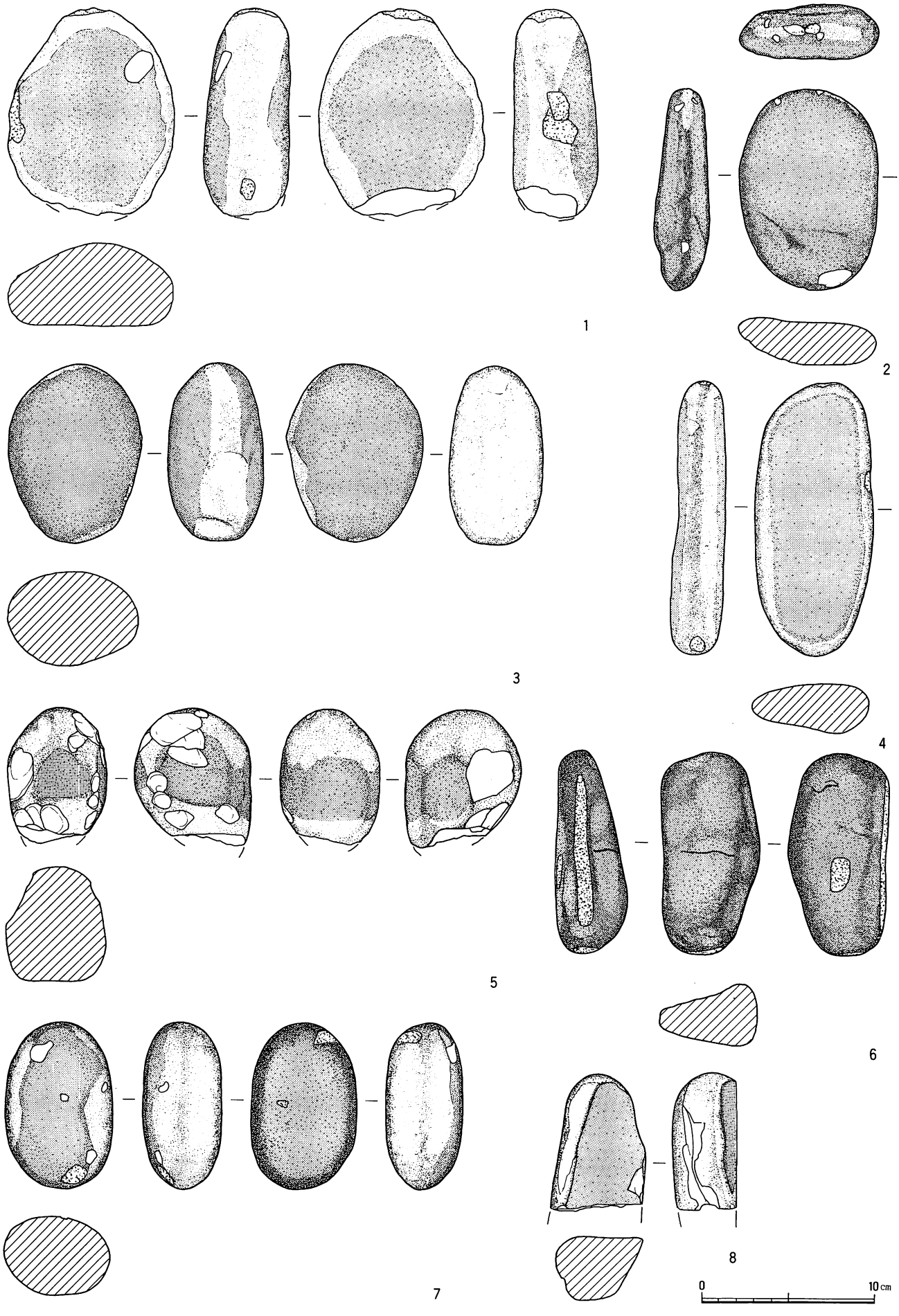
第41図１～10、第42図１～４の14点は打製石斧類である。これらはおおむね「撥形」のものに含められるように思われるが、第41図２・９・10や第42図３は分銅形、第42図１は短冊形と見るほうがよいかもしれない。

第42図５～11、第43図１～８、第44図１・２の17点は磨石・敲石類である。形状的には多くは円形から長円形で扁平な礫を利用しているが、一部には棒状のもの（第43図６・８、第44図１・２）、厚みのあり球体に近いもの（第43図３・５・７）もある。また大きさ的には長さ６㎝程度の小形品（第42図５・６）、長さ10㎝強程度の中形品（第42図８・９・10、第43図１～３・６・７、第44図２）、長さ15㎝以上と見られる大形品（第42図11、第43図４）に分離されるが、中形のものが多数を占めている。一方使用痕は、表裏面に磨面が観察され磨り潰し作業の形跡は比較的明瞭であるが、敲打痕が若干数の側面に見られる程度で（第42図10・11、第43図１・５・６）多くのものには観察されず、これらの石器は主に前者の作業に使用されたようである。この他第42図11にはススと見られる黒灰色の汚れが付着しており、何らかの原因で火熱を受けたと見られる。

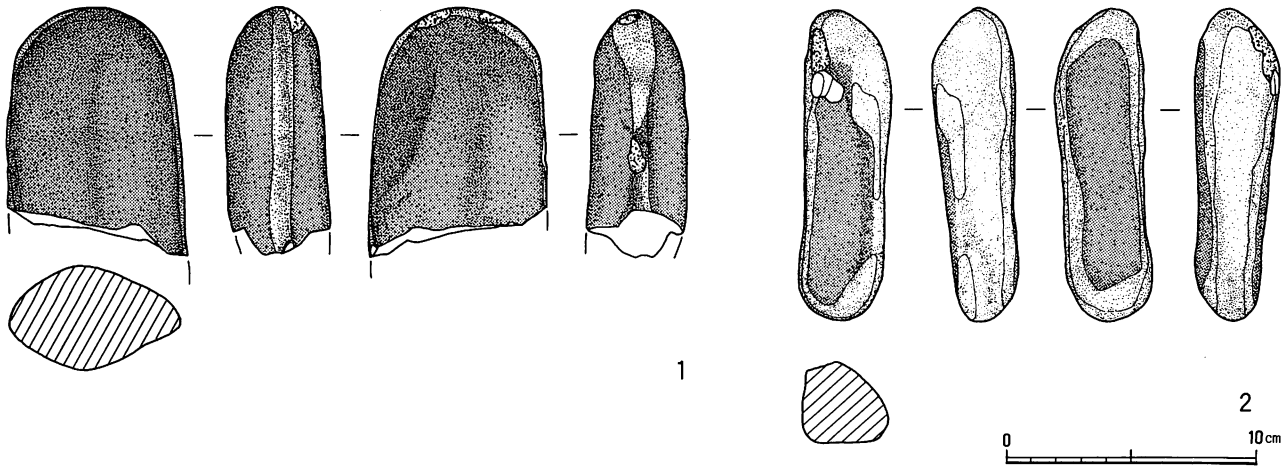
（網倉・小林）



第42図　縄文時代遺構外出土縄文石器（4）



第43図　縄文時代遺構外出土縄文石器（5）



第44図　縄文時代遺構外出土縄文石器（6）

註

(1)　本稿で用いる「折損」という用語は特定の行為を指定するものではない（森山1989）。

(2)　素材面が残置していない場合は表・裏面、残置しており判別のつく場合は背・腹面とする。表・裏面、背・腹面を規定していない記述は、表面及び背面を基準としている。横位に実測図を展開して、左右の部位を指定している場合（第40図８・10）は打面を上に据えた時の位置関係である。

(3)　石鏃の部位名称は着柄する側を「基部」、刺突する側を「尖頭部」、２辺と基部により形成される２つの突起を「脚部」、石器中央を「体部」、尖頭部の角度を「刃先角」、２辺の縁辺を「側縁」と呼称する。側縁等の位置を指定する際は、上位・中位・下位と呼ぶことにする。

(4)　阿部祥人による「仕上げ痕」の定義（阿部1982）に近いが、「仕上げ痕」という用語が「剥離痕の剥離方向での最大長が１㎜以上のもの」と限定されているのに対し、「最終調整剥離（痕）」は「１㎜に満たない細かな」剥離痕も含む概念であるとする。

(5)　石鏃におけるリダクションは三上徹也によって指摘されている（三上1990）が、実際の資料を用いた論証は行われていない。これは、石鏃のリダクションが行われた資料を指摘する際に剥離痕の切り合いや形態等によって、その蓋然性を高めることはできるが断定はできないという点による。つまり、石鏃のリダクションを論証するためには石鏃を再調整する場合再調整の過程で折れ面が除去されてしまうため、再調整の途中で作業を放棄したと考えられる資料、すなわち製作途上の折損か使用時の折れに起因すると考えられる折れ面に調整が加えられている石鏃に注目するしかない。この際に留意すべき点は、折れ面と周囲の剥離痕との先後関係であり、折れ面におけるリングの回り方である。また、調整の過程でなぜ放棄されたのかという点に注意を払わなければならないが、同時に分析対象の遺跡における石鏃の総数と欠損した石鏃の数、その内何点が再調整されたのかという点や未成品と認定できるものがどの段階で作業を終えたのかという点も合わせて考えねばならない。この段階を経て初めて当該遺跡における再調整技術及び石器製作技術と、その背後に存在する遺跡間の関係や遺跡の位置づけについて考えることが可能となる。

御所遺跡において、折れ面に調整を有す石鏃は３点（第39図３・６・８）ある。５は左脚部と茎部の折れ面に連続した調整が加えられていることから、再調整の過程で放棄されたことが分かる。茎部の折れ面は裏面側にポジティブな舌状剥離を有することから使用時の折れである可能性が高い。７は折れ面から表面へ連続した調整が加えられているが、途中で放棄されている。これは再調整の過程で階段状剥離が発達したためと考えられる。８は折れ面から裏面へ調整が加えられているが、剥離痕が連続せず単発であるため、断定はできない。

第２節　奈良・平安時代の遺物

第１項　Ⅰ区

第１号竪穴住居跡出土遺物（第45図・第３表）

本住居からは総計28点の奈良・平安時代土器が出土したが、図示したのは底部外面に「長」と墨書された土師器甲斐型坏１点のみである。

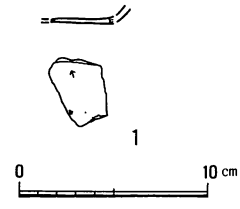
第２号竪穴住居跡出土遺物（第46図・第３表）

本住居からは総計31点の奈良・平安時代土器が出土したが、このうち図示したのは土師器坏２点、甕１点である。坏・甕共に甲斐型のものである。２の坏底部外面には墨書があるが判読できない。

第２項　Ⅱ区

第３号竪穴住居跡出土遺物（第47図・第３表）

本住居からは総計269点の奈良・平安時代土器が出土したが、このうち図示したのは土師器坏４点、甕２点、小甕１点、須恵器甕１点である。坏・皿は共に甲斐型のものである。３の土師器高台坏は高台をややラフに削りだしたもので、底部外面中央に「長」という墨書がある。また４の坏底部外面中央にも墨書があるが判読できない。甕も３点ともに甲斐型のものであるが、７の小甕は全体の１／２ほどが遺存しており、内面底から２cmほど上から頸部屈曲部にかけて、内容物の使用痕跡と思われるヨゴレが付着している。



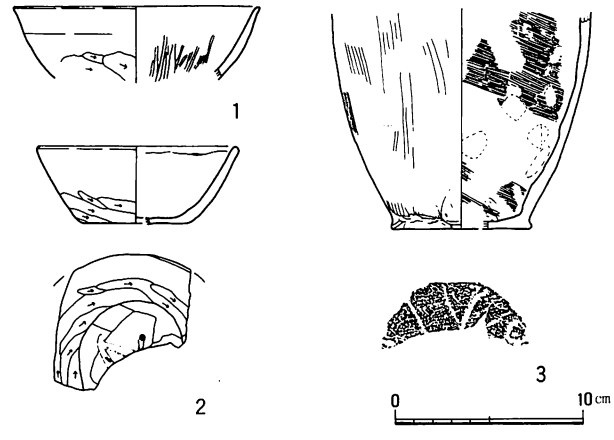
第45図　第１号竪穴住居跡出土土器

第４号竪穴住居跡出土遺物（第48図・第３表）

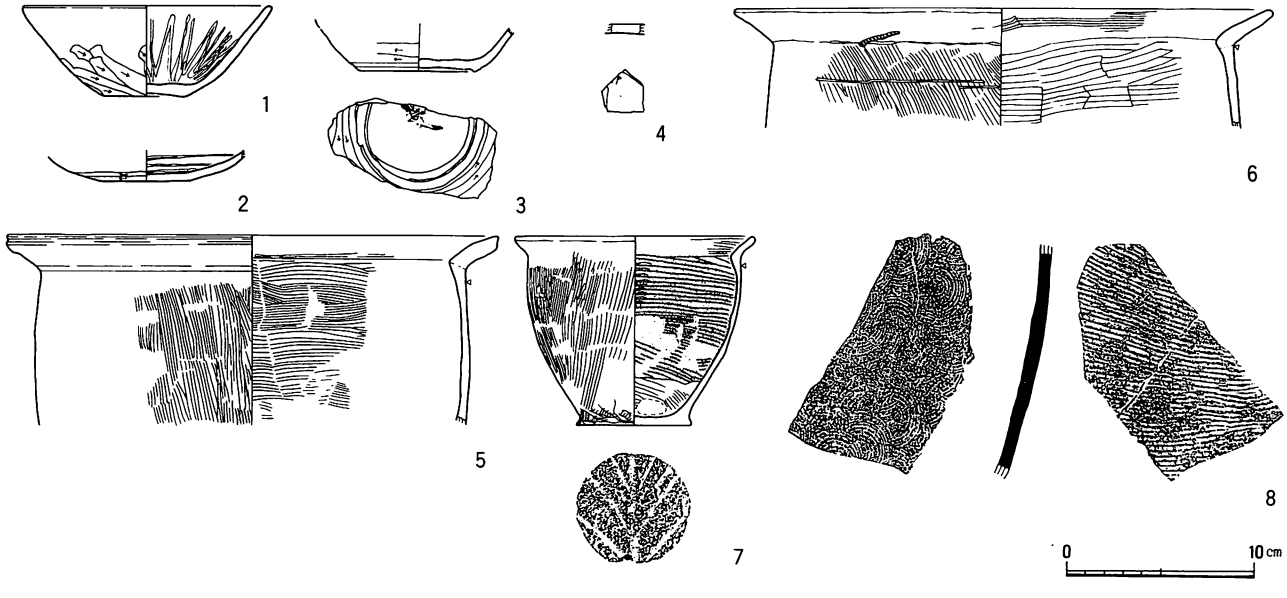
本住居からは総数266点の奈良・平安時代土器が出土したが、このうち図示したのは土師器坏６点、甕２点である。３～６の土師器坏はいずれも底部外面に墨書されているが、すべて判読できない。坏・甕ともに甲斐型のものである。

第５号竪穴住居跡出土遺物（第49図・第３表）

本住居からは総数391点の奈良・平安時代遺物が出土したが、このうち図示したのは土師器坏が２点、甕が９点、須恵器坏１点、坏蓋１点、鉄器１点である。１の坏はロクロ整形後内外面無調整で、胎土も軟質であり甲斐型坏とは明らかに異質のもの、２は体部外面が横位のミガキ、内面

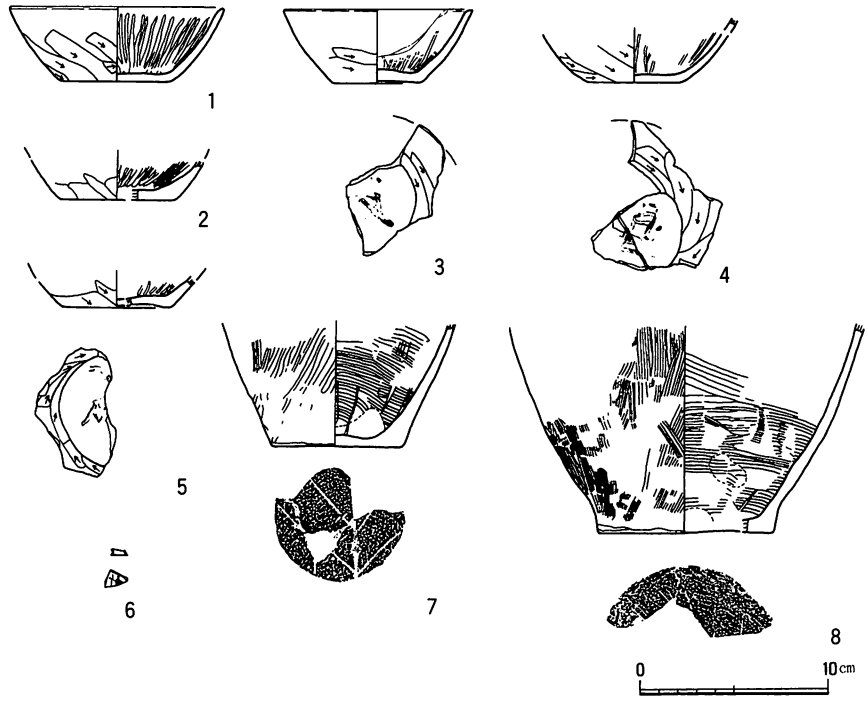


第46図　第２号竪穴住居跡カマド出土土器

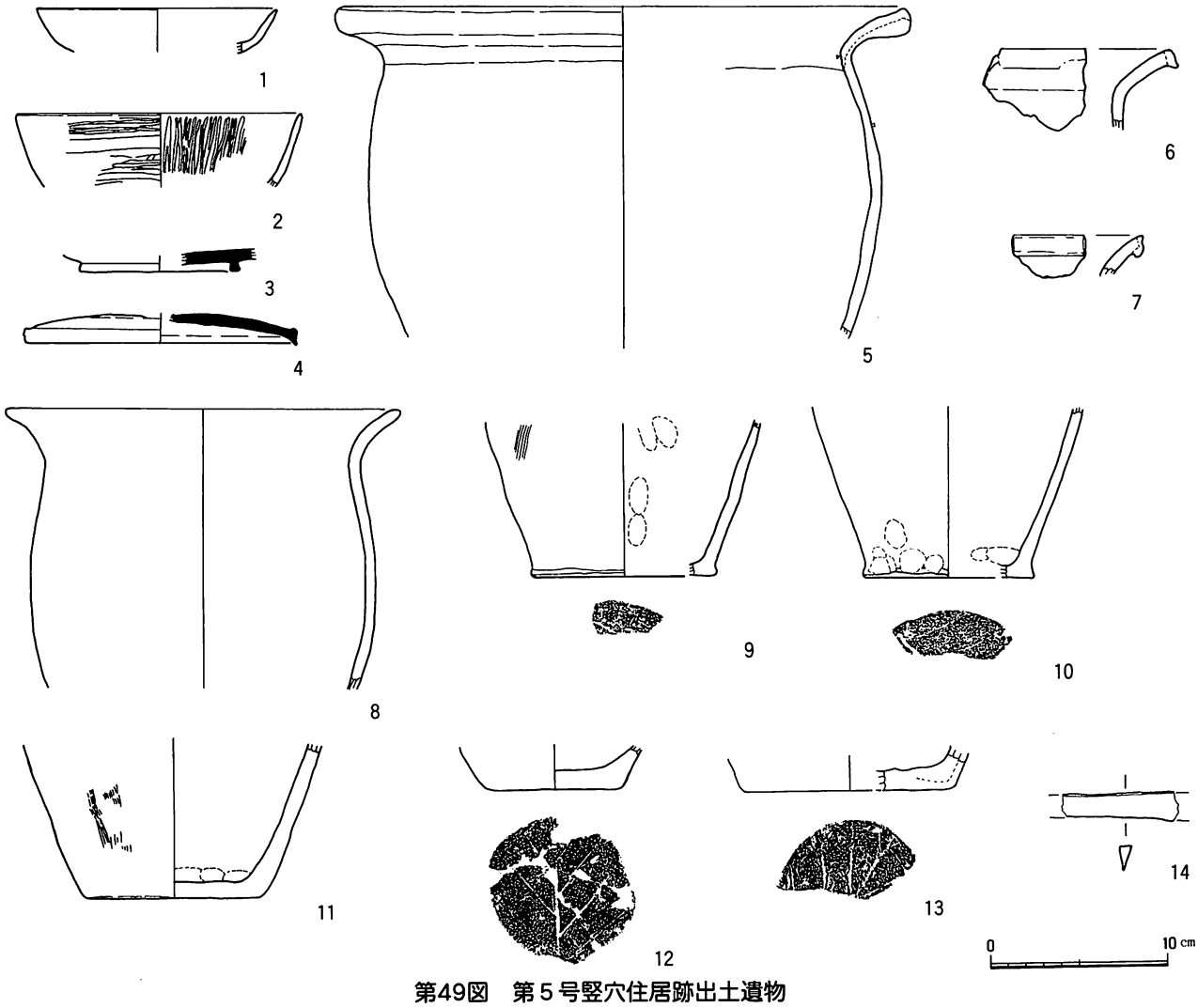


第47図　第３号竪穴住居跡出土土器

は放射状の暗文が施されており甲斐型坏初期のものである。5は本遺跡出土品ではごく少ない胴張りの甕で、厚手で内外面は基本的に無調整、明橙褐色の色調である、といった技術的特徴から相模型のものによく類似している。また6と7は甕口縁部の破片であるが、ロクロ整形と思われ、大きく外反した口唇部に粘土帯を貼りつけて張り出させている。また焼成はやや軟質である。このように形態や焼成的にも在地的ではないが、系譜は不明である。ただし両者は形態的にはよく似ているものの、6は雲母を含みにぶい黄橙褐色であるのに対し、7は雲母を含まず橙褐色であるなど違いも見られる。9・10はいずれも軟質の胎土を持ち内外面無調整のもので、相模型の甕に類似している。11は厚手の甕底部で木葉痕が見られないが、後でケズリ等で消したものではない。底外面自体が平ら



第48図　第4号竪穴住居跡出土土器



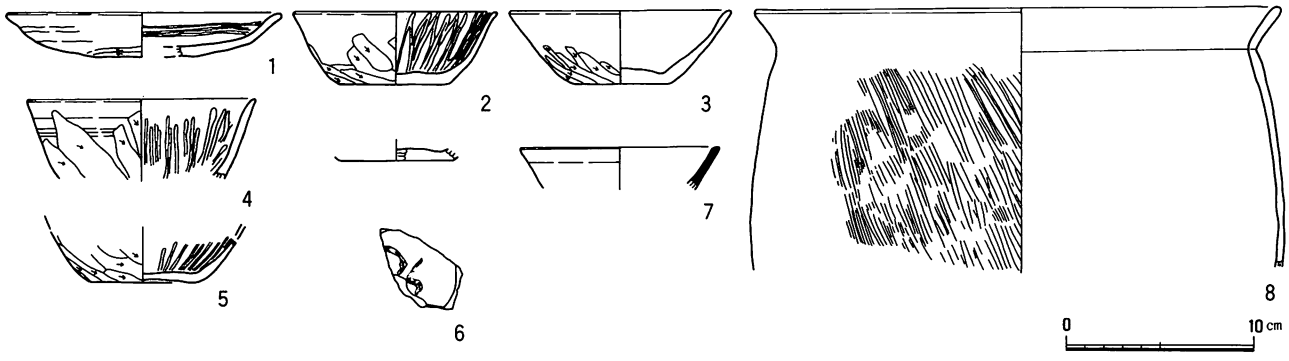
第49図　第5号竪穴住居跡出土遺物

なことからおそらく板などの上で製作されたものと思われる。また12・13も厚手で甲斐型のものとは異質の甕である。

14は刀子で刃部の一部のみが残存している。

第６号竪穴住居跡出土遺物（第50図・第３表）

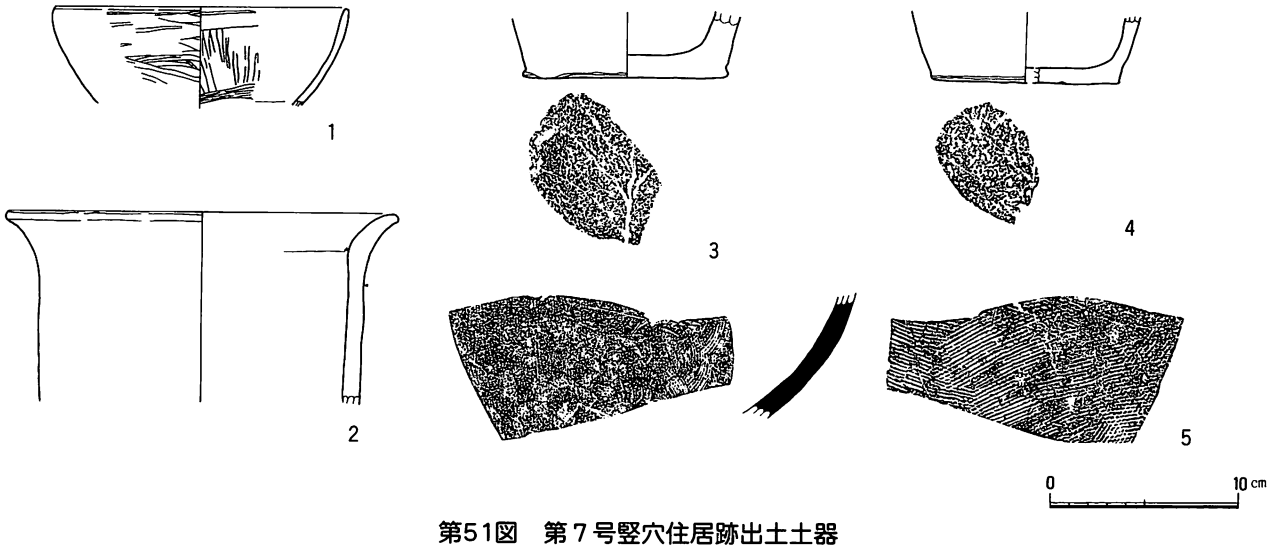
本住居からは総数125点の奈良・平安時代土器が出土したが、このうち図示したのは土師器皿１点、坏５点、甕１点、須恵器坏１点である。６は底部外面に墨書されているが文字は判読できない。１～６の土師器皿・坏はいずれも甲斐型のもので、８の甕は胎土や色調などから甲斐型のものと見られるが、内面は弱い横ナデでハケ目調整はされていない。



第50図　第６号竪穴住居跡出土土器

第７号竪穴住居跡出土遺物（第51図・第３表）

本住居からは総数304点の奈良・平安時代土器類が出土したが、このうち図示したのは土師器坏１点、甕３点、須恵器壺・甕類１点にすぎない。１は甲斐型初期の坏で体部外面全体にやや粗い横位のミガキが、内面は底面際と口唇部下に横位のミガキが、体部には密に放射状のミガキがなされている。２～４の甕は内外面ともにナデもしくは無調整で厚手のもので、技法や胎土・焼成的には相模型の甕に近いものである。



第51図　第７号竪穴住居跡出土土器

第８号竪穴住居跡出土遺物（第52図・第３表）

本住居からは総数85点の奈良・平安時代遺物が出土したが、図示したのは土師器坏６点、堝１点、須恵器坏１点、石杵１点、鉄器１点である。

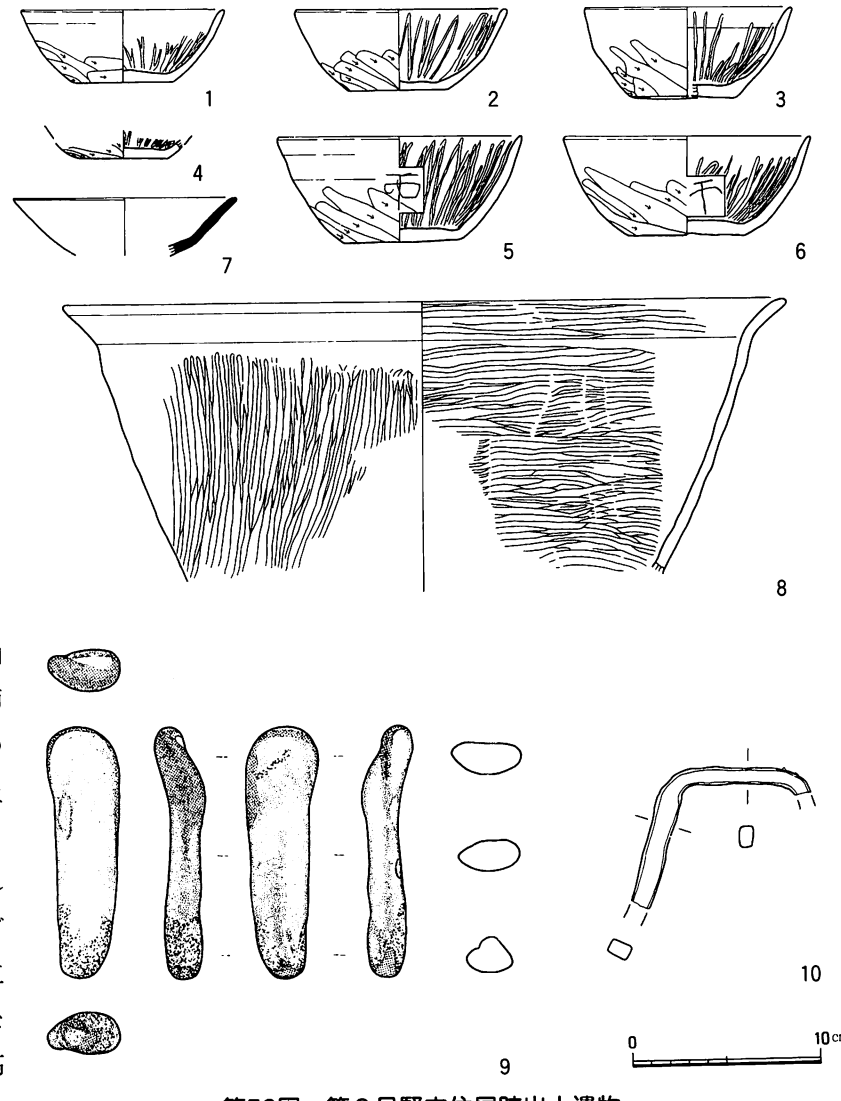
土師器坏はいずれも甲斐型のものであるが、５・６の体部外面には「市」という正位の刻書が焼成後になされている。８は甲斐型の鉢であるが、さほど一般的ではない器種であり、本遺跡でもこれが唯一のものである。

9は住居北東よりの覆土中から出土した石杵である。長さ9.9cm、幅は図下端で2.85cm、上端で1.25cmと上方から下方に向かって徐々に細くなる。一方厚さは1.5cmとやや扁平で、重量は61.37gである。石材は緻密な砂岩で、特に二次的な加工・変形はされていない。側面から見ると図上方側は端部近くで30度弱屈曲していることから、片手で全体を握り、図の下端面を下にして磨りつぶすのにより適した形状をしている。この上下両端ともに表面が摩耗しているほか、側面の一部には横方向の擦痕が観察され、これらの面を利用して磨りつぶし作業に使用されたことがわかるが、その痕跡は特に図の上端面に顕著である。さらにこの下方先端面の周囲一面と上方側面の一部には赤色物質が付着しており、また先端の磨面には小さな金色物質の付着も認められた。そこで自然科学的分析の際に顕微鏡によってより詳細に観察された結果、金色物質は石材表面の微細な凹部に入り込んでいたために残ったもので、さらにその金色物質の下層には土・石といった異物を挟まずに赤色物質が入り込んでいることが判明した。このことから、少なくとも一度はまず赤色物質を粉砕し、その後さほど間をあけずに金色物質の磨りつぶしに使用されたと考えることができる。この事実は金色物質の入り込んでいるすべての凹部において確認されたわけではないので、逆の順序の可能性や再び赤色物質の粉砕に使われなかったのか、という点には問題を残すが、この先端部の主機能面への水銀朱の付着が側面よりもかなり薄いこと、またそうした中で金色物質の付着がかなり明瞭に残っていることから、磨りつぶしはこの順序で行われ、再び赤色物質を粉砕することは無かったと推測できるであろう。

この赤色・金色付着物質については帝京大学山梨文化財研究所の鈴木稔氏に分析を依頼した結果、前者が水銀朱（辰砂）、後者は金であることが判明した（本章第4節参照）。

なお、古墳時代には西日本各地から水銀朱をすりつぶす石器が出土しており、それらが「石杵」と呼称されていることから、類似の機能を持つこの石器も石杵と呼ぶことにしたい。

10は断面方形の鉄棒を「く」字状に折り曲げたものであるが、遺存部分の様子からさらにもう一度「く」の字状に折り曲がっていたと予想される。こうした形状からこの鉄製品は鎹であると考えられる。

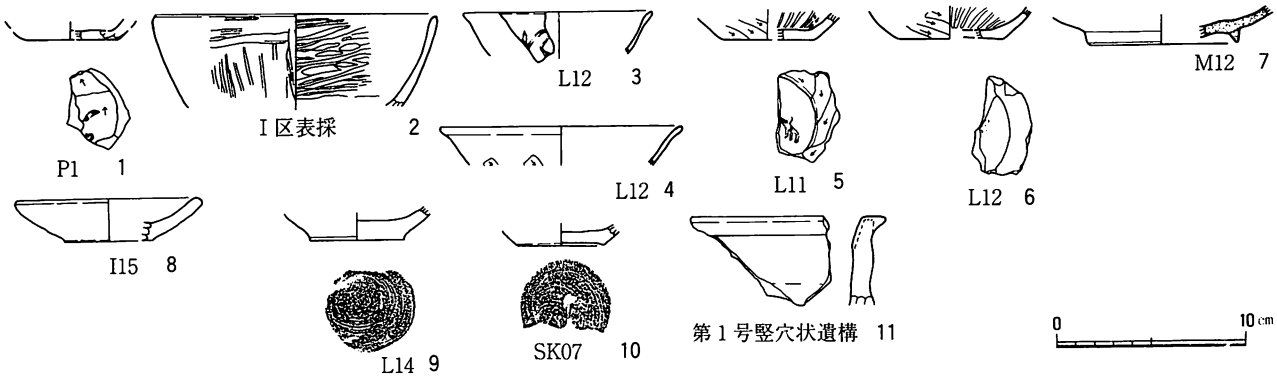


第52図　第8号竪穴住居跡出土遺物

土坑・ピットおよび遺構外出土遺物（第53図・第3表）

第53図は奈良・平安時代土坑・ピットおよび奈良・平安時代遺構以外から出土した奈良・平安時代土器・陶器を図化したもので、土師器坏6点、灰釉陶器皿1点、平安時代後半以降の土師器皿3点、土師器甕1点である。このうち甲斐型坏1・3・5・6は墨書土器であるが、5が「長」と推測される以外は判読できない。坏6点はいずれも甲斐型のもので、2は内外面にミガキを施しておりいわゆる甲斐型坏成立前のもの、3・4は薄手で焼成堅致なものである。7は灰釉陶器の皿で、高台断面が三角形状の黒笹90号窯式のも

のである。8～10は厚手でにぶい黄橙褐色の色調を持ち、底部が回転糸切り無調整の皿である。甲斐型土器の生産されなくなった以後のもので、年代的には11～12世紀前半代のものと思われる。11は「コ」の字状に短く外反する甕口縁部で、口縁内面に弱い段を持つ。にぶい赤褐色で多量の雲母を含んでいる。器形・技法的に甲斐型甕とは明らかに異なるが、武蔵型の甕とも異なっており、その系譜は明らかでない。なお出土位置は、1は1号ピット、10は第7号土坑からである以外は遺構外の出土品である。



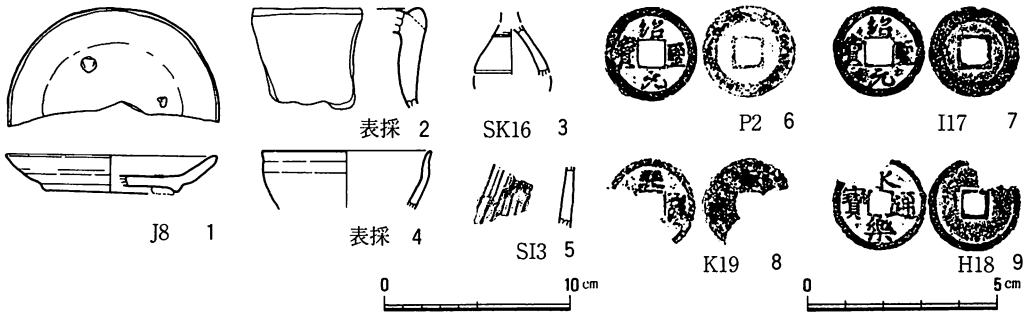
第53図　ピットおよび遺構外出土奈良・平安時代土器

第3節　中・近世の遺物

中・近世出土遺物（第54図・第4表）

中・近世の遺物は全体的に大変少なく、図化できたものは陶磁器類5点、渡来銭4枚に過ぎない。1は黄瀬戸系の皿、4は天目茶碗、5は瀬戸系の甕か壺である。渡来銭は6・7が1094年（北宋）年初鋳の「紹聖元宝」、8が1023年（北宋）初鋳の「天聖元宝」、9が1408年（明）に初鋳された「永楽通宝」である。なお、中・近世遺構から出土したものは、1がJ08スクエア（I区平地造成面埋土）、3が第16号土坑、6が第2号ピットである以外は、いずれも遺構外の出土品である。

（小林）



第54図　中・近世出土遺物

第４節　大月市御所遺跡第８号竪穴住居跡出土石杵付着の金色と赤色の物質について

第１項　はじめに

大月市御所遺跡出土の石杵表面に金色と赤色の物質が付着しているのが発見された。それらを分析する機会を与えられたので報告する。

両種の物質が付着している部位は比較的限定されており、実体顕微鏡下の観察によって金色物質は先端平滑部のみに、また、赤色物質は一方の端の側面部と先端平滑部（ごく微量）に存在することが確認された。いずれの場合も石材表面の多数の微細凹部に入り込んだ形（金色物質は直径0.1～0.5mmの塊として散らばり、赤色物質は一面に広がっている）で残存しているものであるが、観察結果から見て、これ以外の部位にも付着していたにもかかわらず後に失われた、とは考えられない。当初から、金色物質は先端平滑部のみに、赤色物質は一方の端近くに付着していたと見るべきだろう。

第２項　分析と結果

分析にあたってはなるべく少量のサンプリングによって両種の物質を同定することを考え、残存状態が良いと思われた固まり各一つに小さく切った両面粘着テープを押しつけて剥ぎ取った（金色物質を剥ぎ取った際、すぐその下に赤色物質が詰まっているのが観察された－後述）。それらを金属顕微鏡下で観察したところ、金色物質は薄く延ばされた板が不定形に折り畳まれたような状態であり、色調からやや純度の高い金と見られた。赤色物質は色と粒状とから朱（＝硫化水銀、辰砂、いわゆる水銀朱）であろうと推定された。

確認のため低真空タイプ走査型電子顕微鏡（日立製 S-2460N 型）およびこれに装備したエネルギー分散型元素分析装置（KEVEX社製DELTA PLUS型）を用いて観察および定性分析を行った（蒸着はしていない）。その結果、金色物質試料からは金の他には僅かな珪素、アルミニウムが見られたのみなので、銀や銅などを意図的に混ぜた合金ではないという意味でかなり純度の高い金（微量な不純物を無視すれば）と言えるだろう。また、赤色物質試料からは水銀と硫黄の大きなピーク以外には土壌起源と見られる珪素、アルミニウム、鉄が少量検出された。朱と考えて間違いなかろう。分析条件は以下の通り。加速電圧15kV、真空度30Pa、作動距離26mm、倍率500～1000倍、有効時間200秒。なお、機器使用に当たっての東京芸術大学保存科学研究室の御好意に感謝する。

第３項　まとめ

この石杵についてはその用途と本遺跡から出土した意味との解明が求められていると思われる。今回の分析はその前提ともいうべき金色と赤色の物質を同定する作業であった。その点では遺物に大きな損傷を与えることもなく「金と朱」という一応の結果が得られたと考えているが、用途解明につながる決め手として充分とは言えないようである。このような場合に、上記のような予備的な分析に引き続いて厳密な定量分析や微量成分分析を実施するのも一法であるが、別々の凹部に入り込み、しかも土その他で汚染された粒子の分析から意味のある結果が導けるか疑問がある。筆者としてはむしろ、金と朱の付着部位の差異、凹部での両者の層位関係、粒径や形状、金と朱の間に挟まっている物質などを綿密に調べることの方が石杵の使用状況解明に結びつきやすいように思う。

例えば金と朱が同一の凹部に見える場合、どちらが上になっているかを表面観察から確定することは容易でなかったが、サンプリングの際に金の下に朱が詰まっているのが観察されたことから、試みに別の一カ所でも凹部を蓋している金を針先で取り除いたところ同様に下から朱が発見された。両者が共存している凹部とは金の「蓋」の一部がはずれた例なのかも知れない。この方法で全ての金を取りはずして調べる訳にはゆかないので、現時点では、朱が先で金が後、と推定しておくほかないが、朱の粉砕作業後、先端平坦部で金を突きつぶすような作業が行われたと考えれば付着部位の差異にも説明がつくのではあるまいか。また、朱と金のあいだに挟まれた汚れの少なさから二つの作業の時間的間隔は比較的短かったであろう。今のところは以上の推定にとどまるが、今後、機会を得て金と朱が凹部に詰まっている状態そのままを観察できるような断面試料の作製手法を開発して分析を進めてみたい。

（帝京大学山梨文化財研究所　鈴木　稔）

第4章　まとめ

第1節　縄文時代

本遺跡から検出された縄文時代の主たる遺構としては、竪穴状遺構2基と炉穴・焼土跡の両者からなる焼土遺構11基がある。これらの遺構のうち前者の覆土中から中期の遺物がまとまって出土したことから、調査範囲外にこの時期の遺構・遺物が存在する可能性は高いと予想される。また後者の焼土遺構のうち、炉穴（ファイアー・ピット）は南関東地方で早期後半を中心とする時期にかなり多数の調査例がある。本遺跡例ではほとんど遺物が出土せず時期の決定は困難であるが、遺構外からごくわずかではあるが早期の土器が出土しており、これら焼土遺構がこうした時期のものであることが考えられるのかもしれない。もしこうした可能性が認められるならば、近隣に竪穴住居跡などの遺構が存在する可能性もあろう。

このように本遺跡での縄文時代の活動痕跡としては中期が最も濃く、これ以外には断片的な情報からの推測ではあるが、早期にも主体的な活動が行われた可能性がある。

一方、出土遺物のうち土器には早期後半の野島、前期では初頭の中越・前半の関山、中期では初頭の五領ヶ台・前葉の新道・中葉の藤内･井戸尻・後葉の加曽利E、後期では初頭の称名寺・前葉の堀之内、晩期末葉の氷、の各式があり、早期から晩期までの幅広い時期の土器が出土していることが特徴的な点である。残念ながらこれらの土器は遺構に伴っていないため、各時期に本遺跡で行われた活動の具体的内容については明らかにすることはできない。しかしながらわずかな量ではあるものの、このように幅広い時期の遺物が出土していることからは、本遺跡ないしは周辺地域において縄文時代の各時期に断続的にでも居住活動に伴う何らかの働きかけが行われていたことが推測される。また出土した石器の多くは所属する時期を明らかにできないが、石鏃、石錐、打製石斧、磨石・敲石類などの器種があり、量的には石鏃（未成品を含む）、打製石斧、磨石・敲石類などが主体となっている。石鏃未成品は石器製作活動の存在を示し、打製石斧からは植物地下茎の採取といった活動が予想される。また磨石・敲石類の存在は食料加工が行われたことを裏付けている。従ってこれらの石器の存在からは、この調査区近辺で居住に伴う日常的な生計活動が行われていたことが予測されるであろう。

第2節　奈良・平安時代

第1項　第8号竪穴住居跡出土石杵の機能と性格

第8号竪穴住居跡から出土した石杵に対する肉眼観察による記載と付着物の自然科学的分析については前章で詳細に述べたが、ここでこの石杵が何に使われた道具であるのか、またこの遺物の存在がどのような意味を示すのか、という点について少々考えてみたい。

この石器の観察から明らかとなったのは、水銀朱（辰砂）と金（微量の不純物を含むが混ぜ物はない金）の2種の物質が前者から後者の順序でさほど間を空けずに利用されたこと、またそれらの物質がこの砂岩製の石杵（乳棒）によってすりつぶされていた、という大きく2点である。

ところで古代の技術で、水銀朱と金という2つの素材を必要とするものには、赤漆・蒔絵製造と鍍金（金メッキ）作業の二つが上げられると思われる。そこでまず前者の可能性から考えてみたい。

赤漆の製造にはベンガラもしくは水銀朱が用いられるが、赤色物質を均質に漆に混ぜ込まなければならず、そのためにできるだけ細かく粉砕する必要がある。その際にはおそらく乳棒状の道具が使用されるであろう。そしてさらにこうして製造された赤漆のみならず金をも使用する作業には、漆器にごく微細な金粉を利用して絵を描く蒔絵が上げられる。この蒔絵に使用する金粉の製造法には、①ヤスリによる削り出しと、②金箔の屑から造り出す消粉技術、の二種が上げられる[1]。もし仮に本遺跡から出土した石杵が金粉製造の道具であったとすれば、後者の方法によったと考えられることになろう。この技術が平安時代当時すでに存在していたと認めるためには、まずかなり薄い金箔の屑が地方でも入手できることが前提となる。そしてこのためには金箔製造者が各地に広く存在していたか、それとも金箔が広域的に流通していていたかのどちらかが必要となる。つまり、消粉技術の存在を認めるためには、考古学的には論証困難ないくつかの前提条件を設定する必要が生じてしまうことになる。

また鈴木稔氏の観察に述べられているように、金自体は「薄く延ばされた板が不定形に折り畳まれたような状態」(P64) にあって、金粉を製造するのとはむしろ逆の状態を示しているように思われる。加えて赤漆製造と蒔絵作業とは作業工程としては明らかに別々の段階であって、時間的に近接して行ったり、同じ道具を使用する必然性も薄いという点も指摘できよう。さらに古墳時代からの伝統を持ち、製作故地の問題はともかく、山梨を含む全国各地で多数の製品が出土している鍍金技術に比べると、正倉院御物に見られる末金鏤(まっきんる)がその嚆矢であると考えられている蒔絵技術は（佐々木1986)、時間的にかなり後出した技術であることもこの可能性を想定し難い要素だといえる。つまりこれらの諸点からは、出土した石杵が赤漆製造のための水銀朱粉砕用具であるという可能性は認められても、付着している金が金箔による金粉製造の残滓であるという説明に対しては総じて否定的であるといえよう[2]。

では鍍金（金メッキ）の可能性はどうであろうか。古代の鍍金技術は水銀アマルガム法によって行われていた。この方法は、1．水銀朱（辰砂）を細かく粉砕し、それを加熱・冷却して水銀液を精錬する。2．砂金を薄くすりつぶし、1の水銀液に溶かす。3．鍍金したい対象物（銅・青銅）の表面を脱脂し、水銀アマルガムを塗りつける。4．アマルガム水銀を塗った対象物を炭火で加熱し、水銀だけを気化・蒸発させる。5．水銀蒸発後は金のみが付着して残るので、それを鹿皮などでよく磨いて艶を出し、鍍金を完成させる。という手順を踏む（市毛1982、村上1997)。この方法ではまず水銀精錬のために水銀朱（辰砂）の粉砕とその加熱冷却が必要となり、さらにその液中にすみやかに金を溶かし込むために金自体もなるべく薄く細かくしておく必要があり、そのため「すりつぶす」工程が生じてくる。このように見てくると、水銀朱の粉砕と金のすりつぶしという作業がほぼ連続しており、石杵の観察結果と作業内容・手順とが矛盾しない。ただ石杵からは水銀液中に浸けた形跡は認められないことから、アマルガム中での攪拌などの作業には使われていないと考えられる。

以上のように、直接的な証明はできずいずれも状況証拠による消去法的な論証にとどまるものの、現時点ではこの石杵が鍍金（金メッキ）に使用されたものであると考えることが最も理解しやすい説明であろう。

次に、では何故この石杵が御所遺跡から出土したのか、という問題について考えてみたい。発掘調査によって得られた遺物や遺構の観察からは、この石杵以外に同種の作業の存在を窺わせるものはない。つまり上述の作業の存在は石杵のみに認められるのであって、このことからこうした作業がこの御所遺跡で実際に行われたのかどうかについては疑念が生まれる。しかしながら逆に、鍍金作業自体は地下に掘り込むような大がかりな設備を必要とするものではないため、遺構に何らかの痕跡が見受けられなくても不思議はない。また第1章第3節第2項の「御所遺跡周辺の遺跡」でも触れたように、御所遺跡の北およそ1km強の地点に、考古学的には不明なものの円通寺と呼ばれる平安時代の山岳修験道寺院が存在したという伝承があり、憶測を強くすれば関連性を認められるのかもしれない。また近隣では水銀朱（辰砂）が採取されるという地点は聞かないものの、金については御所遺跡の北西4km程度の距離にある浅利川付近に金山という地名があり（第3図)、実際に砂金が採取されたという話しも聞く。

このように石杵を用いた作業がこの遺跡内で行われたのか否かという点についてはどちらの可能性も考えられ、残念ながら今のところ判断を下し得ない。また、こうした遺物がなぜ大月市の集落遺跡から出土したのかという理由についても明らかでないが、いずれにしても御所遺跡を含む近隣地域でこうした作業が行われた可能性が高いと推測できるであろう。

なお、この石杵が使用された時期であるが、同じ竪穴住居跡から出土した遺物の年代観に従えば、9世紀第2四半期（825～850年頃）以前であると見られる。

第2項　本集落での奈良・平安時代食生活および生業について

発掘調査時、竪穴住居跡カマド内や焼土遺構より土壌を採取し、整理作業時に水洗選別した結果、各サンプルから動植物データが検出された[3]。これらについては第2章で遺構ごとにそれぞれ記述したが、ここでカマド内土壌から検出された炭化種実を列記すると、アワ、キビ、ヒエ、コムギ、ムギ類、マメ科、マメ科近似種、オニグルミ、サンショウ属、キイチゴ属、タデ属、シソ科、堅果、シロザ近似種、イネ科A・B、炭化塊の17種類である。これらの中で特徴的なのはイネ（米）が全く検出されていない点である。各カマドごとの検出状況ではア

ワとマメ類が優占して出土する傾向が見られ、こうした事実から、この時代この遺跡での主食が、米を除く雑穀類の粒食で成り立っていたことを示唆している。

一方、炭化種実と同じく複数のカマドから、マイワシや真骨類の魚骨、鳥類？・哺乳類？などの動物骨が検出されている。このことからは少なくとも本集落でこうした小型魚や鳥類、そして具体的な種は不明であるが、哺乳類などの動物質食料が副食の一部として食卓に上っていたと考えることができる。さらにまた魚骨が検出されたカマドが、少なくとも８世紀と９世紀後半の２時期であることから、こうした海産魚類がかなりの長期間にわたって食料とされていたことも確実といえよう。

農耕具などの生業に関する遺物が出土していないため、本集落の生業についてはこうした動植物遺体および周辺地形などから考えていくことになるが、遺跡の周辺には水田が可能な土地はほとんどみられず、また水稲耕作を裏付ける遺物も出土していない。こうした諸点と出土した炭化種実がイネを全く含まずアワなどの雑穀類やマメ類を主体としていることとは相互に矛盾しておらず整合的であることから、この集落では畠（畑）作による雑穀類の栽培が主要生業であったと考えられる。また海産魚類がどのようにしてこの集落にもたらされたのかは重要な問題であるが、海まで相当の距離があることや、漁労具が見つかっていないことから、この集落の住人自身が漁民であった可能性は除外できよう。さらに出土魚種がかなり限定されている様子からは、集落の住民が直接下流域まで出かけて行きマイワシなどの魚類を入手し持ち帰ったと考えるよりは、他者によって直接的あるいは間接的にもたらされたと見る方が理解しやすいのではなかろうか。つまり、この遺跡の住民自身が魚類交易を行っていた可能性は低いと予測されよう。この他、わずかながらも存在が確認されている哺乳類や鳥類については、住民自身による狩猟活動によって入手された可能性が強いと思われる。

第３項　奈良・平安時代の桂川・相模川水系魚類交易について

以上のように、少なくとも２軒のカマドより採取された土壌からマイワシを含む海産魚の骨が水選篩別された。

御所遺跡は桂川・相模川水系に立地するものの、河口からは約80kmほども遡った地点にあり、上述のようにこれらの魚類は交易によって入手していた事実を示すものだということができるが、それがどのような形で流通していたのかについてはさらに検討を重ねていく必要がある。

ところでマイワシは周知のように傷みの早い魚であり、河口からかなりの距離があるこの集落に鮮魚としてもたらされた可能性はほぼ除外できるであろう。とすれば、これらは塩蔵品や干物といった長期保存の効く食品に加工処理を加えられた上で流通したものだと考えられる。こうした加工処理の具体的形態についても今後さらに検討する必要があるが、消費地である本集落で頭骨や椎骨が確認されていることから、少なくともそれらが除去されない全体の姿を保つ形で加工処理されていたことが明らかである。

また、これらの魚骨が出土した竪穴住居跡の時期は８世紀から９世紀後半にわたっていることからすれば、このマイワシなどの魚類交易は、特定時期に限定された例外的なものではなく、少なくとも奈良時代から平安時代までかなり普遍的かつ一般的な性格を持って広域的に行われていたものである可能性が高いと考えられるであろう[(4)]。

第４項　御所遺跡で奈良・平安時代に行われた諸活動と集落の性格

今回の調査で検出されたこの時期の遺構は、竪穴住居跡８軒と土坑やピット群であった。またすでに述べてきたように、これらの遺構はほとんど切り合い関係を持たず比較的散漫な分布状況であった。さらに周辺の地形からすれば、調査地の北・南・東に遺構群の広がりはほとんど期待できず、西側の状況は不明であるがＩ区の遺構・遺物出土状況からはさほどの遺構密集度は予想できないように思われる。また調査範囲内の竪穴住居跡群もその出土土器群による時期検討からは、多くてもせいぜい４軒程度が同時期に存在した可能性が推測される程度である。こうした状況からすれば、この御所遺跡の集落はこの地域で一般的に検出され、他の集落と取り立てて異なるところのないごく通常の小規模集落であったと見なせるであろう。

さて、この集落住民の生業活動としては、雑穀栽培を主とする畠（畑）作農耕と、哺乳類や鳥類の狩猟活動が上げられるわけだが、いずれも集落近辺での活動と見なせる。これに対し、上述の石杵からは特殊な手工業従事

者の存在とそれを必要とする寺院などや人物が予測され、海産魚骨からは幅広い地域間交易による人と物の動きが推測される。

では、このような狭い地域内に限られた生業活動と広域的な人・物の動きはどのように説明できるのであろうか。この問題について集落での生活全般に関しては明らかにできないが、少なくとも食生活や生業といった側面では、時間的にどのくらい遡り得るのかは不明であるものの、8世紀には主食を含む植物質食料は基本的に自給し、副食としての動物質食料は遠隔地からの交易による入手と住民自身による狩猟活動の両面で調達するという、広域的な物資流通に依存した食料入手体制が確立していたと理解できよう。

また県内のこの時代の諸遺跡では水田適地に恵まれない山間の集落でも米が全く検出されないことはなく（櫛原1997)、本集落でなぜ米が入手されていなかったのかという点は興味深い問題である。広域的な交易の存在からは、必要があれば交換による米の入手は可能であったと思われる。この問題に対する答えを現在出すことは困難であり、推測による可能性を指摘しておくにとどまるが、おそらく地形的な原因などから近隣地域でも稲作はあまり行われておらず絶対量的に入手が困難であったこと、また米に対する指向自体も現代人が思うほど強くなかったことなどが考えられる。今後周辺の同時代集落の調査によってこうした問題についての検討も可能になろう。また石杵といった一般的とは言えない遺物やそれから推測される技術もこうした外部との開かれた関係性からこの集落にもたらされ、出土するに到ったものと思われる。

さて、以上述べたような本集落の性格は、周辺に点在する同時代遺跡の中で特殊なものなのであろうか？今回の調査の結果、検出された遺構の種類や内容が、ごく一般的なものであることは先述の通りであり、こうした点から考えれば、石杵はともかく、他の諸特徴はおそらく本遺跡のみに限られるものではなく、桂川水系の近隣奈良・平安時代集落にも広く共通する性格であると予想される。もちろんこうした問題についてもここで結論を出すことはできないため、今後この地域で行われる発掘調査の成果を待ちたいと思う。

第3節　中・近世

今回の調査で確認された中・近世の遺構はⅠ区の平地造成面とⅡ区の若干の土坑であり、遺物もごくわずかな陶磁器類や古銭などに限られている。これらの資料からこの場所の土地利用について具体的に内容を復元するのは困難であるが、遺物の時期からすると平安時代以後さほど利用されていなかったこの場所に、中世末期以降、何らかの形で再び土地利用がなされるようになったものと思われる。

さて、この場所の字名が御所とされているのは、妙法寺記（勝山記）に天文十五年（1546年)、武田晴信（信玄）によって信州佐久郡の志賀城が攻め落とされ、その戦功によりこの地の領主小山田出羽守信有が志賀城主の妻を連れ帰って住まわせた、という伝承によるものと推測される。しかしながら、実際にはそれを確実に裏付ける遺構・遺物は出土しなかった。また、この270年ほど後の文化十一年（1814年）に書かれた甲斐国史ではこの「小山田出羽守妾婦ノ宅跡」が存在した場所について、

「(上下）両駒橋ノ間駅路南ノ山足ニ有リ今皆田畠トナレバ広狭詳カニシガタシ其ノ内ニ大石ヲ畳ミ古木立チ茂レル所アリ仮山ノ跡ナルベシ其ノ岸ハ泉水ヲメグラセシ地ト見ユ土人伝ヘ云フ古エサリヌベキ女房此ノ地ニ住ミ・・・（中略）ケルトゾ。何人ナルコト知ラザリキ。今此ノ地ヲ御所ト称ス。」

と述べている（佐藤八郎校訂1968、傍点筆者)。この記載に見られる「大石」や「岸に泉水を巡らせた」という記載がⅠ区で検出された不定形の造成面を示していると仮に捉えると、甲斐国史の執筆者はこの場所を「御所」の故地と見ていた可能性が生じる。しかしながら、立地から考えて「泉水」を引くには背面の五ヶ堰用水を利用する以外には想定できず、しかもこの用水の開削が第1章第3節でも触れたように1600年代前半のことだとすると、甲斐国史のこの記載に対する信憑性は低いものとなろう。こうした見通しから、このⅠ区の平地造成面の性格については、背面の五ヶ堰用水が開削されるに伴い造られた水田の可能性が高いと考えておきたい。

以上、御所遺跡の発掘調査の結果出土した遺構遺物、およびそれらから復元される内容についてごく簡単に記述した。限られたページの中で触れられなかった事実も多く、また検討すべき課題も多い。残念ながら筆者の能

力不足もあり決して十分とは言えない報告であるが、こうした諸点については今後機会を見て少しずつ論じていきたいと思う。

（小林）

註

(1)　金粉を造る方法は二種類あるという。一つは「金箔を型抜きしたときにでる屑から造る方法」で、もう一つは「金地金からヤスリなどで削り出す方法」である。前者の方法は「薄くて、日に透かして青く見え、手で擦るとなくなってしまうような」「金箔屑を鍋に入れ、水、水飴、ひまし油などを入れ長時間こねる。乾いてきたら、水を添加してこねることを続ける。この後、添加物を除去する目的で熱湯などで洗う。続いてフルイでふるい、目的とする粒度の金粉とする。」のだという（田口1995）。なおここで引用されている福島県会津若松市の菊池金粉製作所の千賀龍輔氏に直接うかがったところ、この「こねる」という作業は古くは陶器などに金箔屑を入れすりこぎなどで擦ったのではないかという。

(2)　なお、金を直接漆に混ぜ込む金漆は漆に金が均質に混ざらないため造り得ない。このため金粉を使って描画するには膠水溶液中に金粉を混ぜる金泥が作られるわけであるが、この金粉製造時に石杵が使われたと考えるのには同じ理由から否定的である。

(3)　水洗選別の方法や、検出された動植物遺体の詳細については、別稿で改めて述べたい。

(4)　御所遺跡から桂川を６～７kmほど遡った都留市井倉の九鬼Ⅱ遺跡（第３図No.98）では、第２号住居跡（９世紀中頃）・第７号住居跡（10世紀後半代）の２件の竪穴住居跡カマド中より細片化した動物骨が出土している。これらはウサギ・鳥・シカと同定されており、魚類骨は含まれていない（金子1996）。

　これら動物遺体の検出方法などが不明なため確実とは言えないが、御所遺跡の魚類検出カマドと時期的には一部重なっていることから、こうした事実が海産魚の流通範囲を示している可能性も考えられる。

引用・参考文献

阿部祥人　1982　「剥離痕による石鏃の分析－試論－」『東京都埋蔵文化財センター紀要Ⅰ』

市毛　勲　1982　「施朱の風習の衰退とアマルガム鍍金」『古代文化』第34巻第11号

大阪市文化財協会　1995　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』

大月市教育委員会　1973　『山梨県大月市宮谷遺跡発掘調査報告書』

大月市教育委員会　1995　『大月市埋蔵文化財包蔵地一覧表・分布図』

大山　柏　1927　「神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」『史前学研究会小報』第１号　史前学研究会

神奈川考古同人会　1983　『神奈川考古』第14号（シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題－相模国と周辺地域の様相－第Ⅱ版）

金子浩昌　1996　「２．九鬼Ⅱ遺跡出土獣骨と人骨の同定」『九鬼Ⅱ遺跡』山梨県教育委員会

櫛原功一　1992　「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器と陶器」『宮ノ前遺跡』韮崎市遺跡調査会ほか

　　1997　「山梨県における原始から中世の食物調理の研究－水洗選別法による土壌分析をもとに－」『第６回テレビ山梨サイエンス振興基金研究報告書』テレビ山梨厚生文化事業団

坂本美夫　1986　「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号（シンポジウム　古代末期～中世における在地形土器の諸問題）

佐々木英　1986　『漆芸の伝統技法』理工学社

佐藤八郎校訂　1968　『甲斐国史』第二巻　雄山閣

田口　勇　1995　「金箔から金粉をつくる」『みちのくの金－幻の砂金の歴史と科学－』アグネ技術センター

都留市　1986　『都留市史』資料編地史・考古

都留市教育委員会　1980　『堀之内原遺跡』

都留市教育委員会ほか　1981　『中谷・宮脇遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第８集
都留市教育委員会　1981　『中溝遺跡』
都留市教育委員会　1985　『鷹ノ巣遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第10集
都留市教育委員会ほか　1987　『牛石遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第11集
三上徹也　1990　「縄文時代における「完形品」の概念について－石鏃を例とした考古学的資料批判の試論的実践」『縄文時代』第１号
村上　隆　1997　「５世紀に作られた帯金具の製作技術を探る－金銅装技法を中心に－」『王者の武装－５世紀の金工技術－』京都大学総合博物館
森山公一　1989　「尖頭器の製作と折れ」『長野県考古学会誌』５９・６０
山中一郎　1994　『石器研究のダイナミズム－ボルド型式学の革新のために－』大阪文化研究会
山梨県　1998　『山梨県史　資料編１原始・古代１考古（遺跡）』
山梨県教育委員会　1995a　『中溝遺跡・揚久保遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第115集
山梨県教育委員会　1995b　『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集
山梨県教育委員会　1996a　『大月遺跡(都留高等学校体育館)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第139集
山梨県教育委員会　1996b　『九鬼Ⅱ遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第118集
山梨県考古学協会　1992　『甲斐型土器－その編年と年代－』
＿＿＿＿＿＿＿　1997　『山梨考古』第65号
山梨県埋蔵文化財センター　1995　『年報』11

第２表　縄文時代石器観察表

図版番号	挿図番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	遺物番号	特記事項
32	1	第１号竪穴状遺構	石鏃	黒曜石	(2.25)	(1.15)	0.50	0.83	2551	
32	2	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	(6.45)	4.75	1.25	72.00	2402	短冊形
32	3	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	(4.70)	4.85	1.15	38.00	2818	短冊形
32	4	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	(6.15)	6.15	1.50	58.00	2321	短冊形
32	5	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	11.15	5.45	1.65	124.00	2317	短冊形
32	6	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	8.90	5.10	1.55	86.00	2808	短冊形
32	7	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	(5.35)	5.40	1.70	53.00	2404	
32	8	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	砂岩	11.35	5.00	2.10	148.00	2680	短冊形
32	9	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	10.95	3.75	1.20	59.00	2516	
32	10	第１号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	(7.20)	6.20	2.80	134.00	2403	
32	11	第１号竪穴状遺構	非定形石器	ホルンフェルス	7.30	5.75	2.00	114.00	2437	
32	12	第１号竪穴状遺構	磨石・敲石類	火山礫凝灰岩	(9.00)	5.60	2.25	0.37	2903	
34	1	第２号竪穴状遺構	打製石斧類	砂岩	11.00	4.95	1.80	138.00	2735	短冊形
34	2	第２号竪穴状遺構	打製石斧類	ホルンフェルス	(5.10)	7.00	1.85	71.00	2729	
34	3	第２号竪穴状遺構	磨石・敲石類	玄武岩	7.45	6.90	3.00	186.00	2730	
39	1	第４号竪穴住居跡	凹基無茎石鏃	緑色凝灰岩	3.25	1.80	0.40	1.46	341	
39	2	L16	凹基無茎石鏃	チャート	2.65	1.65	0.45	0.85	1750	
39	3	第５号竪穴住居跡	凹基無茎石鏃	黒曜石	(2.30)	(1.55)	0.55	1.28	949	
39	4	J15	凹基無茎石鏃	珪質頁岩	1.60	1.50	0.40	0.70		
39	5	N13	凹基無茎石鏃	黒曜石	1.65	1.45	0.30	0.39	1783	
39	6	N13	凹基無茎石鏃	チャート	(1.40)	1.65	0.45	0.94	2330	
39	7	第５号竪穴住居跡	凹基有茎石鏃	黒曜石	2.10	1.45	0.35	0.50	1994	
39	8	第６号竪穴住居跡	凹基有茎石鏃	黒曜石	2.60	1.55	0.30	0.78	1547	
39	9	第７号竪穴住居跡	凹基有茎石鏃	黒曜石	(1.10)	1.65	0.40	0.59	1309	
39	10	第５号竪穴住居跡	凹基有茎石鏃	黒曜石	(1.25)	(0.60)	0.25	0.09	1175	
39	11	第５号竪穴住居跡	凹基無茎石鏃	黒曜石	2.35	1.45	0.50	1.00	1527a	未成品
39	12	第７号竪穴住居跡	石鏃か	黒曜石	2.55	2.05	0.80	1.71	1329	未成品
39	13	第11号土坑	石鏃	チャート	2.45	1.60	0.65	1.87	1179	未成品
39	14	第５号竪穴住居跡	石錐	黒曜石	2.25	1.35	0.40	0.87	939	
39	15	第５号竪穴住居跡	石錐	黒曜石	3.20	2.70	1.35	1.94	1098	
39	16	第４号竪穴住居跡	微細剥離痕剥片	黒曜石	3.25	2.05	1.15	1.43	481	
39	17	第５号竪穴住居跡	削器	黒曜石	2.45	1.70	0.95	3.00	1239	
39	18	第12号土坑	石匙	珪質頁岩	4.35	2.25	0.65	4.14	1614	
39	19	第５号竪穴住居跡	使用痕剥片	黒曜石	2.65	1.80	0.75	2.14	1120	
39	20	第６号竪穴住居跡	使用痕剥片	黒曜石	3.25	2.05	0.75	3.77	1418	
39	21	第５号竪穴住居跡	使用痕剥片	黒曜石	2.45	1.45	0.75	2.59	875	
39	22	I08	微細剥離痕剥片	黒曜石	2.60	1.41	0.75	1.70		
39	23	第５号竪穴住居跡	微細剥離痕剥片	黒曜石	3.80	2.15	0.70	1.21	915	
39	24	第７号竪穴住居跡	微細剥離痕剥片	黒曜石	2.50	1.00	0.65	1.02	1288	
39	25	第５号竪穴住居跡	微細剥離痕剥片	黒曜石	2.95	2.00	0.95	0.81	851	
39	26	第５号竪穴住居跡	石錐	黒曜石	2.20	1.25	0.90	0.60	1545	未成品
40	1	第５号土坑	二次加工剥片	黒曜石	1.70	1.25	0.55	12.00	2090	未成品
40	2	第５号竪穴住居跡	二次加工剥片	チャート	2.25	1.75	6.50	1.72	1447	未成品
40	3	第５号竪穴住居跡	二次加工剥片	黒曜石	4.30	2.40	1.25	1.87	2021	横長剥片素材
40	4	第７号竪穴住居跡	二次加工剥片	黒曜石	1.40	1.90	0.55	1.30	1598	横長剥片素材
40	5	第５号竪穴住居跡	二次加工剥片	黒曜石	2.15	1.15	0.75	1.07	852	横長剥片素材
40	6	第６号竪穴住居跡	二次加工剥片	黒曜石	1.30	1.05	0.90	1.01	1336	横長剥片素材
40	7	02P01	二次加工剥片	黒曜石	1.60	2.45	0.90	2.31	2627	横長剥片素材
40	8	M14	二次加工剥片	黒曜石	1.45	1.70	0.55	0.72	1778	幅広剥片素材
40	9	Ⅰ区表採	二次加工剥片	黒曜石	2.10	2.30	0.90	2.30		幅広剥片素材
40	10	第13号土坑	二次加工剥片	黒曜石	2.25	1.95	0.60	1.32	1784	幅広剥片素材
40	11	L14	二次加工剥片	黒曜石	2.65	2.10	0.80	1.24	2579	幅広剥片素材
40	12	M16	二次加工剥片	黒曜石	1.90	1.40	0.60	1.00	1921	縦長剥片素材
40	13	第７号竪穴住居跡	二次加工剥片	黒曜石	1.85	1.60	0.55	1.12	1342	縦長剥片素材
40	14	第７号竪穴住居跡	二次加工剥片	黒曜石	2.40	1.30	0.70	1.15	2379	縦長剥片素材
40	15	第６号竪穴住居跡	二次加工剥片	黒曜石	2.85	1.15	0.75	1.73	1228	縦長剥片素材
40	16	K14	石核	黒曜石	1.50	2.30	0.90	3.05	551	
40	17	第12号土坑	石核	黒曜石	1.40	1.95	0.60	1.60	1540	
40	18	第３号竪穴住居跡		黒曜石	3.25	1.70	0.80	3.70	129	
40	19	Ⅱ区表採		黒曜石	2.20	1.55	0.60	2.10		
40	20	02P01	非定形石器	ホルンフェルス	4.70	7.75	2.45	94.00	762	
40	21	Ⅱ区表土	非定形石器	ホルンフェルス	6.65	8.75	1.75	116.90		
40	22	Ⅱ区表採	非定形石器	ホルンフェルス	5.85	2.95	0.85	14.90		
41	1	N12	打製石斧類	ホルンフェルス	11.70	5.45	1.60	109.00	1914	撥形
41	2	L07	打製石斧類	ホルンフェルス	(9.55)	4.25	0.95	51.80		分銅形
41	3	Ⅱ区表土	打製石斧類	ホルンフェルス	11.30	4.90	2.25	138.70		撥形
41	4	M12	打製石斧類	ホルンフェルス	13.00	5.75	1.45	119.00	2800	撥形
41	5	第１号土坑	打製石斧類	ホルンフェルス	10.40	5.30	2.05	130.00	2300	撥形

図版番号	挿図番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	遺物番号	特記事項
41	6	K03	打製石斧類	ホルンフェルス	10.15	4.95	1.75	96.00	623	撥形
41	7	L07	打製石斧類	ホルンフェルス	(10.00)	5.70	2.35	136.00	2693	撥形
41	8	第10号土坑	打製石斧類	ホルンフェルス	(12.20)	(7.55)	2.90	283.00	1805	撥形
41	9	L07	打製石斧類	ホルンフェルス	(7.55)	5.95	1.00	68.50		分銅形
41	10	表土	打製石斧類	ホルンフェルス	(7.20)	5.05	1.10	52.40		分銅形
42	1	L12	打製石斧類	ホルンフェルス	11.95	4.40	1.70	113.00	1906	短冊形
42	2	L07	打製石斧類	ホルンフェルス	(8.85)	6.45	2.60	131.00	2601	撥形
42	3	表土	打製石斧類	ホルンフェルス	(7.20)	5.60	1.40	49.30		分銅形
42	4	K12	打製石斧類	ホルンフェルス	(7.90)	5.70	2.25	80.00	441	撥形
42	5	SI007	磨石・敲石類	玄武岩	6.25	5.55	1.95	104.00	1083	
42	6	Ⅱ区表採	磨石・敲石類	玄武岩	6.30	5.40	3.30	173.40		
42	7	第7号竪穴住居跡	磨石・敲石類	花崗岩類	(3.60)	6.90	3.20	112.00	2534	
42	8	J15	磨石・敲石類	閃緑岩	10.55	6.30	2.45	288.50		
42	9	第14号土坑	磨石・敲石類	花崗岩類	9.75	6.05	3.80	313.00	758	
42	10	第14号土坑	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	10.55	8.10	3.65	513.00	761	
42	11	第15号土坑	磨石・敲石類	花崗岩類	(9.80)	5.00	4.40	333.00	1358	
43	1	M13	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	11.70	9.50	4.65	805.00	157	
43	2	Ⅱ区表採	磨石・敲石類	粘板岩	11.30	7.90	2.45	406.50		
43	3	M13	磨石・敲石類	玄武岩	10.10	7.75	5.25	578.00	509	撥形
43	4	K08	磨石・敲石類	緑色凝灰岩	15.35	6.80	2.75	471.10		分銅形
43	5	第7号竪穴住居跡	磨石・敲石類	火山礫凝灰岩	7.65	5.75	6.55	431.80		撥形
43	6	第3号竪穴住居跡	磨石・敲石類	花崗岩類	11.40	5.65	3.50	373.00	687	撥形
43	7	M13	磨石・敲石類	花崗岩類	9.40	6.15	4.45	425.00	508	撥形
43	8	M13	磨石・敲石類	花崗岩類	(7.80)	3.55	3.60	233.00	156	撥形
44	1	L17表土	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	(9.70)	7.05	4.00	372.30		撥形
44	2	01P01	磨石・敲石類	火山礫凝灰岩	12.15	3.75	3.15	215.00	2717	撥形

第3表　奈良・平安時代遺物観察表

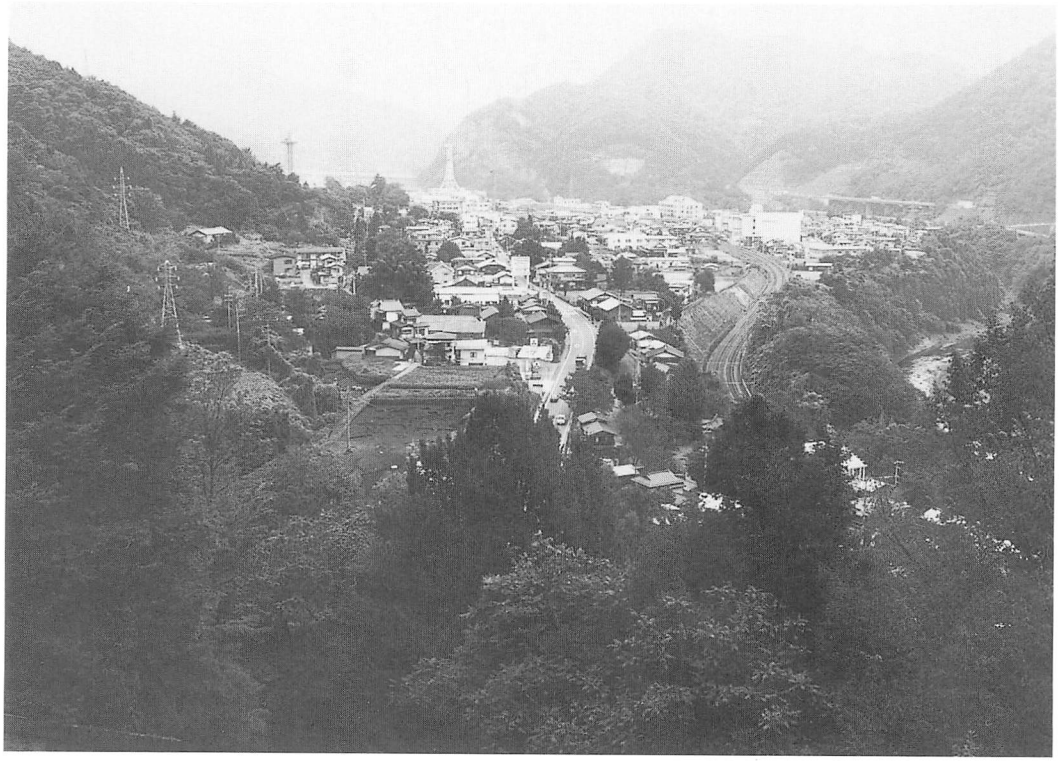
挿図番号	番号	出土位置	種類	器種	口径長さ(cm)	底径幅(cm)	器高厚さ(cm)	重量(g)	遺物番号	成形・整形技法および特記事項
45	1	第1号竪穴住居跡	土師器	坏	—	—	—		42	底部外面に墨書「長」。底部糸切りの後、周辺ヘラ削り。
46	1	第2号竪穴住居跡	土師器	坏	13.00	—	(4.00)		2695	体部内面に放射状暗文。外面体部下半に手持ちヘラ削り。
46	2	第2号竪穴住居跡	土師器	坏	10.40	5.60	4.10		2546	底部外面に墨書「□」。底部糸切りの後、周辺手持ちヘラ削り。体部外面下半にヘラ削り。内面に黒色物付着。
46	3	第2号竪穴住居跡	土師器	甕	—	7.40	(11.60)		2357	底部外面木葉痕。胴部外面縦ハケ目。胴部内面横ハケ目。
47	1	第3号竪穴住居跡	土師器	坏	13.00	4.30	4.70		102	底部外面手持ちヘラ削り。体部外面下位にヘラ削り。体部内面に放射状暗文。
47	2	第3号竪穴住居跡	土師器	皿	—	4.70	1.70		904	底部・体部下位外面に回転ヘラ削り。内面に渦巻状暗文。
47	3	第3号竪穴住居跡	土師器	高台坏	—	6.10	(2.60)		710	底部外面に墨書「長」。削り出し高台。底部より体部外面下位まで回転ヘラ削り。
47	4	第3号竪穴住居跡	土師器	坏	—	—	—		90	底部外面に墨書「□」。
47	5	第3号竪穴住居跡	土師器	甕	25.90	—	(10.00)		355	胴部外面縦ハケ目。口縁ナデ。胴部内面から頸部上まで横ハケ目。
47	6	第3号竪穴住居跡	土師器	甕	28.10	—	-6.20		736	胴部外面縦ハケ目。口縁ナデ。胴部内面から頸部上まで横ハケ目。
47	7	第3号竪穴住居跡	土師器	甕	12.60	6.10	10.00		149	底部外面木葉痕。胴部外面縦ハケ目。口縁部外面横ナデ。口縁部内面および胴部内面横ハケ目。
47	8	第3号竪穴住居跡	須恵器	甕・壺	—	—	—		51	外面平行叩き。内面青海波当て具痕。
48	1	第4号竪穴住居跡	土師器	坏	11.50	5.80	4.00		1542	底部外面回転糸切り。体部下半ヘラ削り。体部内面放射状暗文。
48	2	第4号竪穴住居跡	土師器	坏	—	6.10	(2.10)		258	底部全面手持ちヘラ削り。体部外面下半ヘラ削り。体部内面放射状暗文。
48	3	第4号竪穴住居跡	土師器	坏	10.00	4.70	3.90		290	底部外面に墨書「□」。底部外面回転糸切り。体部内面放射状暗文。
48	4	第4号竪穴住居跡	土師器	坏	—	4.80	3.40		297	底部外面に墨書「□」。底部外面全面ヘラ削り。体部外面下半ヘラ削り。体部内面放射状暗文。
48	5	第4号竪穴住居跡	土師器	坏	—	5.80	(2.00)		288	底部外面に墨書「□」。底部外面回転糸切り。体部下半ヘラ削り。体部内面放射状暗文。
48	6	第4号竪穴住居跡	土師器	坏	—	—	—		984	底部外面に墨書「□」。
48	7	第4号竪穴住居跡	土師器	甕	—	6.90	(6.60)		1760	底部外面木葉痕。胴部外面縦ハケ目。胴部内面横ハケ目。
48	8	第4号竪穴住居跡	土師器	甕	—	9.20	10.90		1677	底部外面木葉痕。胴部外面縦ハケ目。胴部内面横ハケ目。
49	1	第5号竪穴住居跡	土師器	坏	13.50	—	(2.50)		1097	ロクロ整形。内外面無調整。
49	2	第5号竪穴住居跡	土師器	坏	15.90	—	(4.00)		763	体部外面横ミガキ。体部内面放射状暗文。
49	3	第5号竪穴住居跡	須恵器	坏	—	9.00	(1.20)		819	貼り付け高台。
49	4	第5号竪穴住居跡	須恵器	坏蓋	15.20	—	(1.60)		1668	酸化炎焼成に近い。頂部回転ヘラ削り。
49	5	第5号竪穴住居跡	土師器	胴張甕	32.10	—	(18.70)		1663	胴部内外面は基本的に無調整だが、内面は一部に弱い横ハケ目。口縁部は横ナデ。
49	6	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	—	—	(4.50)		880	ロクロ整形か。系譜不明。
49	7	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	—	—	(2.40)		1462b	ロクロ整形か。系譜不明。
49	8	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	22.10	—	(15.50)		1087	
49	9	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	—	10.70	(8.60)		1165	底部外面木葉痕。内外面無調整。

挿図番号	番号	出土位置	種類	器種	口径長さ(cm)	底径幅(cm)	器高厚さ(cm)	重量(g)	遺物番号	成形・整形技法および特記事項
49	10	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	—	9.70	(9.50)		1501	底部外面木葉痕。内外面無調整。
49	11	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	—	9.90	(8.90)		1669a	底部・胴部内外面ともに無調整。
49	12	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	—	7.70	(2.60)		1536	底部外面木葉痕。内外面無調整。
49	13	第5号竪穴住居跡	土師器	甕	—	11.50	(2.00)		773	底部外面木葉痕。胴部外面無調整。内面横ナデ。
49	14	第5号竪穴住居跡	鉄　器	刀子	(6.60)	(1.30)	0.70		882	
50	1	第6号竪穴住居跡	土師器	皿	14.40	5.30	2.40		617	底部外面回転ヘラケズリ。口縁部・内面ナデ。内面渦巻状暗文。
50	2	第6号竪穴住居跡	土師器	坏	10.60	5.70	3.90		1229	底部回転糸切り後、周辺手持ちヘラケズリ。体部外面は中位まで強いナデの後下位にヘラケズリ。内面体部放射状暗文。
50	3	第6号竪穴住居跡	土師器	坏	11.70	5.10	3.90		1662	底部全面手持ちヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。体部上半および内面ナデ。暗文無し。
50	4	第6号竪穴住居跡	土師器	坏	12.00	—	(4.30)		1745	底部外面ヘラケズリ。体部下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
50	5	第6号竪穴住居跡	土師器	坏	—	5.60	(3.00)		1796	底部外面回転糸切り後、手持ちヘラケズリ。体部下半ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
50	6	第6号竪穴住居跡	土師器	坏	—	6.00	(0.60)		611	底部外面に墨書「□」。底部外面回転糸切り後、周辺ヘラケズリ。
50	7	第6号竪穴住居跡	須恵器	坏	10.60	—	(2.20)		1486	
50	8	第6号竪穴住居跡	土師器	甕	27.70	—	(13.80)		1980	胴部外面縦ハケ目。口縁部内外面横ナデ。胴部内面弱い横ナデ。
51	1	第7号竪穴住居跡	土師器	坏	15.40	—	(5.10)		2336	外面横位ミガキ。内面底部際・口唇部下は横位ミガキ。体部縦位ミガキ。
51	2	第7号竪穴住居跡	土師器	甕	20.50	—	(9.90)		2472	内外面無調整。口縁部内外面ナデ。
51	3	第7号竪穴住居跡	土師器	甕	—	11.00	(3.50)		1692	底部外面木葉痕。内外面無調整。
51	4	第7号竪穴住居跡	土師器	甕	—	9.90	(4.80)		1393	底部外面木葉痕。内外面ナデ。
51	5	第7号竪穴住居跡	須恵器	甕・壺	—	—	—		1409	外面叩き。内面当て具痕およびヘラケズリ。
52	1	第8号竪穴住居跡	土師器	坏	10.80	5.30	3.90		2168	底部全面回転糸切り。体部下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
52	2	第8号竪穴住居跡	土師器	坏	11.10	5.30	4.30		2153	底部回転糸切り後、手持ちヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
52	3	第8号竪穴住居跡	土師器	坏	10.80	5.60	4.80		2302	底部手持ちヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
52	4	第8号竪穴住居跡	土師器	坏	—	4.80	1.50		2387	底部回転糸切り後、周辺手持ちヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。内面に黒色物質付着。
52	5	第8号竪穴住居跡	土師器	坏	12.80	6.20	5.50		2151	体部外面に刻書「□」。底部全面手持ちヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
52	6	第8号竪穴住居跡	土師器	坏	12.90	6.10	5.10		2155	体部外面に刻書「□」。底部全面手持ちヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
52	7	第8号竪穴住居跡	須恵器	坏	11.90	—	3.00		659	
52	8	第8号竪穴住居跡	土師器	鉢	38.20	—	15.20		658	胴部外面縦ハケ目。口縁部外面ナデ。内面横ハケ目。
52	9	第8号竪穴住居跡	石器	石杵	9.90	2.85	1.50	61.37	1728	金・水銀朱付着。
52	10	第8号竪穴住居跡	鉄器	鏃	—	1.10	0.80		2047	
53	1	P1	土師器	坏	—	4.90	(0.90)		2743	底部外面に墨書「□」。底部外面手持ちヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。
53	2	表採	土師器	坏	14.80	—	5.10		2851	体部外面下位縦ミガキ。上位横ミガキ。内面横ミガキ。
53	3	L12	土師器	坏	10.00	—	(2.50)		206	体部外面に墨書「□」。体部内面暗文無し。
53	4	L12	土師器	坏	12.80	—	(2.00)		159	体部内面暗文無し。
53	5	L11	土師器	坏	—	4.80	(1.50)		2852	底部外面に墨書「長」か。底部外面手持ちヘラケズリ。体部下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
53	6	L12	土師器	坏	—	5.50	(1.70)		164a	底部外面に墨書「□」。底部手持ちヘラケズリ。体部下位ヘラケズリ。体部内面放射状暗文。
53	7	M12	灰釉	皿	—	7.70	(2.00)		389	黒笹90号窯式。
53	8	I15	土器	皿	9.60	4.60	2.20		696	内外面ナデ。
53	9	L14	土器	皿	—	4.90	(1.80)		2773	底部回転糸切り。体部内外面ナデ。見込み面無調整。
53	10	第7号土坑	土器	皿	—	4.60	(1.20)		2078	底部回転糸切り。内外面ナデ。
53	11	第1号竪穴状遺構	土器	甕	—	—	(4.70)		2288	系譜不明。内外面ナデ。

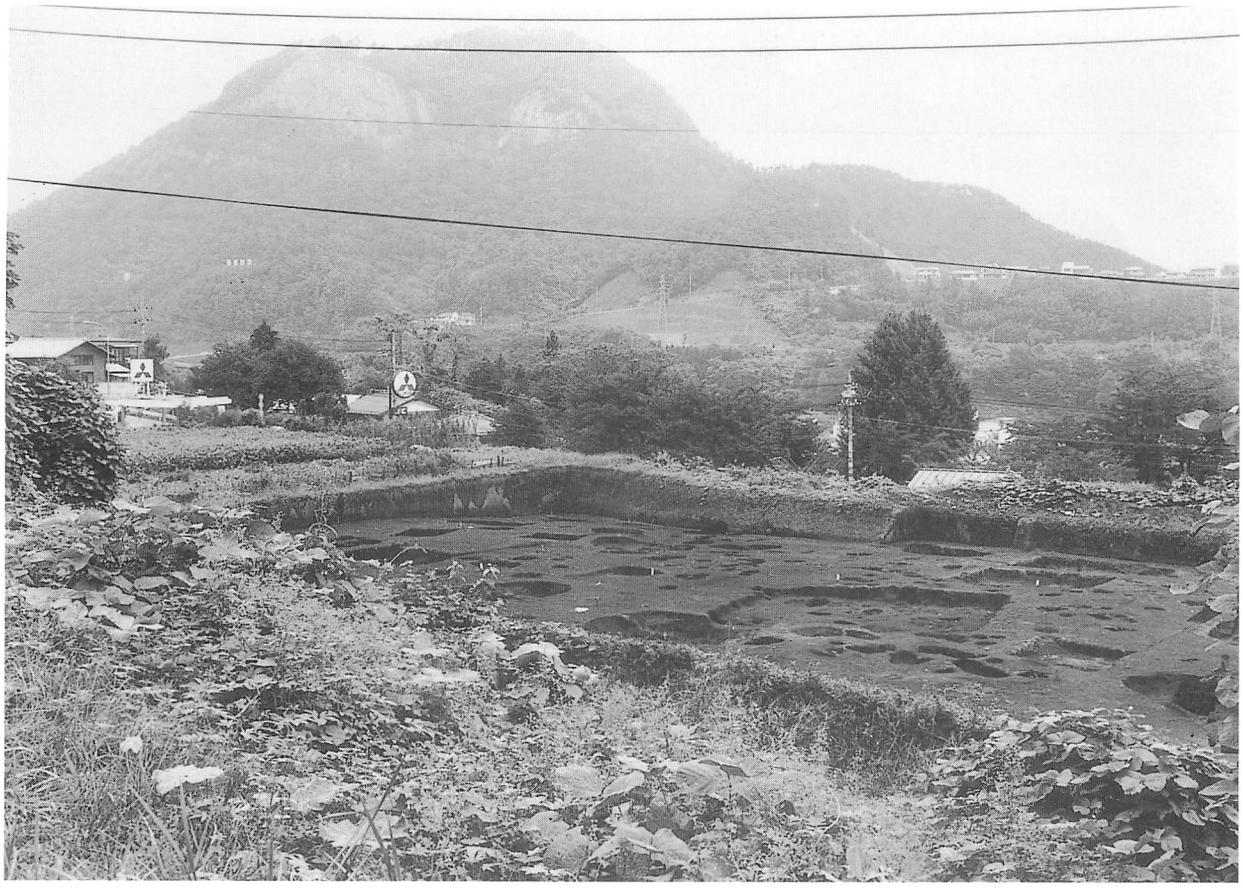
第4表　中・近世遺物観察表

挿図番号	番号	出土位置	種類	器種	口径長さ(cm)	底径幅(cm)	器高厚さ(cm)	重量(g)	遺物番号	成形・整形技法および特記事項
54	1	J08	陶磁器	皿	11.00	7.00	1.90		650	黄瀬戸系。2点あり。
54	2	表採	陶磁器	壺・甕	—	—	(5.20)		2853	
54	3	第16号土坑	陶磁器	壺	—	—	(2.50)		776	
54	4	表採	陶磁器	天目茶碗	8.90	—	(3.10)		2854	
54	5	第3号竪穴住居跡	陶磁器	甕・壺	—	—	(3.20)		783	瀬戸系。
54	6	P2	古銭	紹聖元宝	2.45	2.45		2.44	1357	初鋳1094年(北宋)
54	7	I17	古銭	紹聖元宝	2.35	2.35		2.28	379	初鋳1094年(北宋)
54	8	K19	古銭	天聖元宝	2.40	2.40		1.07	380	初鋳1023年(北宋)
54	9	H18	古銭	永楽通宝	2.45	2.45		1.79	381	初鋳1408年(明)

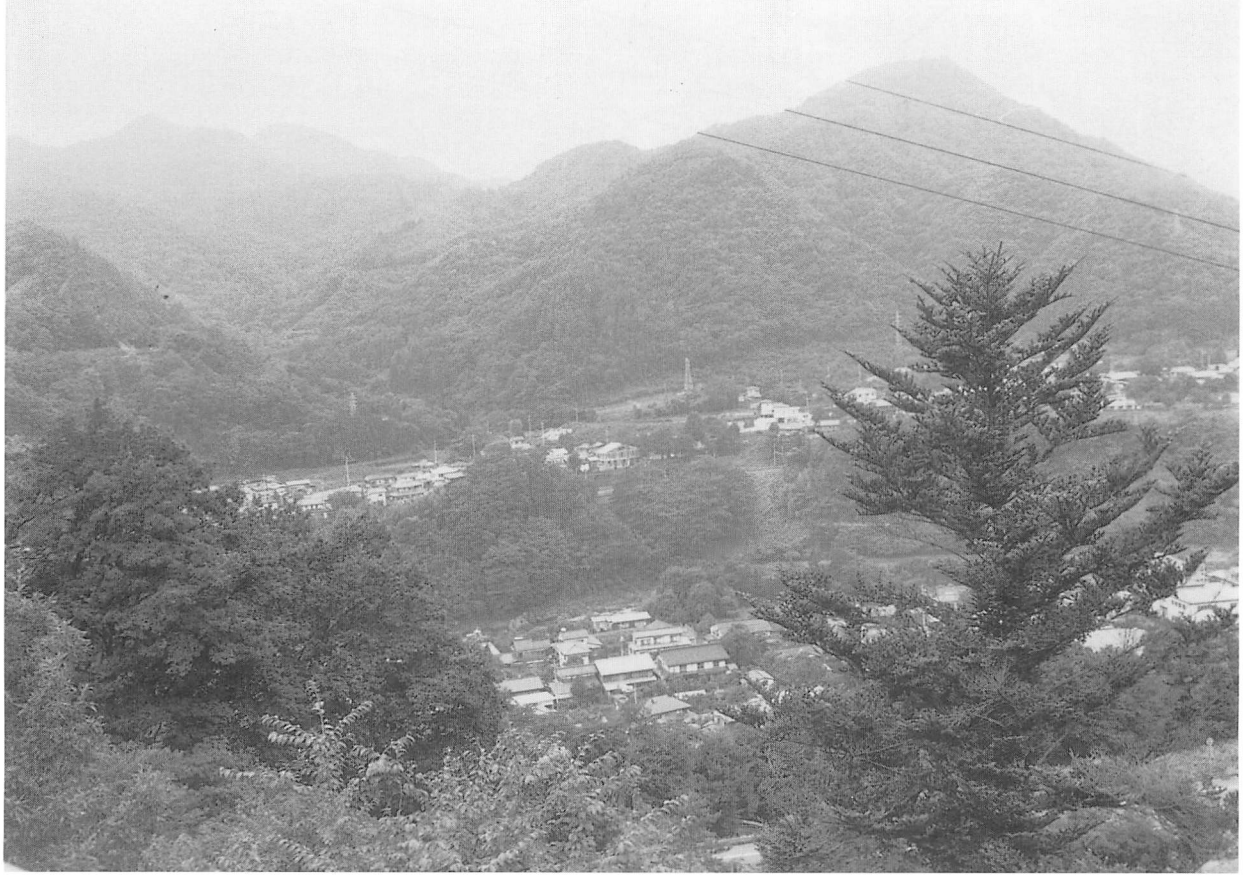
図　　版



遺跡遠景（東から）



II 区南から岩殿山を望む

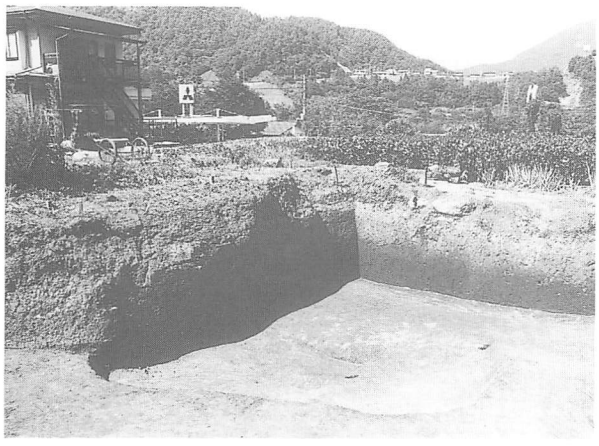


遺跡遠景（北から）

図版 2

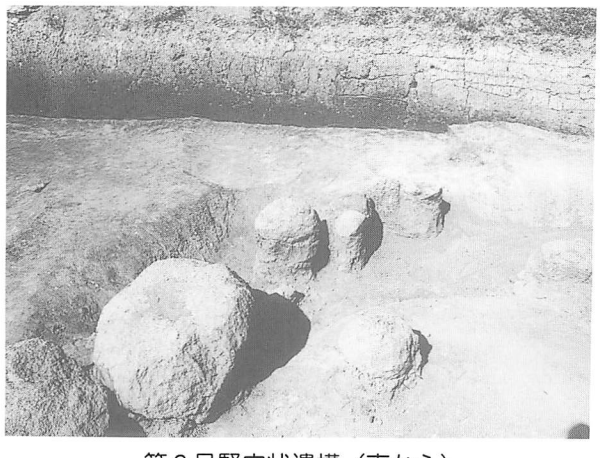
II 区 全 景

作 業 風 景



第１号竪穴状遺構（南から）

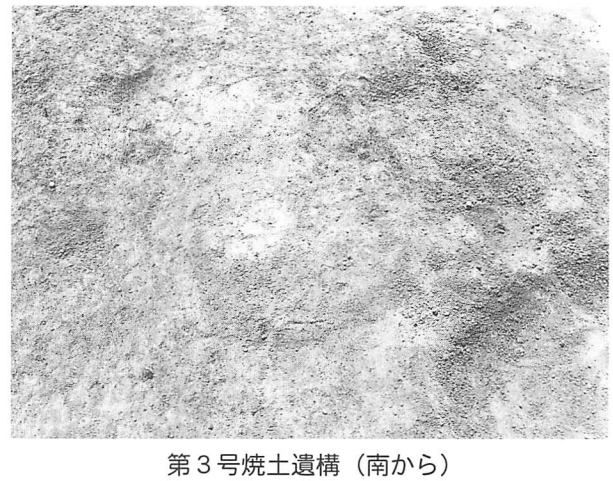
第１号竪穴状遺構（北から）



第２号竪穴状遺構（南から）

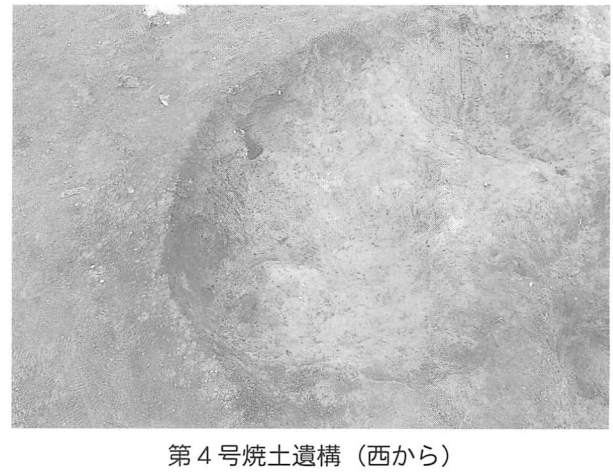
第１号焼土遺構（北から）

第２号焼土遺構（東から）



第３号焼土遺構（南から）

第４～６号焼土遺構・土坑（南から）

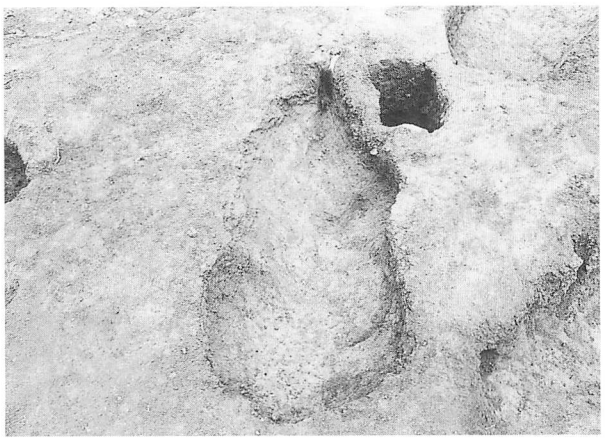


第４号焼土遺構（西から）

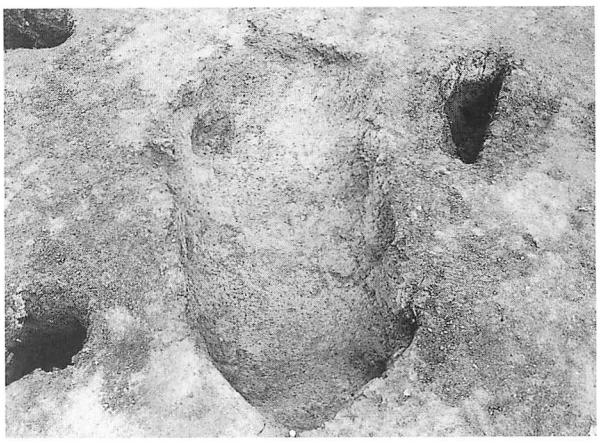
図版 4

第５号焼土遺構（西から）

第６号焼土遺構（北西から）



第７号焼土遺構（北西から）



第８号焼土遺構（北から）

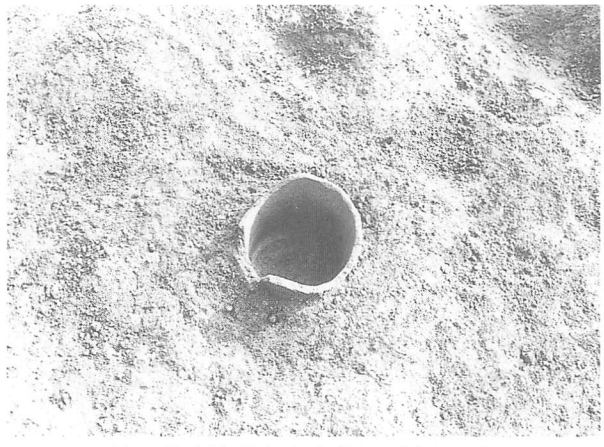
第８号焼土遺構焼土面セクション（西から）

第９号焼土遺構（北から）

第10号焼土遺構（北から）

第11号焼土遺構（東から）

第１号土坑（東から）



第１号土坑埋甕出土状況（東から）

第２号土坑（東から）

第３号土坑（西から）

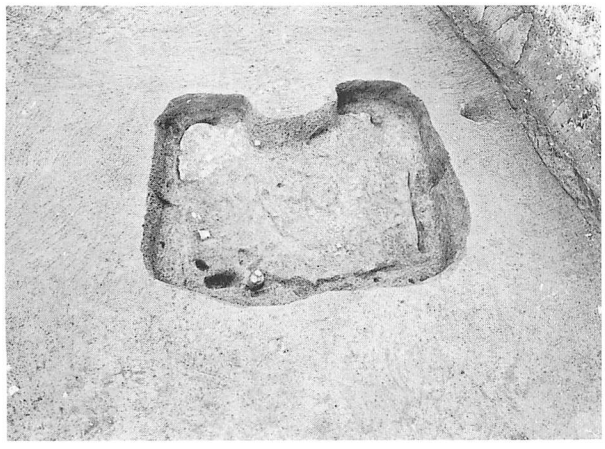
第３号土坑遺物出土状況（北から）

第１号竪穴住居跡（南から）

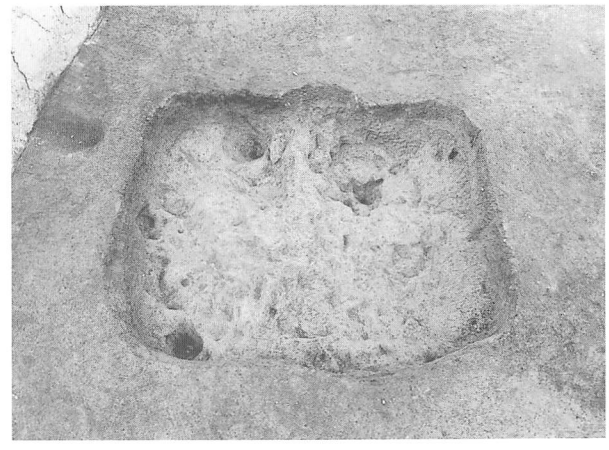
第２号竪穴住居跡カマド（西から）

第２号竪穴住居跡カマド掘り方（西から）

図版 6



第３号竪穴住居跡（南から）



第３号竪穴住居跡掘り方（南から）

第３号竪穴住居跡カマド（南から）

第３号竪穴住居跡カマド掘り方（南から）

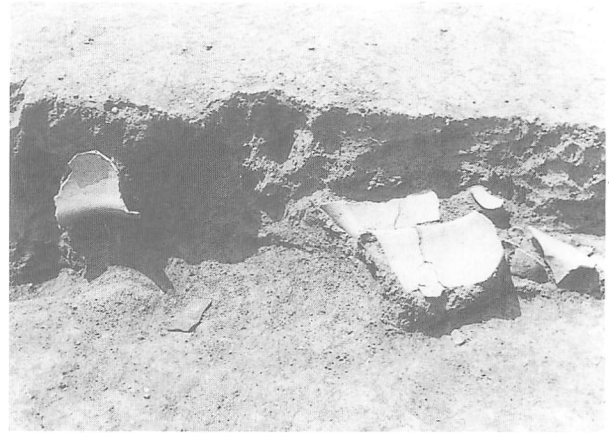
第４号竪穴住居跡（南から）

第４号竪穴住居跡掘り方（南から）

第４号竪穴住居跡カマド（南から）

第４号竪穴住居跡カマド掘り方（南から）

第５号竪穴住居跡（南から）

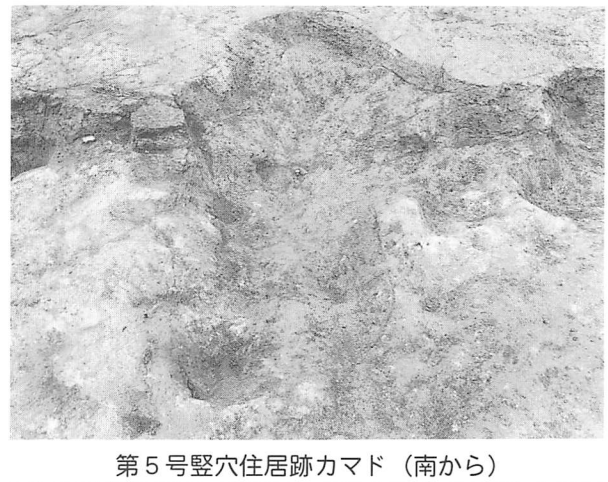


第５号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

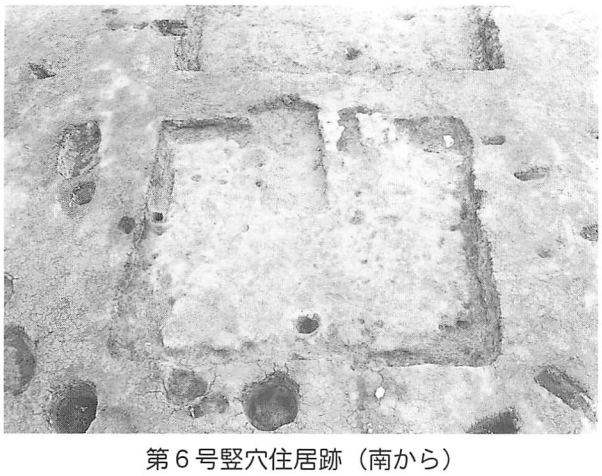
第５号竪穴住居跡遺物出土状況（西から）

第５号竪穴住居跡掘り方（南から）

第５号竪穴住居跡掘り方セクション



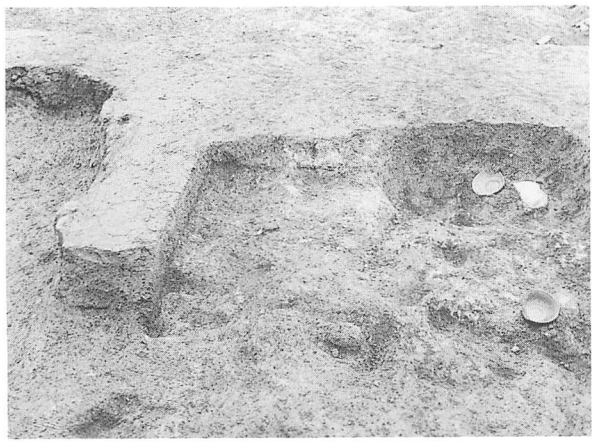
第５号竪穴住居跡カマド（南から）



第６号竪穴住居跡（南から）

第６号竪穴住居跡掘り方（南から）

図版 8



第６号竪穴住居跡カマド周辺遺物出土状況（南から）

第６号竪穴住居跡カマド（南から）

第６号竪穴住居跡カマド袖東西セクション（南から）

第６号竪穴住居跡カマド掘り方（南から）

第７号竪穴住居跡（南から）

第７号竪穴住居跡掘り方（南から）

第７号竪穴住居跡カマド（南から）

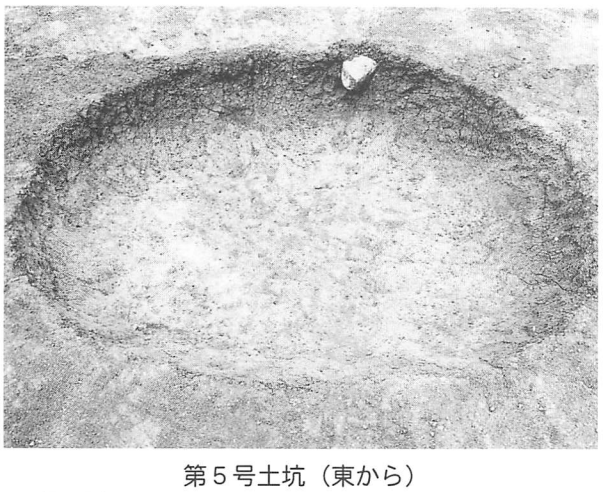
第７号竪穴住居跡カマド掘り方（南から）

第８号竪穴住居跡（東から）

第８号竪穴住居跡掘り方（南東から）

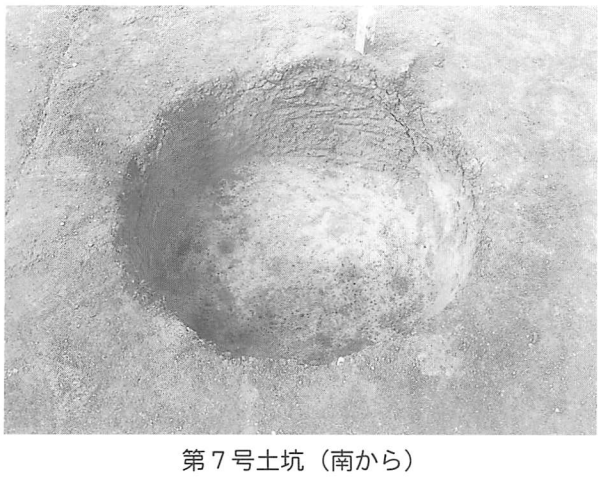
第８号竪穴住居跡カマド（東から）

第８号竪穴住居跡カマド掘り方（東から）



第５号土坑（東から）

第６号土坑（南から）



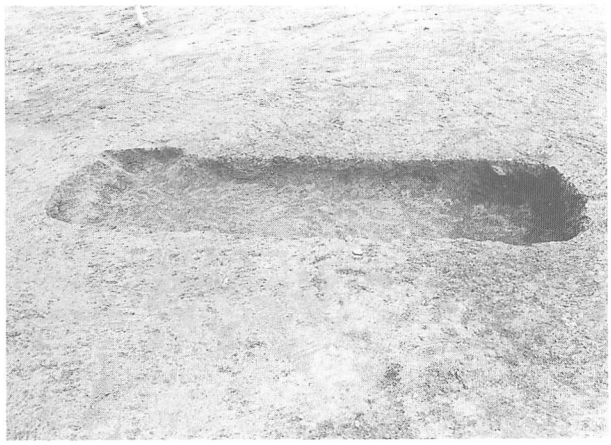
第７号土坑（南から）

第８号土坑東西セクション（南から）

図版10

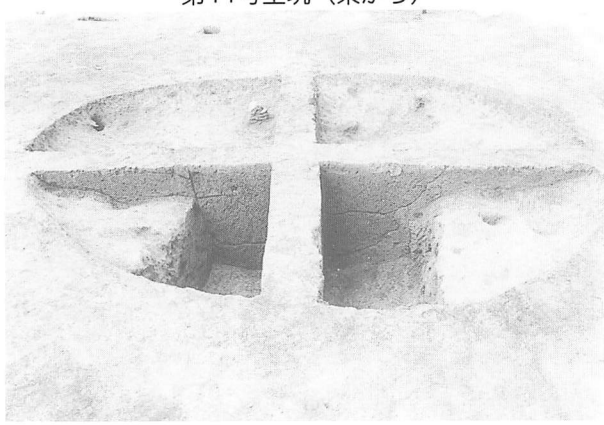
第９号土坑（東から）

第10号土坑（南から）

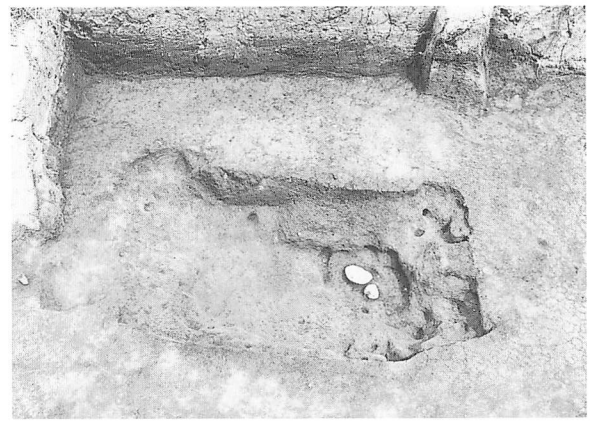


第11号土坑（東から）

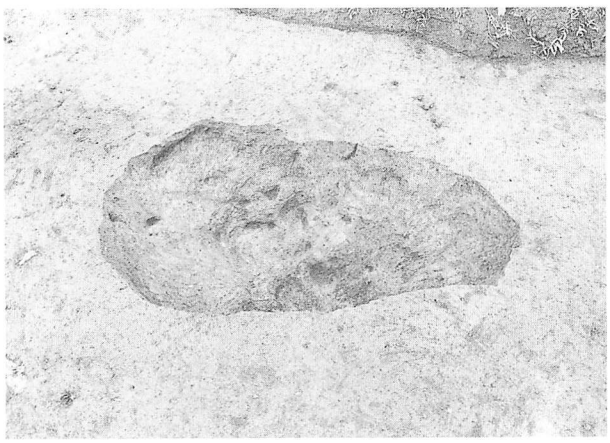
第12号土坑（南から）



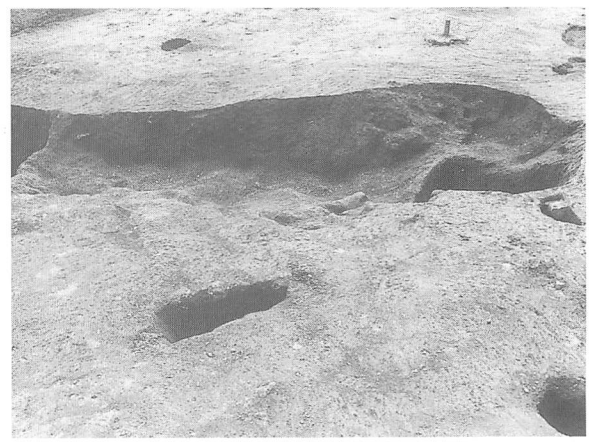
第12号土坑南北セクション（西から）



第13号土坑（南から）

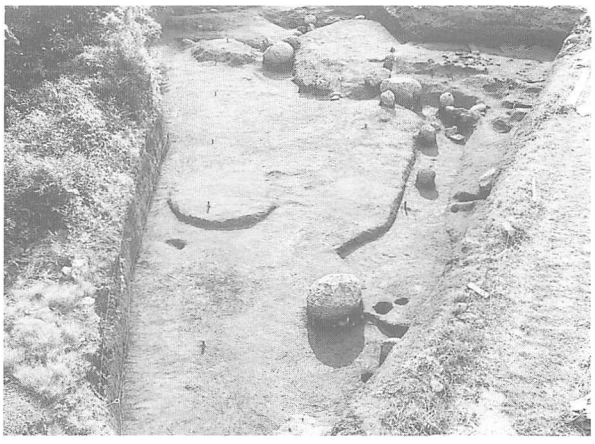


第14号土坑（北から）



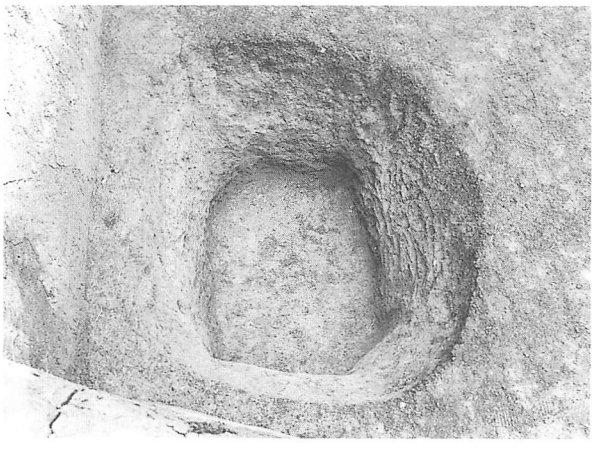
第15号土坑（東から）

Ⅰ区平地造成面・第１号溝（西から）



Ⅰ区平地造成面・第１号溝（東から）

第16号土坑（南から）



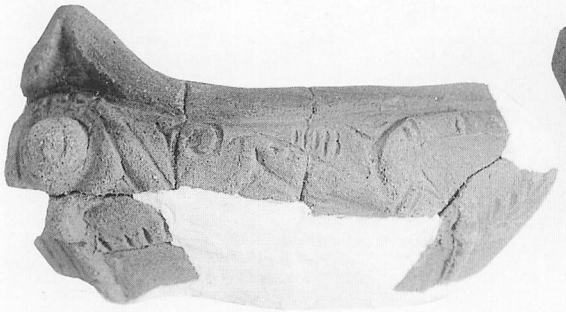
第17号土坑（東から）

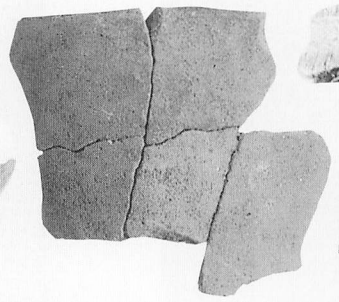
第18号土坑（南から）

第19号土坑（東から）

第20号土坑（東から）

第21号土坑（東から）


29-1


29-3

30-1

30-2

30-3

30-4

30-5

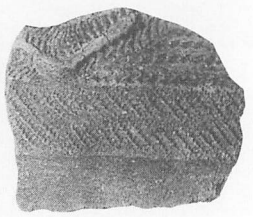
30-6

29-2

30-7

30-8

30-9


30-10

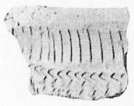
30-11

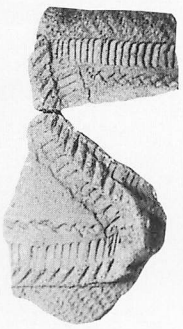
30-12

30-13

30-14

30-15


30-16


30-17

30-18

30-19

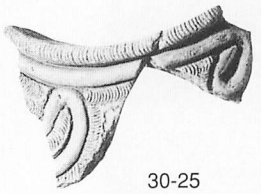
30-20

30-21

30-22

30-23

30-24

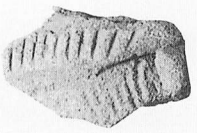

30-25

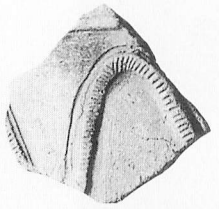
30-26

30-27

30-28

30-29

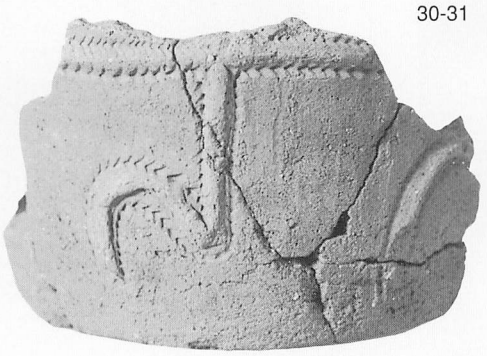

30-30

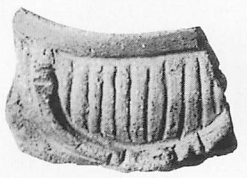

30-31

30-32

30-33

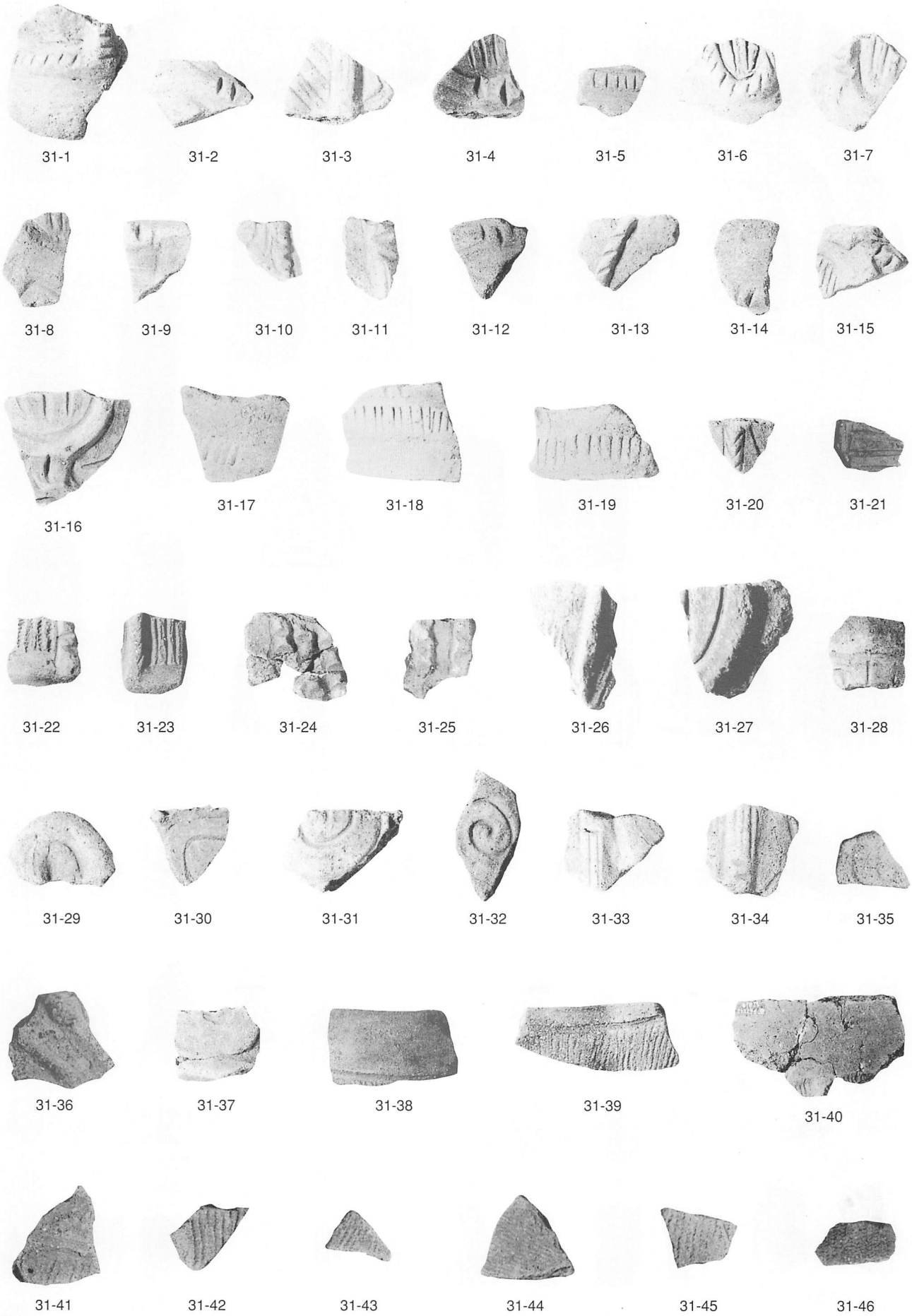
30-34


30-35

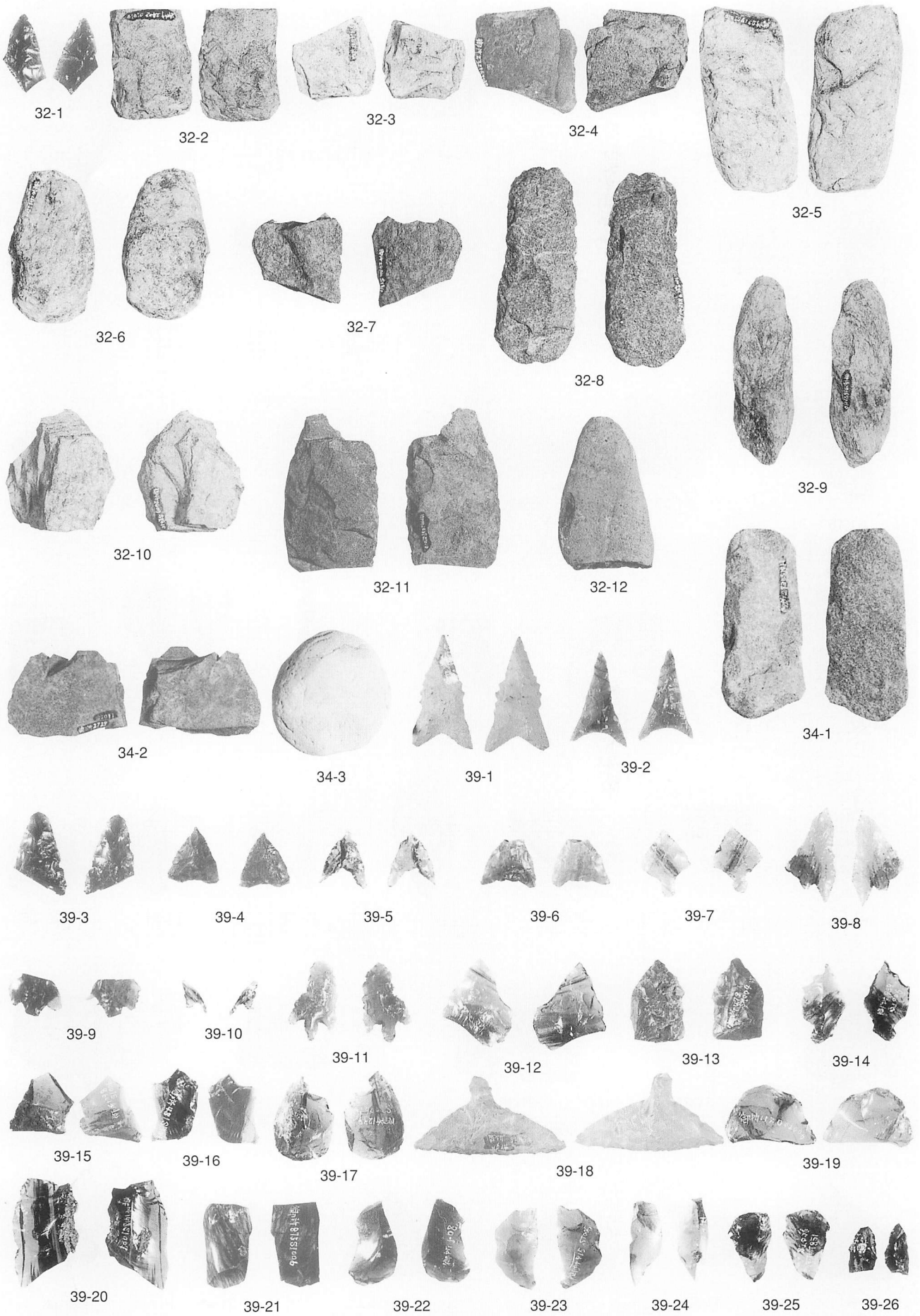

30-36

30-37

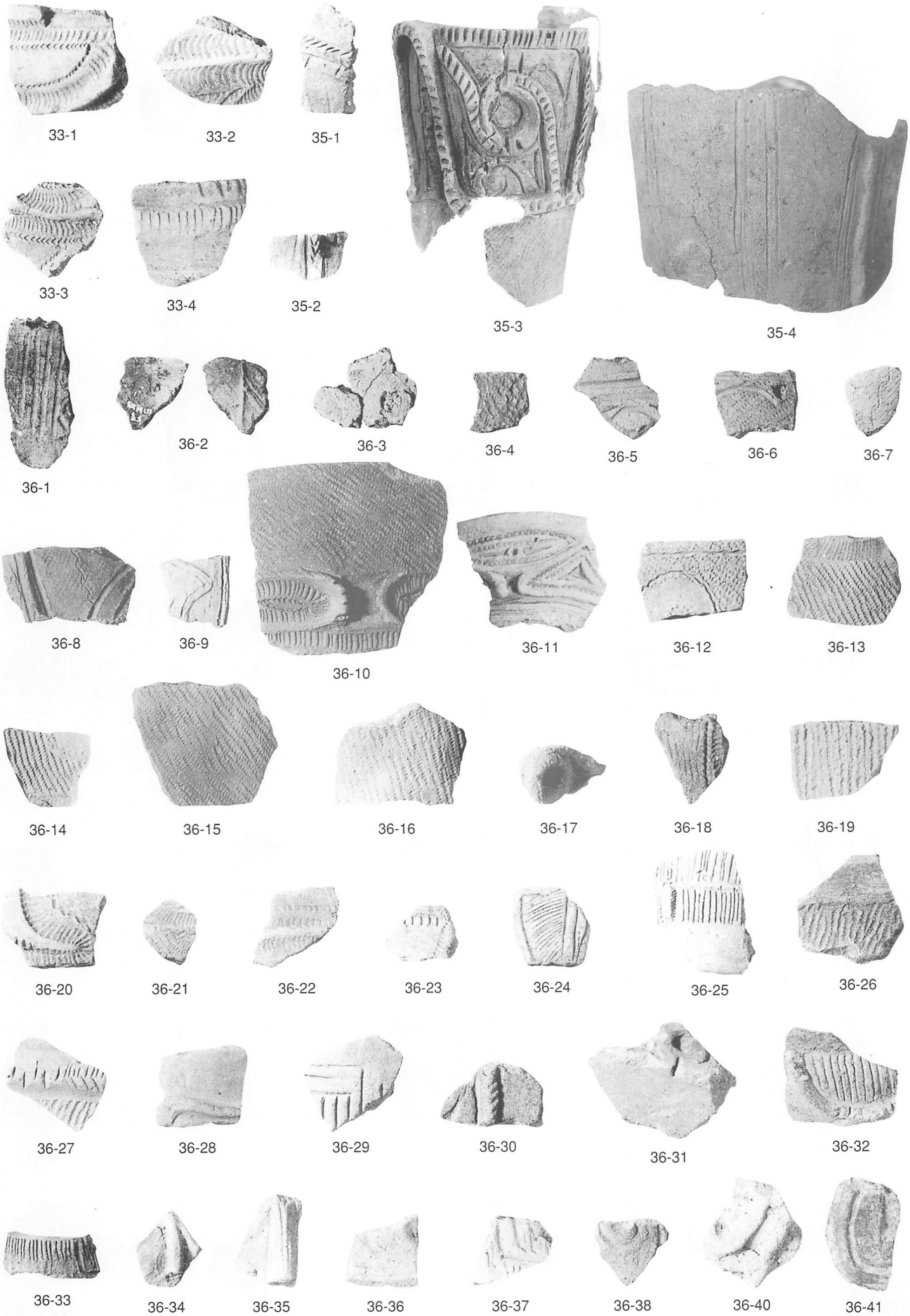
遺物　縄文土器（第29・30図）


31-1
31-2
31-3
31-4
31-5
31-6
31-7
31-8
31-9
31-10
31-11
31-12
31-13
31-14
31-15
31-16
31-17
31-18
31-19
31-20
31-21
31-22
31-23
31-24
31-25
31-26
31-27
31-28
31-29
31-30
31-31
31-32
31-33
31-34
31-35
31-36
31-37
31-38
31-39
31-40
31-41
31-42
31-43
31-44
31-45
31-46

遺物　縄文土器（第31図）

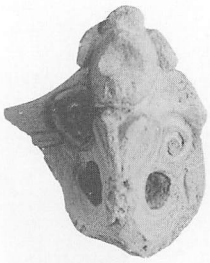


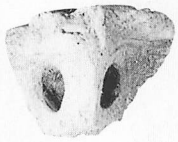
遺物　縄文石器（第32・34・39図）

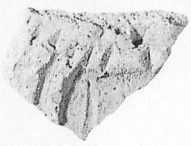


遺物　縄文土器（第33・35・36図）

図版16


37-1


37-2


37-3

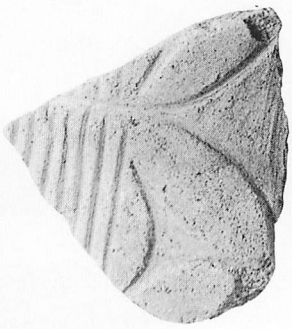
37-4

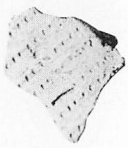
37-5

37-6

37-7

37-9

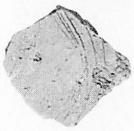

37-16


37-22

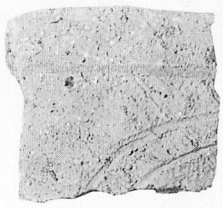
37-10

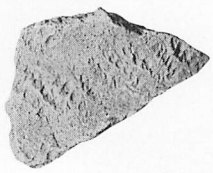
37-11

37-14


37-23

37-25


38-2


38-3

38-4

38-6

38-7

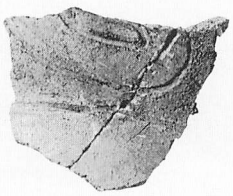
38-8

38-9

38-10

38-11

38-12


38-13

38-14

38-15

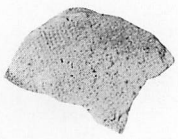
38-16

38-17

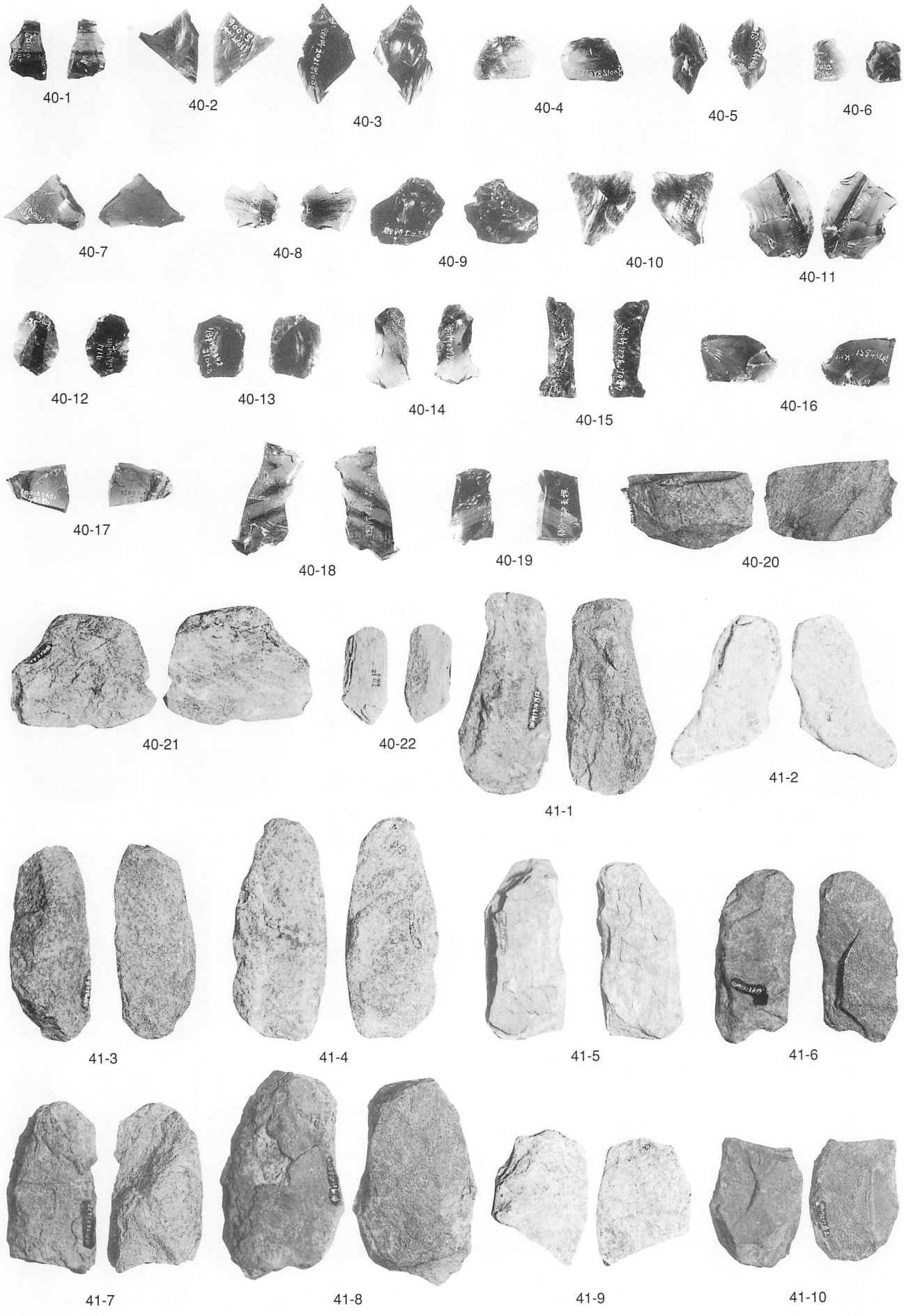
38-18

38-19

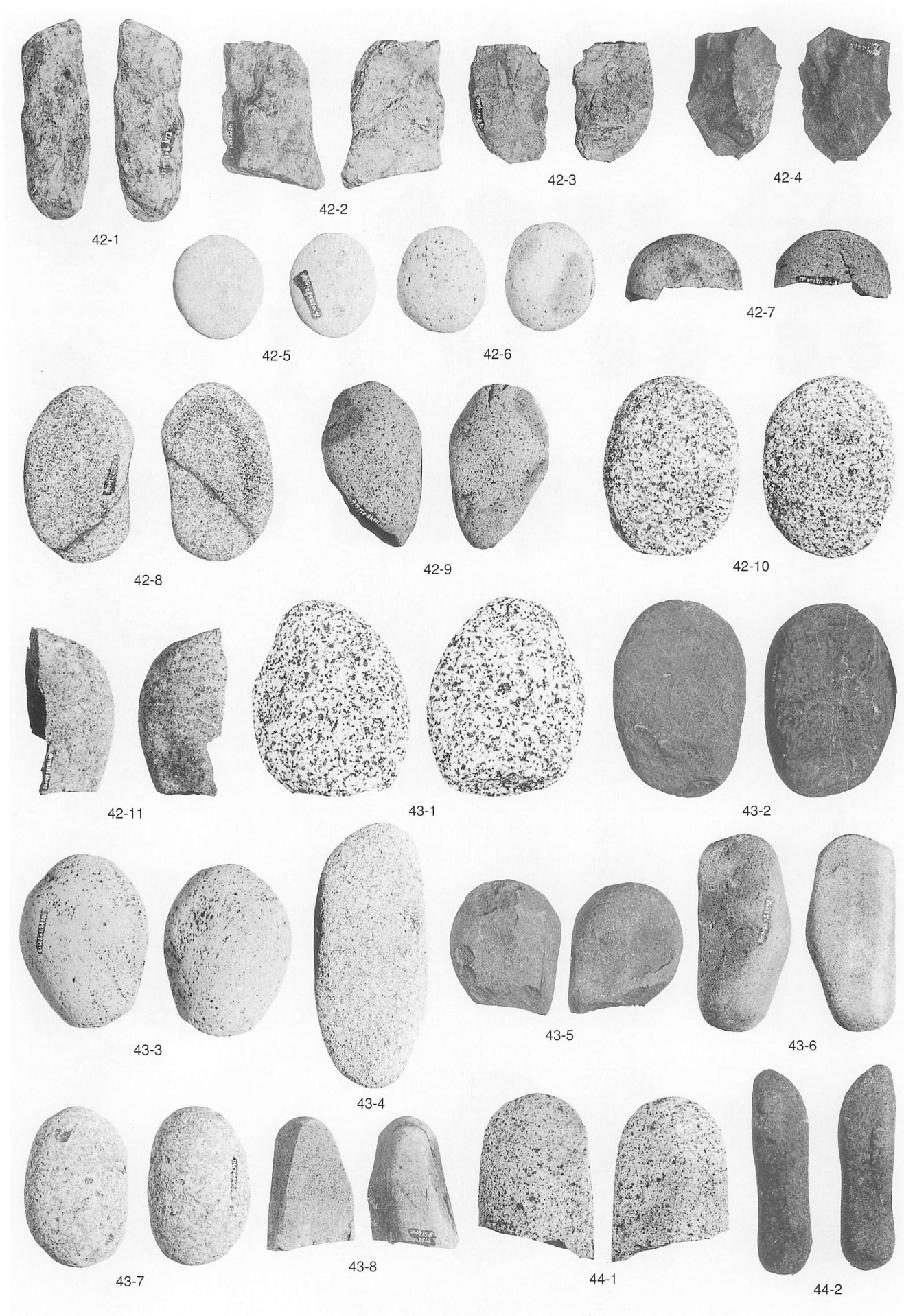
38-20


38-21

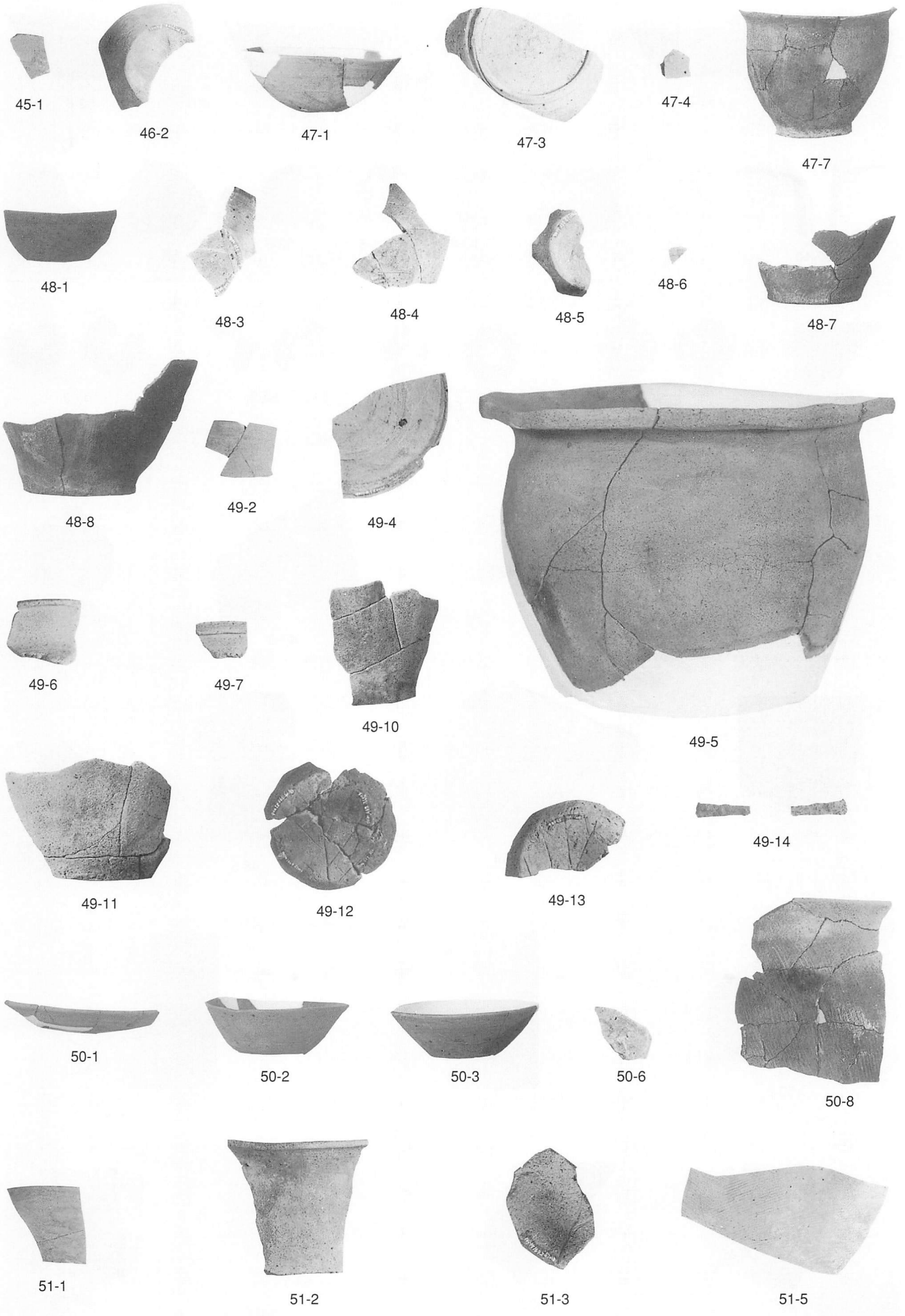
遺物　縄文土器（第37・38図）



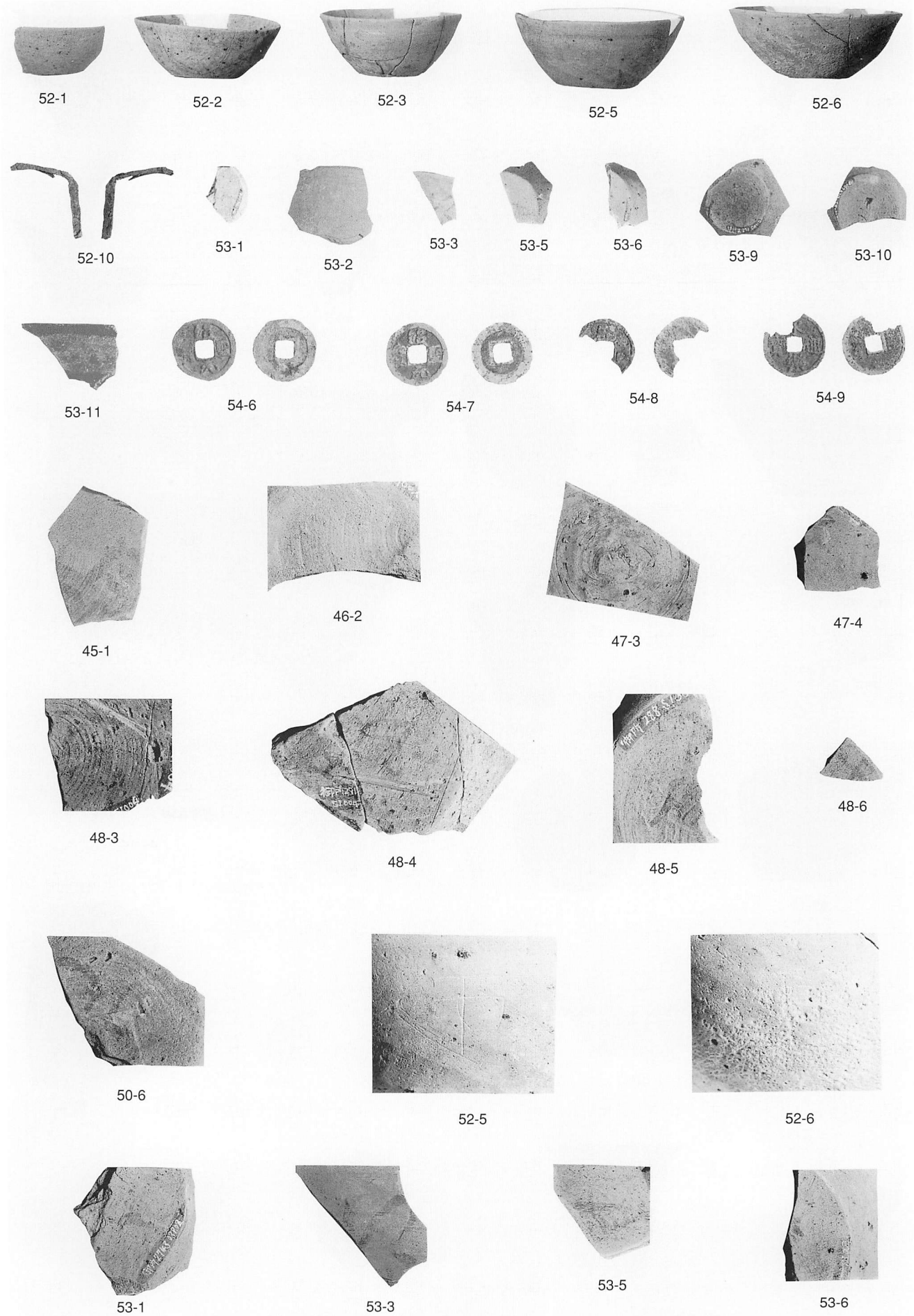
遺物　縄文石器（第40・41図）



遺物　縄文石器（第42・43・44図）



遺物　奈良・平安時代土器・陶器（第45～51図）



遺物　奈良・平安時代、中・近世遺物（第52～54図）、墨書・刻書土器拡大

大月市御所遺跡報告書抄録

ふ り が な	おおつきしごしょいせき
書　　名	大月市御所遺跡
副　　題	大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書
シ リ ー ズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 154 集
編 著 者 名	小林公治・野代幸和・網倉邦生・鈴木稔
編 集 機 関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話番号	山梨県東八代郡中道町下曽根 923　電話　055 － 266 － 3016
発 行 者	山梨県教育委員会・建設省関東地方建設局甲府工事事務所
印 刷 所	有限会社新星堂印刷
印刷日・発行日	平成 10 年（1998 年）3 月 25 日・平成 10 年（1998 年）3 月 31 日

所収遺跡	所在地	コード		位置			
		市町村	遺跡番号	1/25,000 地図名	北緯	東経	標高
ごしょいせき御所遺跡	山梨県大月市駒橋二丁目字仲下 420、420-1 他	19206	大月市教育委員会1995 93	都留	35 度 36 分 32 秒	138 度 57 分 24 秒	357 m

調査期間	調査面積	調査原因
平成 7 年（1995 年）5 月 8 日～ 9 月 13 日	1,383㎡	大月バイパス新築工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代	竪穴状遺構 焼土遺構	縄文土器 石器	縄文時代の遺物は早期から晩期までの各時代にわたる。調査範囲では明らかではないが、付近に集落などの存在が予想される。
	奈良・平安時代	竪穴住居跡 土坑 ピット群	土師器 須恵器 灰釉陶器 炭化種実 動物骨 石杵 鉄器	石杵には水銀朱および金が付着しており金メッキ作業に使用されたものと考えられる。 カカマド内からは米以外の雑穀類を中心とした炭化種実、またマイワシを含む魚骨や鳥類・哺乳類の骨が検出された。
	中・近世	平地造成面 土坑 ピット	陶磁器 渡来銭	水田等に利用か。

平成10年（1998年）　3 月25日　印刷
平成10年（1998年）　3 月31日　発行

山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第154集

大月市御所遺跡

── 大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書 ──

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1578　山梨県東八代郡中道町下曽根923
電話　055（266）3016
発　行　山梨県教育委員会・建設省関東地方建設局甲府工事事務所
印　刷　有限会社　新星堂印刷
〒400-0214　山梨県中巨摩郡白根町百々1666-40

表紙：テンテンレザー淡黄四六判Ｙ目＜160＞　カラーページ：SAキンフジ菊判Ｙ目＜76.5＞
本文：ニューエイジＡ判Ｙ目＜57.5＞　写真図版：スーパーマットアート菊判Ｙ目＜76.5＞